
聖杯を抱く騎士（シュヴァリエ）～Impossible Love～

宝來りょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖杯を抱く騎士シュヴァリエ Impossible Lover

【NZコード】

N9734X

【作者名】

宝來りょう

【あらすじ】

紫堂緋奈しじゅうあかな一六歳は、ジャンヌ・ダルクの末裔である。

修学旅行中、家族を原初の闇である精神生命体“ゆらぎ”に殺され、わけのわからぬまま復讐に乗り出すのだが。

相棒は、ジャンヌの元片腕の騎士、ラ・イール」とエティエンヌ。彼は、絶世の美貌の持ち主だが、非常に怒りっぽく説教体质。相性最悪の二人は、喧嘩しながらもなんとか“ゆらぎ”退治をはじめる。

このお話は、一人の少女の成長を描いています。（恋愛もあり）

自己中心的な少女が、さまざまな戦いを通じて人を守るとはどういうことなのかを考えていいくというストーリー。

エリーコスがくれた運命（前書き）

はじめまして、宝來りょうと申します。
拙い作品ではありますが、主人公とともに作者も成長していくた
らと思っています。

読みづらい気がしたので、前書きと後書きは、使用しないことに
しました。

この小説のウンチク（？）なんかを知りたい方は、活動報告にい
らっしゃってくださいね

エリーコスがくれた運命

> i333709 — 4272 <

エティエンヌと緋奈

イラスト・彩都めぐり

わたしは、彼を愛する。

たとえ、ヘロディアスの娘サロメのように、愛しい男の首しか手に入らないとしても。ただ一度、その冷たい口唇に口づけたいがために、わたしは、彼を愛する。

一四三一年 五月三〇日。

北フランスのルーアン、ヴュー・マルシェ広場。

高くしつえられた火刑台に括りつけられた少女の名は、「ジャンヌ」。彼女は、異端の罪により裁かれようとしていた。

(ラ・イール、こんなところまで)

ジャンヌは、群衆の中にかつての右腕であり、恋人でもあつた男を見いだした。オルレアンからルーアンまでの数百キロ、どれほどの勢いで駆けてきたのか、彼の白金の髪は泥にまみれ、騎士服は巡礼者のようにずたぼろだった。

数十メートルの距離を隔てて一人が見つめあつ。まなかいに恋人の最後の姿を移しこむがごとく。

(ジャンヌ……。ジャンヌ・ラ・ピュセル。

わたしは貴女をお救いすることが出来なかつた。

だから……こんなわたしにできることといえば、貴女の最期を

この目に焼き付けることくらいです。

愛しています。わたしは未来永劫、貴女だけを愛し続けるでしょ

(う)

ジャンヌは、ラ・イールの言葉が聞こえたかのよつにうつすら微笑むと、天を仰いだ。

『イエス様・・・・』

彼女は夢でも見るよつてうつ咳くと、一度と瞼を開かなかつた。

ふたりの刑吏が幾重にも積まれた柴に火をつける。それは瞬く間に紅蓮の焰となつて、小さな少女の身体を舐めていく。

炎に抱かれた救世の乙女は、最後の瞬間に何を想つたのだろう。己の短い人生か、それとも恋人との思い出だろうか。

だが、たとえ彼女の目交に何が浮かんだにせよ、それをけして斟酌してはならない。

人がひとりで生まれ、ひとりで死んでいくことが神代からの約束だとすれば、死に臨んだ想いは、人知れず天園まで持つていくべきものなのだから。

ここに、救世の乙女の火刑は終わり、ジャンヌの灰はセーヌ河に流された。それは、魔女の甦りを封じるための仕儀である。

だが、火刑にあつたものはほんとうに甦らないのであるつか。

『いいや、違う』とラ・イールは思つた。

重い代償を支払わされたジャンヌこそ、来世は、幸せにならなくてはならない。たとえ、その隣に自分の姿がないとしても。

ラ・イールはひざまずくと、ジャンヌの未来永劫の幸福を神に祈

つたのだった。

【追記】 後に、聖女の列に加えられる『ジャンヌ・ダルク』だが、彼女の異端の罪は、現在も取り消されてはいない。

『張り用。

その夜空に浮かぶ宝剣を焦がれるほどに欲しかった。

だが、月の宝剣は神々のもの、人の手には余る剣なのだ。
それに、欲した力は、今この腕のなかにある。

「何を見ているのですか？ 風邪をひきますよ」

耳障りのいい声がすぐ後ろからする。あたしは、その声に振り返らなかつた。今夜の月があまりにもきれいだつたから。

「月をね、見ていたんだ」

小さなアパートの窓いっぱいに三日月が映つてゐる。あたしは、窓辺に座り、時を忘れたようにみていた。

「思い出していたのですね」

「うん」

あたしがようやく振り返ると、中世の騎士衣裳を纏つた青年が真っ青な瞳を翳らせながらこっちを見ていた。

彼の名は、『エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニヨール』

この舌を噛みそうな名前を持つ青年は、もちろん人間ではない。いや、元人間といったところだろうか。本人は守護霊のよつなものだといつていたから。

エティエンヌは、あたしの母が遺したトランプに付いてきたオプションで、『導きの騎士』というものらしかつた。いくら銀で象嵌されたケースに入っているとはいえ、古くてきつちやないトランプのオプションとしては豪華すぎるかもしれない。何せエティエンヌは騎士様で、女の子が求める王子様の条件をすべて満たしているの

だから。

月光を紡いで創ったような白金の髪に、真昼の青空の瞳。まるで、昼と夜の具現といったふう。絶世の美貌を持つ彼に見とれない女など、この世に一人としていないだろつ。

けれど、あたしにとつてエティエンヌは、ただの相棒。もつとうなら、利用すべき相手だ。

「エティエンヌ、行くよ！」

あたしは、もう一度名残惜しそうに、弦月に皿をやると立ち上がつた。

すると、月光をうけて手のひらの中に^{サクセサー}継承者の徵が浮かび上がる。

あたしは、それをぎゅっと握り締めた。この運命を^{シムコ}えたすべてのものに復讐するために・・・・・。

『KEEP OUT』

黄色いテープの内側

あたしはまだ煙が燻ぶつている焼け跡に“それ”を見つけた。腰をかがめて“それ”を拾つと、手のひらでぐしゃぐしゃにする。芳香と鉄さびの匂いが鼻をついたが構わなかつた。足元に叩きつけ、思いつきり足で踏みにじる。

“それ”的花言葉は不可能。

花に一重の意味を持たせるなんてやつてくれる。

ここに“それ”を置くことは、人間には不可能。そして、おまえが家族の敵を討つことは不可能。奴らは『青い薔薇』にそう言わせたいのだ。

『継承者・・・・・』

なによ、あたしは眠いのよ。

『継承者・・・・・』

『うるさいーさつき寝たばかりなんだから起こさないでよ』

『継承者・・・・・』

あまりにもしつこい声にあたしは、仕方なく瞼を開いた。
ありつ・・・・・?

なによ、ここは・・・・・?

あたしは、ふかふかのベッドから、黒々とした深い闇に墮とされ
ていた。

しかも、目の前にはブラックホールのような大きな渦がある。ど
うやら、この渦が、あたしをたき起こしてくれた張本人らしい。
『あのさ、継承者だかなんだかしないけど、用があるなら早く言
つてくんない。明日から修学旅行だし、今夜は、早めに寝たいのよ』

あたしは、わざとじりじりあぐびをして、寝起きの不機嫌さを少し
も隠さなかつた。

『んぐるうつうひひひひひっ・・・・・・・・・』

ブラックホールは、あたしの生意気な態度に怒ったのか、突然凄
まじい回転を始め、大きく唸り声をあげた。
それでも、これを夢だと思っていた。自分が、紫堂緋奈が、こんな
想像力を持っているはずないのに。

『ふふ、お前はただの人間だな。

・・・・・の血など少しも感じられぬ。

だが、人間の世界には、“念には念を入れろ”という言葉がある

苦笑交じりの、老人が子供の我がままを聞き流すようなほんの軽い口調だった。

けれど、ブラックホールが、そのセリフを言い終えるか終えないかの刹那、殺氣のこもった恐ろしい視線を体中に感じた。底知れぬ恐怖が指先からあたしを凍り付かせていく。

だが、この恐怖は、そんじょそこらの恐怖とは違つ種類のものだ。例えば、死ぬほど怖いホラー映画とか、学校帰りに後をつけてくる痴漢とかとは。たぶんもつと本能的な闇を恐れる恐怖に似ていた。

『なによ、ただの人間で何が悪いっていうのよー。』

それでもあたしはせいいっぱいの虚勢を張った。人を呼びつけておいて、勝手なことを言ひヤツに弱みなんか絶対見せたくないなかつたから。

けれど、いつまでたっても、お化けからの返事は返らない。それどころか、急激に足元が崩れる感覚がした。

『ちよ・・・ちよつとつ・・・・・い・いやああああつ・・・・・！』

あたしは蟻地獄に落ちる蟻のように、バタバタとあがきながら、奈落の底へと落ちていった。

ブラックホールのお化けは腹の立つことに、暴力的にあたしを眠りの奔流へと戻してくれたのだった。

「おはよー！」

あたしは、寝不足で痛む頭をかかえながら階段を下りると、ダンシングテーブルの自分の席についた。ダイニングには、いつもどおりの朝があつて、あたしをほつとさせた。

新婚さんのようにいちゃつくスース姿の父と母。皿まで食べそつな勢いで、朝食を取る生意気な弟の聖樹。

動物園の熊みたいな父さんが、乗ってくれる端の焦げた田玉焼きは、あたし好みの半熟で、今日もこれからと同じ田玉が続くことを疑わせない。

悪夢だと思つてしまえばいい。さうよ、あれは絶対に悪夢。あたしは、自分に必死に言い聞かせた。

「なんだ、緋奈。おまえが食欲ないなんてめずらしいな」

田玉焼きをフォークの先でつついていたあたしに、父さんが心配そうにいった。

「ちょっと疲れなかつただけだよ」

あたしは顔をあげると、父さんを安心させるために少しだけ笑った。

もし、父さんに夢の話をしたら、『ただの夢だよ』といつて、いつものように豪快に笑い飛ばしてくれるだろ？

でも、あたしは、ただの夢だと思つことが出来なかつた。何故と問われれば、なんとなくという返事しか出来ないけれど。

「姉ちゃん、修学旅行が楽しみで眠れなかつたんだろ？ガキみたいだかんな」

分厚い食パンにバターを塗りながら茶化していくのは、弟の聖樹。

「あんたってマジ憎たらしいわね」

あたしは、隣に座つている聖樹の頭をげんこつでぐりぐりすると、ヤツがバターを塗り終えたばかりのトーストをひょこつと取り上げてやつた。

「なにすんだよ～！」

必死にトーストを取り返そうとしている聖樹の頭をなおもテーブルに押しつけてやつてからダメ押しとばかりにパンにかじりついてやる。

すると聖樹は、テーブルのうえからぐぐもつた声で、

「そんなことばっかりしてるとひとりも彼氏できないんだよー」と言つてきやがつた。

「聖樹くーん、子供のあんたにはあたしのよたはわからないよねえ。

まだまだお尻の青いお子ちゃんまだもんねえー

あたしは、聖樹に何度も子供と繰り返してやつた。中坊のくせに年上の彼女と付き合つてこるコイツが子供といわれるのを一番嫌うの知つていたから。

案の定、聖樹は、顔を赤くして怒つた。

「お子ちゃんって何度も言うなー」

姉ちやんむ、ほんとは俺がモテるからやつかんでいるんじゃないの？」

聖樹はそうこうと、勝ち誇つたようにふふんと鼻で笑つた。

（こつめ、本氣で可憐くない。今日こそ姉に対する礼儀を教えてやうじゃないの）

あたしは、バシッとテーブルを叩くと、聖樹のシャツの襟を両手で掴みあげた。

「つるせいーあんた達のせいで大樹のいたコーヒーがまずくなるじゃないの」

母さんは、白磁のコーヒーカップをソーサーに置きながら、あたしがたちをギロリとにらんだ。

（つづ、怖つーー）

あたしは、いやあたしと聖樹は、誰よりも母親が苦手である。

何故かといえば、彼女のきつい三丘眼を向けられると、何もしていなくても平謝りしてしまいたくなるからだ。

おそらく、幼児期にトラウマになることがあつたのだろうが、それをほじくり返すつもりなどあたしにも聖樹にもこれっぽっちもない。

「「母さん、ごめんなさい」」

あたしたちは、揃つてクソがつくれり丁寧に謝ると、お互いつぼを向きあいながら朝食を続けた。

その時ちょうど、キッチンから出てきた父さんが時計を指差すと

いつた。

「緋奈、もう八時だぞ！汎ちゃんが待ってるんじゃないか？」
「えつ、もうそんな時間？」

あたしは、聖樹から奪い取った残りのトーストを口の中に放り込むと、あわてて制服のジャケットをつかんだ。

「聖樹くーん。

愛しの汎子に何かお伝えしましようか？」

聖樹をからかいながら、すばやくジャケットに袖を通す。

こいつの彼女とは腹立たしいことにあたしの親友で、ふたりは去年の暮れから付き合い始めていた。もちろん、聖樹の強力な押しによつて。

「毎日、電話するからって伝えて！」

「・・・・・・」

冷やかしたつもりだつたあたしは、平然とノロけられ、わが弟を宇宙人でも見るようになつてしまつた。

「緋奈。本当に遅刻するぞ！」

父さんにもう一度せきたてられて、あたしは旅行バックを手に玄関へ急いだ。

「いつてきます！」

父さんに手を振り、あたしは、汎子と待ち合わせたセブンへ全力疾走した。時間にきつちりしている汎子は、イライラしながら待つているだろう。

急がなきや。

それなのに、あたしの足は何故か歩みを止めてしまった。

振り向いた先には五年前、両親が建ててくれた赤い屋根の家。犬を飼おうという約束はのびのびになつたままだけれど。それでも、大切な、たつたひとつのが家。

この時あたしは、悪夢を不安がりながらも、まさか家族に『ゆらぎ』の手が伸びるとは考えてもいなかつた。

もちろん、これが我が家を見る最後になるなど頭の片隅にもない。

あたしにとつて日常とは、退屈に平和に変わりなく流れていくもの
だつたから。

九月の雨。

あたしは、今だかつて「これほど雨を冷たいと思つた」とはない。
肩を抱いて身体をぶるつと震わせる。まるで氷雨のじとく、体の
芯まで凍りつかせるようだ。

「いやああああっ・・・・・！」

力をなくした腕から、バックが水溜りに落ちる。それさえも氣づ
かない。田のまえの惨劇ゆえに・・・・・。

古の都、京都＆奈良。

四泊五日修学旅行から帰ってきたあたしが見たのは、すっかり
焼け落ちた我が家と、真っ黒焦げになつた父母の姿だつた。
もし、強風による新幹線の遅れがなかつたら、あたしも両親と一緒に
緒に灰になることが出来ただろう。

警官の制止を振り切つて、焼け跡に入つたあたしは目を疑つた。
かつて、リビングだつた場所に一輪の青い薔薇。全てが死に絶え
た奥津城おくつきに瑞々しいそれは、かえつて禍々しくて。

「まさか・・・・・・」

思わず滑り出た言葉が犯人を教える。

『念には念を入れる』

もしかしたらヤツは、あたしを殺すために火事を起こしたのでは
ないか。

だが、新幹線の遅れのせいで、あたしというターゲットを殺し損
ねてしまつた。それが悔しくてヤツは、嫌味な挑戦状を叩きつけて
きたではないだろうか。青薔薇の花言葉まで使って。

ただ、ひとつだけ不可解なことがある。どんなに手をつくしても、

聖樹が見つからなかつたことだ。父母はお互ひを底いあつよつに折り重なつて、焼け死んでいたといふのに。

いつもの帰宅時間、遺留品などから聖樹は家にいたはずで。もし、出かけていたとしてもすぐに家に戻つたろう。ラブラブな彼女の帰りをあれほど待ちわびていたのだから。

けれど、一週間がたつても、聖樹があたしのもとに帰ることはなかつた。

ファティマの預言書　?

東京都中央区、京橋二丁目。

東京駅から歩いて十分ほどにある、時代に取り残されたような古いビル。

五階に上がるまでにたつぱり三十秒はかかるだらうエレベーターに乗り、突き当たりのドアを開けると、ビルと同じ年月を生きていたと思われる男があたしを待っていた。

「紫堂黎子様が遺されたのはこれです。」

小さな、中国人のコックですらダシをとるのを嫌がりそうな、シワだらけの手が差し出した箱をあたしは、しぶしぶ受け取った。このビルの主、神原という老人は、母が雇つた弁護士だった。

彼と初めて会つたのは父母の通夜の晩。

もし、この弁護士が弱々しい老人でなければ、あたしは、彼の言葉を聞き入れることはなかつたろう。

その後、神原さんはこれといった親戚のないあたしの後見人となり、何くれとなく面倒を見ててくれた。今では彼を、祖父が生きいたらこんな感じなのかもしれないとすら思つている。

「ト、トランプ・・・・？」

母さんの遺品とは、なんと銀のケースに入った古びたトランプだった。

（なんでこんなものを？）

普通、母から娘への遺品といえば、もう少しロマンティックなものではないだろうか。

「はい。それは代々黎子様のお家に伝わってきたものだそうで」

神原さんは、不器用な手つきで一人分のお茶をいれるといった。そういえば、母方の曾祖母という人はフランス人だったと聞く。

外交官だった曾祖父がフランスに駐在していたときに、ふたりは恋

に落ちたのだと云う。

けれど、もともと身体の弱かつた彼女は、自らの子供と引き換えに還らぬ人となってしまった。

曾祖父は、仕方なく生まれたばかりの祖母を連れて帰国した。だから、母はおろか、祖母さえも曾祖母の顔を知らない。残された写真からすると、儂げな白い花のような美少女であるが。

それなのに、何故か一代挾んだあたしと聖樹にはフランスの血が
色濃く出てしまった。

明るい茶色の髪に、琥珀の瞳。すんなりと伸びた手足に、白い肌。
たとえるなら、西洋と、東洋のじつちやませといったふう。

初めて会った人には、たいてい『ハーフなの?』と聞かれる。最近では、いちいちクオーターと説明するのも面倒くさいので、『まあ、そんなところ』とごまかしている。

「そんな」とよつ、警察の調査はすすんだんですか?」

あたしは神原さんが入れてくれたお茶を手に取ると、顔を上げた。

あたしにとって、遺品とはいなんの役にもたたないトランプよ
り、少しでも犯人の手がかりを知ることの方がはるかに重要なのだ。

「ガス爆発」ということでの調査を終えるようですね」

- 1 -

今までの経過から、警察がそういう結論を出すだろ」とわかつて
いた。それなのに何故だろ、世界中からそっぽを向かれたような
気分になるのは。

あたしは、ガタガタと震え、湯飲み茶碗を落としそうになるのを

必死で堪えていた。

「それで聖樹は・・・・・？」

温くなつたお茶を「ぐくりと一息に飲む。

「それも・・・・・家出ということで決着させようのです」漸くといった態で吐き出した神原さんの声がどこか遠くに聞こえる。

彼だつてこれをあたしに伝えるのはつらいのだ。

でもあたしは、もうこんな茶番に耐えることができなかつた。

ガス爆発・・・・？

そんなことがあるもんか。まるで結界でも張つたように紫堂家だけを一瞬にして焼き尽くすなんて。しかも、彼らだつて言つていたではないか、『誰も爆発音を聞いていない』と。

彼らは怖いのだ、この事件に関わるのが。

どこからあがつたかもわからない火の手。

ありえないほどの高温で、一瞬にして焼かれた家。

それより何より、存在したはずの人間・聖樹が煙のように消えうせた事実が。

聖樹と冴子の二人は紫堂家が火にまかれる寸前まで電話していて、冴子は携帯の向こう側に両親の笑い声を聞いたといつ。

聖樹は、家が焼かれるあの瞬間、間違なく家にいた。冴子が帰つてくるのを待ちわびて。

それなのに何故、聖樹の遺体だけがないのか。まるで、瞬間移動テレポーテーションでもしたようだ。

「わかりました」

あたしは湯呑み茶碗を茶卓に戻すと、立ち上がった。

もうここには用がない。どんな手段を使おうとも両親の敵をとると決めた今、無駄に出来る時間など少しもないのだ。

「緋奈さん、待ってください！」

神原さんは、ノブにかけたあたしの手を老人とは思えない力でつかむと言つた。

「まだ、お話があります」

いつにない彼の強い調子に驚いて振り返ると、そこには何かを思いつめた人間がいてあたしは、彼が自分と同じくらい心を痛めているのを知った。

「これを……」

神原さんがソファーに戻ったあたしに白い封筒を差し出した。

「いいですか、緋奈さん。

あなたのお母様は『自分たちの死を予感しておられました。そして、それに向けてあらゆる準備をなさつたのです。

ところで、緋奈さんは『ファティマの預言書』を存知ですか?』

母さんが死ぬのを予感していた・・・?

ファティマの預言書・・・・・?

あたしの頭は『』だらけになつた。

『ファティマの預言書とは、一九一七年五月十三日、ポルトガルの小さな村ファティマで、聖母マリアが告げた三つの預言のことです。

第一の預言は『第一次大戦の終結』

第二の預言は『第二次大戦の時期と核兵器の出現』

そして、二〇〇〇年によく公開された第三の預言は『ヨハネ・

パウロ一世の暗殺』というものでした。

ですが、当時の法王パウロ六世（在位1963～1978）が、読んだ途端にあまりの恐ろしさに失神したといわれる第三の預言が、ただの法王の暗殺であるわけがありません。

前法王ヨハネ・パウロ一世は二〇〇〇年に来日した際、あなたの母様に真実の第三の預言をお話しになつたのです

そこまでを一息に話した神原さんは冷めきった緑茶をグイッと飲み干し、荒い息を整えていく。

あのう、神原さん。話がでかくなつてません？あたしは、両親の敵がとりたいだけなんですよ

「『ハネ・パウロ一世』がお話しになつた眞実の第三の預言とは『ゆらぎの世界侵略と救世の乙女』についてでした」

救世の乙女・・・・? まるでジャンヌ・ダルクみたい。

神原さんつたら年寄りのくせに案外ロマンティックなんだから。

あたしは、ニヤニヤ笑いながら尋ねた。

「それってジャンヌ・ダルクみたいなのが現れて世界を救つちやつてことですか?」

それなのに、神原さんは、本当にマジで、

「緋奈さん。『ゆらぎ』と戦う救世の乙女とはあなたのことですよ」と、こつてよ」した。

「はあ・・・・・?

もしかして神原さん。インフルエンザに罹つてタミフルを飲んじやいました?」

七十過ぎても、インフルエンザになるんだあとおもいながらたちは、後見人でもある弁護士の顔をまじまじと見つめた。

「タミフルも飲んでませんし、インフルエンザにも罹つてません! 緋奈さん、あなた、本気にしてませんね?」

「やつだあ~。そんなの、当たりまえじゃないですかあ~。

あたしは、どこにでもいるただの女子高生ですもん。

RPGじゃあるまいし、魔法も使えないのに世界なんか救えません!」

あのね、神原さん。今あたしは自分のことだつて、手に余つてるのよ。『乙女』つていうところは当たつてゐけどさあ。なにせ彼氏いない歴年の数なんだかひ。

うつ、まあ、それはそれとして・・・・・。

でも、世界を救うなんていうのは、他のお暇な方をあたつてちょうどいい!

「RPG、なんですか、それ・・・・?

まあ、緋奈さんがお信じになれないのも無理はありませんが。とりあえず、黎子様からのお手紙をお読みになつていただけませんか

？」

神原さんはこめかみを揉み解しながら、ずいとばかりに手紙を押し付けてきた。

彼の迫力に負けて手紙を受け取ったあたしは、前髪を止めていたピンをはずすと、ビリビリと一気に封を破つた。

便箋には毎日じばっかり打つていたにしては、予想外に整った母の文字が踊っていた。

『紫堂絢奈さま。

あんたがこの手紙を読んでいることは、あたしたちは死んじやつたわけよね。

でもね、絢奈。親は先に死ぬもんなのよ、早いか、遅いかの違いはあつてもさ。だから、くよくよしなさんな。

あたしは、大樹とあんたたちに出逢えて幸せな人生だった。少しの後悔もないわ。

でも、あんたがこれから先、厳しい戦いをしていくかと思うと、ちょっとびり心配かな。

ところでそんなあんたにとつてもいいお知らせ。

そのトランプには、ステキなオプションがついてるの。しかもめちゃくちゃいい男。これからは彼と一緒に生きて行きなさい。

絢奈、最後にひとつだけ言つとくわ。

もし、あんたがイヤなら世界なんて救わなくていいのよ。あんたは、あんたの好きなように生きていきなさい。それだけが、あたしと大樹の願いなんだから』

手紙を読み終えたあたしは、なんだか笑ってしまった。手紙の中の母さんが相変わらずだったから。

無類の面白がりに加えて、羨ましくなるくらいポジティブで。あたしは、そんな母さんが大好きだった。かなり苦手だつたけれど。『わかりました。つていうか、まだわからないことだらけなんです

けどね。

とりあえずトランプのオプションについてはなんなんですか？」

あたしは、ハンカチで鼻水が落ちてくるのを防ぎながら言った。
「代々の継承者を守護する騎士だそうです。」

黎子様は『導きの騎士』といわれていましたが

ふーん、導きの騎士ね。今度はファンタジーもどきかい。

「それで、その導きの騎士さんとやらには、どうやつたら会えるんですか？」

「さあ、わたしにはわかりません、彼に会えるのは継承者だけです
から。

ただ、あなたがそのトランプを持っている以上、そのひきひょう
こり顔を出すのではないですか？」

神原さんは、さもおかしそうにクスクスと笑った。

この時、神原さんが意味ありげに笑った意味を後らしみじみ知る
んだけど、それどころじゃなかつたあたしは、必要以上に突っ込ま
なかつた。まあ、この時突っ込んだからって、アイツの激烈な
性格が変わるわけじゃないんだけどね。

「そうですか。

とりあえず、今日は帰ります。色々ありがとうございました」「
きつちやないトランプを手に事務所を出ようとすると、妙に明る
い神原さんの声があたしの背中を追ってきた。

「緋奈さん、わたしは、あなたという犠牲がなければ救えない世界
なんてぶつ壊れてしまつてもいいとおもつていますよ
「・・・・・」

あたしは、振り返らずにそのまま頷いた。

神原さんの言葉は、とてもありがたかったけど、あたしは、自分
が『救世の乙女』だなんて少しも考えていないかったのだ。

相変わらず今にも止まりそうなエレベーターから降りると、目が

覚めるような明るい秋の空。昨夜の雨がスモッグを浄化し、東京の空をきれいに晴れ渡らせたのだろう。

何か進展したのかな？

神原さんは『ゆらぎ』と呼んでいた。たぶん、あの大きなブラックホールのことだろう。

今まで何の手がかりもなくて、イライラさせられていたことを考えれば、これは間違いなく進歩だといえる。

でも、今のあたしには、世界なんてどうでもよかった。ただ、家族と幸せが続いたらう毎日を奪ったヤツが許せなかつた。たとえ、母さんが何の後悔もないといつてくれたとしても。

そう考へると、復讐は死んだ人間のためでなく、残されたものが生きていくために行なうものなのかもしけない。だから、それが為ならどんなことでもしよう。

あたしは、久しぶりに雲ひとつなく晴れ渡つた東京の空にこぶしを振り上げて誓つたのだった。

「やれ、やれ、東京に行くとやっぱ疲れるわ」
ようやくアパートに辿り着いたあたしは大きく伸びをすると、「
イバックから一冊のノートを取り出した。

そのバックはもちろん、ノートさえまつさらの新品である。
あの事件は家族ばかりでなく、慣れ親しんだ全てのものを奪い取
つていった、帰る場所さえも。

ここ、神原さんの借りてくれたアパートは家具家電付きで、持ち
物といえば修学旅行に持つていった旅行バックひとつだったあたし
には、心底ありがたいものだつた。

十畳の部屋に作りつけられたダイニングテーブルにノートを広げ
ると、頬づえをつく。

レトルトカレーを突っ込んだ鍋があげるシュンシュンという音を
聞きながら、あたしは、今までの出来事をひとつひとつ整理してい
つた。

まあ、『ファティマの預言書』とかの話は、なんかの間違いだと
しても、あたしには、『やらぎ』とやらから、狙われる理由がある
のだろう。ヤツは、夢の中で繰り返しあたしを『継承者』と呼んだ
のだから。

それが母の残したトランプの『継承者』だとするなら、トランプ
が謎を解く鍵ということになりそうだ。あたしは、神原さんから渡
されたトランプをバックの上から触れてみた。

その時、キッチンから湯の沸きかえった鍋のゴトゴトいう大きな
音が耳に入り、レトルトカレーを温めていたのを忘れていたあたし
は、勢いよく立ち上がった。その拍子に膝の上のバックが落ちてしま
った。口が開いていたせいで中のものが全部ぶちまけられている。

まあ、仕方ないや、後から拾えればいいか。あたしは、とりあえずキッチンへ向かつた。

「腹が減つては、戦は出来ないってね」

冷蔵庫の中から出来合いの春雨サラダを取り出すと、レンジの上に置かれたデジタル時計がパラーンとめくられ、14：16分を示した。とたんお腹がグーとなる。

木製のトレイに山盛りのカレーライスと春雨サラダ、カツプのミニネストローネを乗せ、部屋に戻ろうとしたあたしは、しばらく自分の目を疑つてしまつた。

「えっ・・・・・！？」

さつきまで誰もいなかつたはずの部屋に『キングアーサー』ぱりの騎士様が例のトランプを手に不機嫌そうに立つていたのだ。我ながらよくもトレイを取り落とさなかつたものだと思う。

念のため、もう一度目をこすつてみる。

どうやら夢じやないらしい。

午後の光にきらめく白金の髪は、肩に届くほど。そして、ブルーサファイアの瞳は、切れ長で高い鼻梁へとつづく。薄い口唇が歪められているのさえ映画のワンカットのようだ。

モデル並みの身長と鍛えられた体躯まで持ち合わせた男は、ハリウッドスターも到底及ばない恐ろしい美貌の持ち主だった。例えるならギリシア神話の太陽神アポロン降臨といったふう。

「Who are you？」

あたしは、唐突に登場した美神に思い切つて片言の英語で話しかけた。

「記憶力の欠如」

彼の第一声は、それだつた。聞きほれてしまつほどの美声だとうのに、妙に無機質。

「日本語、しゃべれるんですか？」

「あなたは、とことん記憶力がないよつですね。」

その上危険予知能力も低い」

むつ、なんで不法侵入してる外人に罵倒されなきやいけないわけ？あたしは、トレイを置くと、テーブル越しに男をにらみつけてやつた。

それにしてもこっちがいい加減気分を害してるとこりのとて、彼は不機嫌そうに眉を寄せたままで。しかも次の言い草がさらにむかつくのよ！

「あなたは、バカですか？」

見知らぬ男がいきなり現れたらまず逃げるべきではありますか？」

「逃げる・・・・・？」

「そう、こんなふうにされないうちにね

「えっ？」

いきなり肩をつかまれて、後ろの壁に痛いくらい叩きつけられた。一本の腕が作り出す甘やかな牢獄の中、容赦なく髪をつかんだ白い指に思いのまま仰向かされる。

それなのに、男の瞳を覗き込んだ刹那、あたしは、がたがたと震えが止まなくなってしまった。まるで、雷に怯える小さな女の子のように。

彼の瞳は、夜闇を切り裂く一條の光、罪人を断罪するための。人の形をした稻妻は、冷たい手を頬に伸ばし、接吻くちづけという罰を課そうとした。

「あんたのしたいことをしたらいいじゃない！」

あたしは、やけっぱになつて叫んだ。

もし、自身を差し出した代償に彼という剣つるぎを得られるのなら、この見も知らぬ男に抱かれてやつてもいい。神の雷など恐れるものか。あたしは、どんな手段を使おうとも自分の運命に復讐ふしゅうすると決めたのだから。

「これ以上、無くすものなんかないんだから」

あたしは、口唇を突き出すと、大人しく瞼を閉じた。

「緋奈・・・・・・」

唐突に男の腕が緩んだ。あたしは、激情といつかの稻妻が鎮まつたのを知った。

「導きの騎士さん、あなたの名前は？あたしは、紫堂紺奈あたしは、弾んだ息を整えるとイスに座り、目を瞬かせている男の名を尋ねた。

「ラ・イール・・・・」

「ラ・イール。『怒れるも』といつ意味ね。それはあなたの苗字？」

「いいえ。あだ名です。

本当の名は、エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィーモール「ふうーん。じゃあ、エティエンヌ。あなたの知っていることを話してくれる？」

あたしは、さも当たり前のようにお願いすると、恐るしげほどこの部屋に不似合いな騎士様に向かいの席に座るように促した。でも、エティエンヌはいつまで待っても座ろうとしない。いいかげん痺れを切らしそうになつた頃、ぽつりといつた。

「ラ・イールと呼んでいただけませんか？」

「いや！」

一言の元に断つてやると、エティエンヌは震えるよつて眉を動かした。

「あなたのお母様はわたしをラ・イールと呼んでくださいました」「だから・・・・？」

「ラ・イールと呼んでください！」

「いや！だってあんた、あたしのこと維奈つて呼んだじゃない。だから、あたしもあんたのことエティエンヌつて呼ぶわ！」

するとエティエンヌは、あきらめたようにがつくり肩を落とした。

ふふつ、やつた。VICTORY！対人関係はね、最初が肝心なのよ。どうせ顔じや勝てないんだから、立場くらい優位にしなき

や
ね。

あたしは、青筋の浮いたエティエンヌの顔を見ながら、さも可笑しそうに声を立てて笑つてやつたのだった。

ファティマの預言書　?

「緋奈。あなた、性格が悪いといわれませんか?」

あたしがすっかり冷めてしまつたミネストローネをスプーンで口に運んでいると、お行儀良く足をそろえて座つている騎士さまが聞いてきた。

「はんて、ほんなほど、ひふの?」

「しゃべるか、食べるかどっちかにしてください。まつたく行儀の悪い」

「仕方ないじやん。死ぬほどお腹が空いてたんだから。それに、なんであなたが他人の性格をじつじつわけ? あんたにだけはとやかくいわれたくないんだけど」

「それはどういう意味ですか! ?」

また、また一触即発の危機。

エティエンヌって『怒れるもの』といつ一つ名なだけあって、本当に怒りっぽいのよね。今も眉間にびつちり青筋を浮かべている。

「エティエンヌ。いい加減怒るの止めなよ。

あんたのせいで少しも話が進まないじやん

ようやく食べ終えた食器をキッチンのシンクに下げる、あたしは彼の眉間のシワをぐじぐじと伸ばしてやりながらいった。

「だから、エティエンヌと呼ばないでくださいと・・・・・。

あつ・・・!」

また、自分が話を脱線させていたことに気がついたエティエンヌが口元に手をやつた。

「緋奈は、わたしが導きの騎士だと気づいていたのですね。それで先ほどバカだといったことは撤回しますよ。」

それで、何をお聞きになりたいんですか?」

「全部・・・といいたいところだけど、とりあえずは『ゆうれい』について教えて」

「いいでしょ。あれらは原初の闇より出でて、人を滅びに向かわせる存在。

緋奈、あなたは創世記を読んだことがありますか？」

エティエンヌは、蒼色のとびつきりきれいな瞳で、真正面からあたしを見つめてくる。

「旧約聖書の・・・・・？」

「ええ。創世記の冒頭、『神が光よ、あれ』と仰せられたとあります。そして、昼と夜が別たれた。では、光は昼、闇は夜を指すことになりますよね。

ですが、光を呼び、昼と夜を創つても、なおも闇は地にあふれかえつていた。そこで神は仕方なく、残った闇を地中深く封じました。

けれど、エデンから追われた人間が地に満ちると、負の感情が積もりはじめ、封じられた闇を呼び覚ましたのです

「それが『ゆらぎ』？」

「はい。便宜上彼らといいますが、『ゆらぎ』はひとつの大好きな意思であり、無数に枝葉のわかれた精神生命体でもあるのです」

「へえ。でも、そんなのが何であたしを殺そうとするの？」

「それは、あなたがわたしの愛した少女『ジャンヌ・ラ・ピュセル』の末裔だからです。

ジャンヌが神から『えられた使命は、フランス一国を救うただそれだけのものではなく、目覚めた『ゆらぎ』を封じ、この世を平和に導くことだつたのです。

ですが、彼女はその使命を完全に果すことができませんでした。そして今、ジャンヌがしとめ損ねた『ゆらぎ』は、再び力をつけ、この世を我が物にせんと動き始めたのです。

いいですか、緋奈。彼らは、生まれ出でてよりこの地球を原初の混沌とした闇の世界に還したいと願つているのですよ

彼の話は、あまりにも荒唐無稽だった。エティエンヌの口から語られるのでなければ笑い飛ばしたいほどの。でも、彼がここに存在

する、それが真実であることの証しなのだ。

「エティエンヌ。あたしにはなんの力もないわ。どんなに父さんと母さんの敵を討ちたいと願つてもね」

あたしはテーブルに目を落とすと、血がにじむほどにこぶしを握り締めた。

「いいえ。力はすでにあなたの中に。トランプがあなたの助け手となるでしょ？」

そういうと、エティエンヌはトランプのふたを開け、出したカードをテーブルに大きく広げた。

そこから、白く長い指でハートのジャックを選び出す。

「これは、わたしのカードです。

いいですか、このトランプの各スート《トランプのマーク》、ジャック、クイーン、キングにはそれぞれルーラー《支配者》がいて、あなたのエナジーが満ちる」と新しいファクリティ《能力》を授けてくれます。

そして、すべてのエナジーが満ちれば、あなたは全部で12のファクリティを得ることができるでしょう

「ふーん。どんなファクリティが得られるの？」

「さあ、それは得たときのお楽しみですね。

それより、ハートのジャックのファクリティを欲しくはありますか？」

「ぐ、くれるの？」

「ええ、今までには丸腰で敵に立ち向かうようなもの。

お立ちなさい、緋奈」

エティエンヌは躊躇いがちに立ち上がったあたしの前にひやりとしきひざました。

「巡れ、因果律！ 神の英雄、聖天使ガブリエルよ。この者をサクセサー《継承者》足らしめよ！」

刹那、虚空に振り上げた彼の左手からおびただしい光が溢れ出し、部屋中にあふれた。

エティエンヌは、あたしの手を額に押し頂くようにしてから、手のひらの中心に口づけた。すると、彼の口唇が触れた場所に小さな刻印が刻まれる。

「オリーブ…………？」

「はい。オリーブは聖天使ガブリエルの標しべです」

「ふーん。それはいいんだけどさ。あんた、いつまでキスしてんのよ？」

「イヤですか？」

上目遣いの、潤んだ瞳でみつめられて、あたしは、考えられないほどドキドキしてしまった。

「イヤつて、あんた…………」

エティエンヌは、とっさに引き込めようとしたあたしの手を強引につかむと、手のひらの中心をゆっくりと舐めあげた。すると、それだけのことなのに何故だらつ、指先から甘い痺れが広がっていく。

「あつ」

「感じてしましましたか？」

絶対こいつ、あたしで遊んでる。

まったく、なんつう騎士さまだ。つぐづぐ先が思いやられるわ。

「エティエンヌのバカ。このセクハラ親父！」

あたしが掴まれた手をぶんぶん振り払いながら罵ると、エティエンヌは、

「セクハラ親父とはなんですか！わたしは女性からそんな言葉を頂いたことはありませんよ」とこめかみをピクピクさせながらいった。

「なによ、少しばっかり顔がいいからって。

大体あんた、何百年生きてるわけ？親父なんていつてもらえるだけありがたいと思いませんよ！」

すぐさまあたしが言い返すと、エティエンヌもエティエンヌで少しも黙っちゃいない。

「あなたは今までの継承者の中で最悪の礼儀知らずですね。
そんなことではこれからもずっと恋人が出来ませんよ」
エティエンヌ、あんた、この世で一番口にしてはいけないことを
いつたわね。

あたしとエティエンヌは、長いことになりあつた末、ふんとばか
りに顔をそむけあつた。

どうやらあたしたちの相性は、前途多難に最悪である。
あたしは、エティエンヌがくれたファクリティがなんなのか確か
めることも忘れてもう一度お腹が空いてくる時間まで、えんえんと
やりあつたのだった。

■余計な要素のないベー...? (前書き)

冉余はマホネーの「blue」？

『Bluest blue in blue』

青の中の青。

遠いギリシアのガイドブックを見ながら母さんが書いた言葉。

母さんは、あの時おしゃべり、Hage海とダブらせていたに違いない、血の騎士の瞳を。

海は、空の色を映す。

だとすれば、Hティーンヌの真っ青な瞳は、一体何を映しているのだろう。

あたしは、遙かフランスに続いている青空を見上げた。

「なあに、辛氣臭い顔してんのよ

「冴子・・・・・・・・！」

「おりょーーーもしかして陸上部に意中の彼でもできた？」

冴子は、あたしの視線を田で追いついた。

「・・・・・・・・」

確かにこのポジションは、陸上部の練習を熱く見つめるにはつけてつけである。あたしは、ずいぶんと長い間、教室の窓際の机に頬杖をついたままグランドを眺めていたことに気づいた。

けれど、あの連中の中からひっそりと意中の彼を見つめようとつんだらう。

芋や南瓜ならスーパーで選んだほうがものすりしゃべ手取り早いと思つんだけだ。

そんなあたしの気持ちを正確に読み取ったのか冴子は、にんまり笑い、

「そりゃ、あんたの騎士をまと比べちゃ、日本の男なんて芋か南瓜よねえ～

と、からかいつひこついた。

「なつ、あいつがいののは顔だけよ。ちよー激悪な性格してんだから」

それに、エティエンヌは、あたしの前に一度と姿を現さないだろう。五日前、あんなに傷つけてしまったのだから。

あの晩

東京まで出かけた上、エティエンヌとやんざんやりあつて疲れたあたしは、普段より早めに床についた。翌朝は、もちらりとぞり、きりまで寝ているつもりなのはいうまでもない。

けれど早朝、人の髪を何度もひっぱるヤツがいるから、誰かと思えば、あの心臓に悪い顔がビアップで。

『絆奈、何度起こされれば気がすむのです！

そんなことでジャンヌの継承者は、到底務まりませんよ

しかも、妙にテンション、高いしね。

『なんだあ、エティエンヌじゃない。

ほら、まだこんなに暗いよ。一緒に寝よ』

あたしは、エティエンヌの首をつかむと、布団の中に強引に引っ張り込んだ。

だつて寝ぼけてたんだもん。起こされるのはイヤだつたし。エティエンヌも

一緒に寝かせてしまえば、これ以上睡眠を妨害されないと思ったのよ。

『これは、積極的なお誘いですね』

というとエティエンヌは、あたしに首を抱かれたまま、頬に口づけた。そして、空いているほうの手でパジャマのボタンをふたつほど外し、そこに顔をうずめてくる。

そこまでされてようやくあたしは、目を覚ました。エティエンヌを自分からあわてて引っ張がすとベッドから飛び起きた。

『何すんのよ！』

『何つて、あなたがお望みになつたのではありませんか？』

『の、望んでるわけないでしょ？。エティエンヌのバカ、スケベ！』
あたしは、外されたボタンを急いでとめると、両胸を手で隠した。
だって、何げにノーブラだつたんだもん。

『ならせつむと起きなさい！』

エティエンヌの怒鳴り声が、狭い部屋につぱいに響いた。

『あんた、わざとやつたでしょ？』

あたしは、毛を逆立てた子猫のようにエティエンヌを睨みつけた。

『あたりまえです。

あなたのよくなお子ちゃんまで手を出すほど、女性に不自由していません！

そんなことより、緋奈。わたしのファクリティが欲しいなら、着替えてさつあと外に出なさい』

むつかあ・・・・！

お子ちゃまで悪ついぞんしたねえ。そりや、あんたはその顔だもん、女性に不自由しなかつたでしょ？。

でも、あたしは鼻先に人参をぶら下げられた馬、どんなに腹立たしくても、エティエンヌの言いなりになるしかない。だって、ただの女子高生がなんの武器も持たずに“ゆうき”なんてわけわかんないのと戦えるわけないもん。

それなのに。

そこまで我慢したあたしに、エティエンヌがくれたファクリティつてなんだつたと思う？ ただのレイピア一本よ。

あたしたちは、エティエンヌが誰も近づかないと張つた結界の中でもたもや睨み合つていた。

『エティエンヌ、悪い冗談よね？』

『わたしが冗談を言う性格に見えますか？

それに、これはただのレイピアじゃありません！』

『へえ～タダじゃなきゃいくらなのよ～』

あたしは、嫌味な口調で言い返した。

でも、エティエンヌは、そんなあたしにまったく取り合わなかつ

た。

『このレイピアは、ジャンヌのものです』

『だから・・・・・?』

『だから?とはなんなんです。ジャンヌが遺した貴重なものなのですよ!』

Hティエンヌは、顔をしかめ、いつそう声を荒げた。

『ジャンヌ・・・ジャンヌ・・・ジャンヌ・・・・・・。もう、うんざり!』

そんなに彼女がやり残した使命を果したいなら、あんたがやればいいじゃない。

この際だからさつきつとくべきだね。あたしがあんたの声ついとを聞いてるのは父さんと母さんの敵を討ちたいからよ。世界を救うだの、先祖がやり残したことを果さなきやだの、そんなことはひとつも考えてないんだから!』

あたしは、こんなの役に立たないとばかりにレイピアをぽんと野原に放りだした。

夜明けのせやせやとした風が、すすきとHティエンヌのマントをほんのわずか乱していく。

息が詰まるほど長い時間。いや本当は数分ほどだったのだろうけれど。

Hティエンヌは、その間ひとことも口を開かなかつた、いつもあれほど怒つてばっかりいるくせに。まるで、親にはぐれた子供みたいに、泣き出したこよしな、叫びだしたいような顔のまま、しばらく突つ立つていた。

Hティエンヌは、レイピアを拾い上げた後、あたしに深々と頭を下げる、セルリアンブルーのマントをひるがえした。あの『B1 test blue in blue』の瞳を翳らせながら・・・・・。

それを境にHティエンヌは、一度も現れなくなっていた。

「あんた、**リリさん**と**リザウ**と**元氣**ないけど、騎士をまとケンカでもしたの？」

「あたしも、たぶんエティエンヌに一番こつちやいけないことをいつたんだと思つ」

「ふうーん。なんていつたの？」

冴子は、じいっとあたしを見つめた。

母さんが遺したトランプのことも、そのトランプにエティエンヌがついてきたことも全て血状させられた瞳で。

あたしは、今まで冴子と聖樹をただのバカッフルと見ていた。けれど、今は若くしてただひとりの人に巡り逢えた「一人をす」ことさえ思つている。恋に未熟なあたしにさえそう思わせるほど、冴子は、聖樹を想つていた。

だからあたしは、冴子をただの親友と「うより戦友」と思つてこの事件に関するすべてのことを少しも隠さなかつた。

「・・・・・・・・

あんたの「う」とを聞くのは、世界を救うためでもジャンヌのためでもない、父さんと母さんの敵を討つためだつて。

それに、そんなにジャンヌが大事ならあんたが“ゆうき”を退治すればいいじゃないともいつちやつた・・・・

あたしは、血が滲むほど口唇をかみ締めた。

「あんたは、本当にバカね。

どうして彼が五百年以上も「導きの騎士」をやつてんのかあたしは知らないわよ。

でもね。そんなあたしでもこれだけはわかる。彼が心からジャンヌを愛していて、彼女の死を自分のせいだと思つてゐつて」とくらいいわね」

冴子は、ふうと溜め息をついた。おやじくエティエンヌと自分をだぶらせているのだつ。

大人なら誰でも知つてゐるこの歴史上の人物の右腕といわれた「ラ・イール」を調べることは容易かつた。

一四四三年一月十一日。

彼がモントーバンで死去するまで、ジャンヌを死なせたことを悔やみ続けていたことも。

あたしには、何故、エティエンヌが「導きの騎士」になったのかはわからない。けれど、恋人が死んで五百年以上、彼女の子孫を守り続けてきた、これは非常な尊敬に値する。

いや、けして誰にでもできることではない。想像を絶するほどの中精神力と恋人に対する深い愛があつたればこゝだらう。

「・・・・うん」

「なら、あんたがやるべきことはわかるわね」

「うん、エティエンヌに謝る」

あたしは家に帰つたら、早速エティエンヌを呼び出して謝りうと思つた。

それなのに冴子は次の瞬間、とんでもないことを言い出してくれたのだ。

「でも、緋奈にも甘えられる人が出来てよかつたじゃない
えつ、あたしがエティエンヌに甘えてるつて？」

あの怒りんぼ魔人に？

「冴子。それだけは天地がひっくり返つてもありえないから！」

あたしは、冴子の鼻先で手をヒラヒラ振ると、開けつ放しになつていた窓を勢いよく閉めた。

晚秋

。

夜の訪れは早く、すっかり暗くなつた空には、細い細い三日月が上がつてゐる。あたしは、冴子の肩を抱くと、すっかり人少なになつた校内を後にしたのだった。

再会はマチネーの「」？

「ちょっと、緋奈。そんなに強くつかまないでよ、痛いじゃない」「あたしは、震えながら、冴子の左腕をがつちりとつかんでいた。「だってこの公園、こないだ子供の死体が見つかったとこなんだよ」

「バカねえ、もう一ヶ月も前のことじゃないの」

冴子は、そういうながらも仕方ないなという顔をして、あたしの手を繋いでくれた。まあ、あたしが幽霊の類を大の苦手としているのを知っているからだけね。

「そ、それだけでもすっごく怖いよ。

それに・・・見るからに出そう

あたしと冴子は、駅前のマックで軽くご飯した後、お互の家へ帰るところだった。

でも、その途中にある大きな公園がね、女児連続殺人事件の現場といふか、死体が捨てられてあつた場所なのだ。

それに、夜の公園の人気のなさってありえないよね。昼間は、あんなに賑わってるのにさ。あたしはびびりまくって、冴子の手をいつそう強く握り締めた。

すると、痛そうに顔をしかめながら冴子は、

「何いつてんのよ。たとえ、なんかが出たとしても、あんたにはかつこいい騎士さまがついてるじゃないの。ピンチにはスーパーマンよろしく助けに来るんでしょ！」と、言つてくれやがつた。

冴子さん、エティエンヌは、ランプの精じゃないから『呼ばれて飛び出てじゅじゅじゅ～ん！』ってことは絶対ないとおもうよ。それに、エティエンヌが童話に出てくるような親切な騎士まだまだたらこんなに悩んでないしね。

「冴子さん、お聞きしますが、あのエティエンヌがそんなにアグレッシブだと思いませんかあ～？」

「うーん。聖樹なら絶対に助けに来そうだけど」

「ああ。はい、はい。ご馳走さま。

そりや聖樹は、汎子がちょっとでも困つてこると、スーパーマンよろしく現れてたけどさ。

でもあんたたちの場合、そこに愛はあるから助けに来るだらうけど、あたしたちの場合、そこにきっと愛はないからエティエンヌが助けにくるなんてことはありそうにない。

「じゃあ、汎子。ためしに襲われてみたら?

聖樹なら何をしててもどこにいても絶対、汎子の元に駆けつけてくるよ」

そう、たとえ行方不明であっても。

あたしは、心中でそうつけくわえた。

「そうね。聖樹にもう一度会えるなんならもうしてみよつかと思つわ

汎子は、そうこうと少し淋しげに笑つた。

あの父母を亡くした冷たい雨の降る晩

。

一生分の涙を流すみたいに泣いているあたしの隣で、汎子はすつと肩を抱いてくれていた、一緒に涙を流しながら。

でも汎子は、思い立つたように泣き止むと、あたしの顔を覗き込んでいった。

『ねえ、緋奈。あたし、聖樹は、どこかで生きている気がするの。だから絶対にあたしたちのところに戻つてくると思つわ。だから、もう泣くのはやめにしない?』

あたしは、鼻水を拭うのも忘れて、幼なじみ兼親友の顔をマジマジと見つめた。

汎子の顔は、あたしとおんなじように瞼は腫れてるし、泣きすぎて鼻の頭は真っ赤だつたけれど、今まで一番綺麗でまつすぐな瞳をしていた。

ああ、恋はなんですか?」

ただの女子高生をこんなに強くするのだから。

でも、少しだけ怖い。誰かを自分の中に住まわせるのは。
きっと、あたしはその誰かにひびくのめつこんでしまつ、そんな

予感がして。

『うん、アイツなら幽霊になつても冴子とこに帰つてしまつだも
ん、姿を見せないつてことは、聖樹の生きてる証だよね？』

あたしは、何度も頷きながらそういう、冴子を思いつきり抱きし
めた。そして、それ以来あたしたちは、本当の家族のように寄り添
いあつて生きてきたのだった。

「でもさ冴子。聖樹つてば、ご飯中だと助けに来ないじゃない。今、
ご飯中かも知れないしさ。だからこんなとこ、せつせと通り抜けて
うちへ帰ろつ？」

あたしは、冴子の背中をポンポンと叩きながらいった。

「それは、ありえるわね」

あたしたちは、お互いをかばいあつよつて毎早に歩を出した。

そんな時、「すいませ～ん」

どこか間延びした男の人の声がかかつた。あたしたちはあまりの
タイミングのよさにギョつとしてしまつた。

おそるおそる振り返つた後ろには、一人組の若いお巡りさん。
なんだあ、おまわりさんかあ。おどかせないでよ、もう。
ノッポのほづのお巡りさんが

「いじを通るのはあぶないですよ！」と言つ。

お巡りさんたちは、ふたりとも懐中電灯を持っていたから、公園
内の見回り中だつたのかもしれない。

「すいません。一人だから大丈夫かと思つて」と冴子。

「でも最近物騒だから家まで送つていつてあげるよ」と、眼鏡をか
けているほづのお巡りさん。どうやら親切にも家までついてきてく

れるらしい。

でも、あたしは・・・・・。

「ありがとうございます」

けれど、あたしが断るより先に汎子がOKしてしまった。

「・・・・・・・・」

あたしたちは、おまわりさんに先導され、一番人気のない場所にさしかかった。

夕方、学校を出るとときは、シャムシール（半円刀）の「」とく光り輝いていた月は、恐ろしい速さで流れていぐ雲に隠されよつとしている。

その上、「うるさいくらい鳴いていた虫の音ももう聞こえない、これから起ころる出来事に身を潜めたみたいに。」

あたしは、次第に熱さを増していく右手を爪が食い込むほど力で握り締めていた。

「汎子、逃げるよ」

あたしは、小声で汎子だけに聞こえるように「」と、汎子の手を引いて走り出そうとした。

でも、すでに回り込まれていた。

「どきなさいよ！」

あたしは、行く手を任せんぼでもするよつてふたぐ眼鏡の警官を怒鳴りつけた。

「なぜわかつた、継承者。

私は、完全にこの男を乗っ取つたつもりだったのだがな」

先ほどまで人間だつた男が、底知れない不気味な笑いを浮かべ近寄つてくる。

「さあね。女の勘とでも答えておこうかしら」

本当は違う。ここからは人間だつたら必ずすることをしなかつた、まばたきを。

それに、あたしは覚えていた。ブラックホールのお化けの匂いを。ここからは、ブラックホールと同じ血の焦げるような匂いがし

たのだ。

けれど、それを敵に教えてやるほどあたしは、親切じゃない。
「ふふつ、まあいい。

久しぶり、と挨拶するべきかな、継承者殿」と、後ろからノックポの警官。

あたしは今、エティエンヌが教えてくれた“ゆらぎ”がひとつの大きな意思であるということを田の当たりにしていた。彼らはまるで、ひとつの生物が一つに分裂したかのように交互に話しかけてくる。

「そうね。でも、またお会いできて光栄、とはとてもいえないわ」「そう軽口を返しながらもあたしは、ずっとヤソラの隙をうかがっていた。

あたしは、何故エティエンヌがトランプを手にしたとたん現れたのか知っていたのだ。“ゆらぎ”は、今日にでも邪魔者を排除するべく手を伸ばしていくのを。

だから、エティエンヌと仲たがいにして、丸腰で“ゆらぎ”と戦うことになつたあたしは、ここで殺されても仕方ないけれど、冴子だけは、何の関係もない冴子だけは、命に代えても助けてやりたかった。

だが、そんな願いも空しく、なんの隙も見出せないまま、大きなケヤキの木に追い詰められてしまつた。
背中を冷たい汗が幾筋もつたつていく。

万事休す。

その言葉は、まさにこついう状態をいつのだらつ。

あたしは、心の中で冴子に詫びながら、“ゆらぎ”的手が振り下ろされるのを待つしかなかつた。

そんなときだつた、冴子が大声で叫んだのは。

「呼びなさい、緋奈。あなたの騎士を。

エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニヨールを呼びなさい！」

ああ、そうだ。わたしには、エティエンヌがいたんだっけ。

彼が愛想を尽かしきつてなければ、助けに来てくれるだろ？

わたしは、まだ隠れきつていない月に向かい、右手を大きく振り

上げた。すぐにオリーブの徵からまばゆい光が溢れてくる。

「智天使の長、神の英雄の名を持つ聖天使ガブリエルよ。あなたの

導きにより我が騎士を降臨させたまえ。

エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニヨール。大好きだから来てえええっ！」

わたしは、初めて心からエティエンヌを願った。

それにもこのこつぱずかしい呪文。絶対、嫌がらせよね。だからエティエンヌは、呼び出したくなかったのよ。

にわかに一陣の強い風が吹き、聖天使ガブリエルによつて送り出されたエティエンヌが風をまとつて現れた。

「遅いですよ、緋奈。わたしを呼ぶのが本当に遅すぎます！」

おいおい、久しぶりに会つたつていうのに第一声がそれですか。でも、盛大に文句を言われても彼の出現にほつとしている自分がいて。

「そう思つたんだつたら自分から出てきたらいでしょ？」

わたしは、やつぱりいつもの調子で言い返していた。

「やだ、あんたたち。こんなときまで口げんかしないでよ」と、冴子。

「そうですね。そちらのマドモワゼルのいうとおりです。受け取りなさい、緋奈」

エティエンヌが渡してくれたのは、例のレイピアだつた。

「えつ、これ……？」

こんなんで切つたら乗つ取られたお巡りさんたちまで死んじやうじゃないの？」

わたしは、レイピアをすらりと鞘から抜くと尋ねた。

「いいえ。その剣は、『ゆらぎ』を滅ぼすための剣ですから人を傷つけることはありません」
えつ、そんなことよりも、こんな剣は、使つたことないんだけどな。

あたしは、すがるような視線をエティエンヌに向けた。
それなのにエティエンヌってば何してたと思う？

金輪際、あたしに見せた事のない優しそうな笑顔で「怖かつたで
しょう」とかいいながら、冴子の肩を抱いてたんだよ。

「エティエンヌ、許すまじ！」

未だかつてない怒りが、すべてを吹き飛ばしていく、初めてレイピアを手にする不安も、『ゆらぎ』に対する恐怖も。あたしは、怒りの矛先が目の前にあることを神に感謝していた。

無造作に鞄を落とすと、人少くなな公園にカラソと大きな音が響き、あたしは、それを合図に両手でつかんだレイピア」と“ゆらぎ”に突っ込んでいった。

きれいな半円を描いた一撃が、眼鏡の警官の肩先をほんのわずかかすめる。

けれど、ヤツが顔をしかめても身体からは、一滴の血も流れない。

ふうん、なるほどね。

それならさくさくいかせてもらおうじゃないの。血痕じやないけど身の軽さには自信があるのよね。

あたしは、時代劇の侍のように正面にレイピアを構えた。

「ござかしいぞ、継承者。ジャンヌの剣『ラピエール』などとは

「ふん、誰の剣だつていいわ。あんたたちをぶち殺せるならね」

あたしは、口唇を舌先で濡らすと、『ゆらぎ』めがけてダッと走り出した。

ベンチを踏み台に大きくジャンプし、レイピアを袈裟懸けに振り下ろした。

決まつた・・・・！

眼鏡の警官は、操り手を失つたマリオネットのように後方へ崩れおちていった。

後一人。

あたしは、息もつかずノッポの警官との間合いをつめていった。
「思い上がるな継承者よ。

おまえは、わたしの怖さをこまだ知らぬ」

そういうと、『ゆらぎ』は懐中電灯を放り投げ、警棒を腰からははずした。

ふん。レイピアと警棒、どちらに分があると思つてんの。

あたしは、なおもレイピアを正面に構えたまま攻撃のチャンスをうかがつた。

何の音もしない切りとられた空間。

けれど、お互ひなんの隙も見出せぬまま、時間ばかりが過ぎていく。

頭の奥が、緊張の連続に耐え切れずキーンと金属製の音を立てる。それでも言い聞かせる。最初に動いたほうが敗者となるのだと。

空気が、ぶわんと音を立てて動く。

耐え切れずに動いたのは向こうが先。

銀色に光る警棒であたしの腰を薙いでくる。

あたしは、それを後方に跳んでやり過いし・・・・・。
えっ！

あたしは、スローモーションになつていく視界の中で警棒が長く長く伸びていくのを見つめていた。伸縮式の警棒は、大きな弧を描き、あたしの左腰を叩いていったのだ。

もし、後一秒でも気づくのが遅れたら、したたか腰を殴られていたらどう。それでも打たれたダメージは軽くない。

「痛つ・・・・・」

あたしは、腰をかばうように膝をついてしまつた。

「緋奈つ・・・・・！」

冴子の絶叫が聞こえる。

ああ、あたしは、ここで負けるわけにはいかないんだ。あたしが死んだら“ゆらぎ”は、冴子を次の標的にするだらうから。だが、今まではジャンプするビームか走ることすらできない。

どうするのよ、緋奈。

この痛みだと繰り出せるのは、たぶん後一撃。だから決める。

あたしは、レイピアをささえに立ち上がると、薄ら笑いを浮かべている“ゆらぎ”をにらみつけやつた。

あたしのダメージが重いとみて勝利を確信したノッポの警官は、こちらへ向かつて走り出す。

ヤツは、その勢いのまま大きくジャンプし、二メートルほど伸ばした警棒であたしの頭上から叩きつけようとした。

「死ね、継承者！」

けれど、一呼吸先にターンしていたあたしは、“ゆらぎ”が地面を打った瞬間、ヤツの右側につけ、左足から胴体を切り上げていた。

まさかという顔。

けれどもう遅い。決着は、すでにしている。

「The Endつてどこかしら」

あたしがそろそろ終えた瞬間、ノッポの警官は後ろ向きに倒れていた。

「緋奈、大丈夫？」

すぐに冴子が、駆け寄つてくる。

あたしは、冴子の肩とレイピアをささえに何とか立ち上がった。

「つかを気にする視線をふいとそらし、

「あんたにはがっかりしたわ」

あたしは、エティエンヌにそれだけをこうと、踵を返やつとした。

その瞬間だつた、あたしの頬の上で大きな音が鳴つたのは。

「汎子・・・・・？」

わけがわからず目に見張ると、そこには呆れたような苛立つた
よつな汎子の顔があつた。

「緋奈、あんたはわかんないの？」

あんたの騎士さまは、あんたが戦つてゐる間中、ずっと心を痛めて
た。あたしは隣でそれをずっと見てた。今だつてそう。あなたのこ
と、死ぬ程心配してゐるわ

汎子は、まだケヤキの大樹の下にいるエティエンヌを指差した。

「エティエンヌ？」

あたしは、汎子に軽く傾いて見せてから、くるりと振り向き、自
分の騎士に声をかけた。

すると、エティエンヌは『なんの用ですか』と言つたげな顔をす
る。

じうやう、あたしの騎士はことん素直じゃないらしい。仕方な
い、今日はあたしが折れてやるか。

「エティエンヌ。早く来ないとおこつちやつよーーー！」

あたしたちは、一番田の用が西に傾き始める頃、ようやく家路へ
とついたのだった。

再会はマホネーの「じるべ」？

「ちょっと、人を荷物みたいに持たないでよー。」

あたしは、そう怒鳴りながら、エティエンヌの肩の上でバタバタと暴れてやつた。

すると、エティエンヌは、

「大人しくしない、緋奈。

これからマドモアゼルのお宅と場を繋げます。

深夜にあなた方をふたりつきりで帰すわけにはいきませんからね」といった。

何、「場」って？

と、聞き返す暇などまったくなかつた。

何でかといふと、エティエンヌがすぐに行動に出たからだ。

エティエンヌの右手が、すいと垂直に空を切る。

もちろん何かが切れたわけじゃない。けれど、確実にそこから違う空気が生まれる。あたしはそれをエティエンヌの首にしがみついて、ぽかんと口を開けて見ていた。

エティエンヌは、そんなあたしに気づかないまま、散歩にでも出るみつに気軽に歩き出す、汎子の肩を抱きながら。

ふつりつ

。

卵の薄い膜をやぶる、そんな感覚がして、エティエンヌは、空間を渡つた。

たぶん渡るといつほど長い時間ではなく、気づいたら汎子たちの中庭だつたといったふう。

けれど。

「おえ、気持ち悪い」

胃液が喉をあがつてくる。汎子も同じようつて胸を押えてくる。

「この『場をつなぐ』つてこつのは、よっぽど非常事態じゃない限り絶対に『ごめんだ。もつ少しで』エティエンヌの背中に吐くところだつた。

でもまつたく平氣だつたのは、エティエンヌ。

「マドモアゼル。申し訳ありません。

今回は、非常事態でしたのでお会いすることになりましたが、わたくしが、姿を現すことを許されてるのは、継承者のみなのです。このような手段を取り、「気分を悪くさせたことをどうかお許しください」

エティエンヌは、あたしを抱いたまま、うずくまつている冴子に深々と頭を下げた。

相変わらずエティエンヌには優しいでやんの。マジむかつくな。

「さて、わたしたちも帰りますよ」

そういうとエティエンヌは、あたしを抱きなooseして再び歩き始めた。

「ちょっと待つて、エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィーヨール！」

よひやく復活した冴子が、エティエンヌを呼び止めた。

「あなたにお願いがあります。あなたの命を賭けてこの子を、緋奈を守ると誓つていただけませんか？」

日本人形のように黒目がちな冴子の瞳が、まっすぐにエティエンヌを見つめている。抱がれてるあたしには、エティエンヌの表情は見えないけれど、彼がうなづくわけなんかない。それだけはわかる。

「Oui Mademoiselle .

わたしの全身全靈で、緋奈を守りましょ

少しの間も置かず、答えたエティエンヌ。

「Merci beaucoup Monsieur .

冴子が、流暢なフランス語で返す。

蚊帳の外に置かれたあたしは、ひとり睡然としていた。

「そんな、どうして、嘘でしょ？」

今までのエティエンヌの態度から、そんなこと言つてもらえるわけなくて。あたしは、ずっと彼に嫌われてると想い込んでいた。「六〇〇年前に立てる誓いを繰り返すのになんの躊躇いがいるというのです」

憮然とうう答えたエティエンヌは、冴子に会釈をすると、再び場を繋いだ。今度こそ、あたしたちの狭いアパートに帰るためだ。

あたしは、その間一言もしゃべらなかつた。つていうか、しゃべれなかつたのよ。だつて、嫌われているとばかり思つていたエティエンヌに、「全身全靈で守る」なんていわれたことが信じられなかつたのだ。

「痛いってば！」

あたしは、脇腹に触れたエティエンヌの手を叩いてやせぎつた。

「緋奈、触れなければ治すことは出来ませんよ」

そういうながら、エティエンヌは、思いつきラブラウスを捲り上げてくる。

「痛つ！」

冷たい手に触れられて激痛が走る。

あの後、あたしは、エティエンヌに抱がれてアパートの部屋に戻つたんだけど、脇腹が痛んで一步も歩くことが出来なくなつっていた。“ゆらぎ”に警棒で叩かれた後もちゃんと動き回つたことが原因だと思つんだけどね。

そんなあたしを、エティエンヌは、いつになく優しくベッドに降ろして、治療してくれようとしたんだけど。なんとエティエンヌつてば、治癒のファクリティ（能力）まで持つてゐつていうのよ。まったく、さつきの「場つなぎ」とい、導きの騎士さまは、幾

つのファクリティをお持ちなことや。」

「たぶん聞いても絶対に教えてくれないんだろうなあ。だってそれがエティエンヌだもん。

つてことで治療開始。

でも、ちょっと触られるだけだっていうのに、これがすっげく痛いのよ。

しかも、エティエンヌってば、何の気遣いもなくブラウスを捲りあげてくるし。

そりや、すぐ治してもらえるところはとつてもありがたいのよ。でも場所が場所だしさ。女の子の羞恥心をわかつて欲しいっていうか。

まあ、そんなことをこの男に望んでも仕方ないんだけどさ。

「これは、ずいぶんと腫れてしましましたね」

エティエンヌは、あたしのわき腹を見た瞬間、痛ましそうに眉を寄せた。

あつ、ほんとだ。大きなじぶみみたいに腫れあがっているだけじゃなく、じくじく熱を持つたように赤い。

「すぐに治しましょー!」

エティエンヌはそう言いつと、いつそつ真剣な顔になる。

そつと宝物を扱うにみたいに優しく触れてきて、そこからあつという間に痛みが消えていく。

あたしは、ほっと息を吐き出した。

「もう大丈夫ですよ」

エティエンヌが、ブラウスを元に戻してくれながら、「う。

「どうもありがとう、エティエンヌ。

それから・・・・・

あたしは、少し言いよどみ、それでも思い切って続けた。

「それから、こないだは無神経なことを言つちやつてごめんなさい

あたしの言葉にエティエンヌは、まるで珍獸でも見つけたように瞳を瞬かせた。

「今日は、やけに素直なのですね」

「失礼ね。あたしだつてそういうときもあるわよ」

あたしは、ベッドから弾みをつけて起き上がり、窓際に立つエティエンヌの隣に寄り添つた。

うーん、何でだかそうしたかつたのよ。それにね、エティエンヌもそうして欲しいような気がしたの。

「それに・・・

理由は違つても“ゆらぎ”を討ちたいといつ利害は一致してるんだから仲良くしたほうがいいかなと思って」

「えつと、ほんと少しよ、ほんと少しなんだからね」

なおもブツブツ言いながらあたしは、いたたまれなくなつてうつむいた。すべての熱が、顔に集まつてゐる気がしたからよけいに。

あたしは、バカみたいにしばらくひとりでわたわたしていたんだけど、なんでかエティエンヌから返事が返らない。仕方ないので思い切つて顔を上げてみた。

すると、エティエンヌもこっちを見ていたみたいで、あたしは、またいたたまれなくなつてそっぽを向いた。

そのまま、ふたりして黙つたままでいたんだけど、いつもエティエンヌから香るセージの匂いが強くなつた瞬間、ふうわりとセルリアンブルーのマントが動いた。

抱きしめられる

。

恐らく無意識の、エティエンヌが一瞬だけ浮かべた何かを受け取つてしまつたのかも知れない。

けれど、そんな感情を瞬く間に消し去つて、エティエンヌは、いつもの彼に戻つていた、横柄で小言ばかり言ついつものエティエンヌに。

「いいですか、緋奈。

あんなむちやな戦い方をしていたら、命が幾つあっても足りませんよ。

それに、レイピアは、日本刀とは違うのです

「わかつたわよ、明日からあんたに使い方を習ひわよ

あたしは、エティエンヌの説教をさえぎつた。

何故だか無性に腹立たしかつたのだ。

でも、自分でも何に怒っているのかわからない。エティエンヌの冷静な顔を見るとさらに腹が立ち、あたしは、ベッドに腰かけると、ペンギンの抱き枕をギュッと強く抱きつぶした。

エティエンヌは、そんなあたしを「ロイツは何してんだ?」といいたげな顔で見ていたが、

「ゆつくりお休みなさい。

それから・・・・・今日はよく頑張りましたね」と、ねぎらいつたに言つた。

(えつ!?)

あたしは、エティエンヌのいつにない態度に驚いたが、考えてみたら彼のことは、一週間分しか知らない。

これからもつと知つていただき。

だから、返した言葉は、とても素直なものだつた。

「うん。ありがとう、エティエンヌ。

あんたもゆつくり休んでね」

でも、エティエンヌはわずかに頷いただけで、そのまま長じこと、高窓越しに夜空をながめていたようだつた。月はすっかり、西の山に隠れてしまつたといふのに。

再会はマチネーの♪♪♪

冬支度にふりへりした雀たちが軒先でせわしない。餌を探し、雨どいをしきりにつついていたが、一羽が舞い上がる
と、もう一羽も誘われるよう空へ飛び立ってしまった。
彼らは、餌の取れない冬、半数ほどしか生き残れないのだという。
それが自然の摂理。

そう思つても可愛そうと思つ心は止められない。
こつちだつて雀に同情できるほど、余裕のある状況じゃないはず
なんだけどね。

次の朝、エティエンヌに鼻をつままれて起こされた。いつもどちらとも変らない不機嫌そうに眉を寄せた彼に。

それで、半ば強制的に剣の稽古をさせられたんだけど。エティエンヌは、やつぱりめちゃめちゃ厳しい先生だった。

エティエンヌがいつにま、レイピアは、フモンシングの「エピ」の剣」の元となつたもので、切ることも突くことも出来るのだと。
けれど、あたしの動態視力の良さ、身の軽さを考えると、「突き」を優先させるべきで、昨晩の日本刀のような使い方は臂力の弱いあなたには向かないのだと続けた。

あたしは、ふんふんと頷きながら聞いた。だって、『もつともだ
と思つたんだもの。

その結果、エティエンヌを相手に何百回も突きの練習をさせられ
ることになつたんだけどね。もつ支度をしないと、学校に遅刻する
いう時間まで。

けれど、彼は稽古を終えてぐつたりしたあたしがシャワーを浴び
ている隙にまたいなくなつてしまつた、飲みかけのフレーバーテイ
ーをダイニングテーブルに残して。

実は昨晩、何かを思いつめてみたいだつたからちょっと心配して

いたの。

エティエンヌは、どうしてか、自分がトランプに戻るところを見られるのをひどく嫌う。不思議だよね、トランプの精みたいなものだと知れているのに。

だから、あたしはエティエンヌが部屋にいても構わず先に寝ることにしていたんだけど。

でも、昨夜はすっごく疲れていたはずなのに、エティエンヌのことが気になつて、なかなか寝付くことができなかつた。

誰も寄せ付けないかのごとく背中を向け、変わらない星のさざやきだけに耳を傾けながら、ジャンヌのことを想つているエティエンヌが。

そんなエティエンヌの背中を見るともなしに見ながら、あたしは、いつしか眠つっていたんだけど。朝起きると、彼はいつもと同じ彼であたしは、すっかり拍子抜けしてしまつた。

残されたまだ湯気の立つているカップ。

エティエンヌは、あたしの家族でもなければましてや恋人でもない。用事が済めばいなくなつても責めることなんてできない。

けれど。

あたしは、エティエンヌのカップをシンクに運ぶと、レバーを落とし、水をじゅぱじゅぱとかけてやつた。このわけのわからない感情が、水と一緒に流れ、どつかへいってくれるようになつた。

あたしは、エティエンヌにどうして欲しいといふんだどう。

刹那、冷蔵庫の上。デジタル時計のめぐられる音。ジャスト8時の文字盤にあたしは、飛び上がつた。

わわわ、冴子が待つて、冴子に怒られる。

あたしは、その言葉を頭のなかで繰り返しながら、オーバーニーソックスをあわてて履くと、待ち合わせ場所のコンビニへ猛ダッシュした。

女子高生は、なにかと忙しいのだ。いつまでも分けのわからない感情に付き合つてゐる暇などない。芽生えはじめたものに、思いつくりフタをして、鍵をかける。一度とひょこつり顔を出さないようこ嚴重に。

セブンイレブンの前、人待ち顔で待つてゐた冴子にあたしは、

「ごめん！」

と、今まで何度繰り返したかわからないセリフをいうと、どつかの犬みたに目をウルウルさせた。

「あんた、本当にいいかげんにしなさいよ！」

と、怒る冴子を「明日は、絶対先に来るからさあ」となだめながら思つた。両親の敵を討つまで女の子でいることなど許されないと。あたしは、仲良く飛び立つていつた番いの雀を頭の中で思いつきり Deleteすると、冴子に「期待しないでおくわ」と言われながら走り出したのだった。

私立聖藍学園

。十年ほど前、市の郊外にある小さな丘を切り崩して作った新設校だ。

この学園の特徴は、外国語教育に特に力を注いでいること。そのため、帰国子女やあたしみたに外国の血が混じつた生徒が多いのが特色だ。

でも、あたしがこの学校を選んだ理由は、単に制服が可愛かつただけなんだだけね。

黒地に白のセーラーカラーのジャケット。ワイン色のミニスカートにオーバーニーソックスの制服は、「制服図鑑」のトップページ

を飾るほどだ。

あたしは、冴子とともに「2 - AHR」と書かれたドアを勢いよく開け、いつものように「おみねづ」叫んだ。

でも、誰もこひちを振り返してくれない。

それにいつもより当社比3倍ほど騒がしい気がする。

あたしは、机の上に鞄を放り出すと、隣で立ち話をしている工藤友香の肩をつついた。

「おはよ、友香。

ねえねえ、なんかあつたの?」

友香は、一瞬びくつとなつたが、こひちを振り返るとすぐ「なんだ」という顔になる。

「紺奈かあ～驚かさないでよ！」

あんたは、聞かないほうがいい話なんだけどな。それでも聞きたい?」

「・・・・・」

あたしが楽しそうなわざつな話の展開に黙つていると、後ろから冴子が、「まさか、この季節に幽霊の話題じゃないでしょうね」と、訊いた。

「さすが、冴子。実は、西城公園で幽霊を見かけたっていう話なのよ」

友香は、にやりと笑うと、冴子の肩をバンバン叩いた。
あたしは、“場つなぎ”して家に帰りたくなつていた。
だつて、幽霊だけは、本当に苦手なのよ。

先月の学園祭の時なんて、無理矢理入らされたお化け屋敷の中で立つたまま気絶したくらいなんだから。

あたしは、そろりそろりとその場から逃げだそうとした。

ところがもう一步のところで冴子に見つかってしまい、ノラ猫のように首をつかまれた。

「紺奈・・・・・！」

冴子は低い声で、けれど強に調子であたしの名を呼んだ。
「一、二。つうひします。」

はし
はし
ねがうであがゆ

“**ゆき**”の情報がモレないでいいんだって。
冴子さまの圧力に負けたあたしは、おとなしく友香の話を聞くことにした。

「それがね、幽霊が集会を開いてるっていうのよ。」

ヘニ
幽靈か集会

猿 し ゃ あ る ま い し

そんなハガなことあるわけないじゃない！」
「うん、あたしも最刃はその悪の世界がうらやましい。」

見たのは一人や一人じやないのよ。

――Bの佐藤さんとか、中等部のテニ

友香は、興奮半分不安半分といった様子で話し続けた。

駅前通りを市立図書館の西へはまつて丑のアーバルへ

あたしと涼子は、お互いの顔を見つめた。

「その場所は、昨夜あたしか“ゆらぎ”と判った場所だったのだ。
それで、その幽霊達は、何をして、いつて、いつの？」

涉子は、ゆうべこと嘆ねた。

何人かで話しあつてゐるような声がするから、近寄つてみるとだあれもないんだって」

そう、友香が締めくくつた時だった。教室のドアががらりと大き

「なんだ、山田さんかあ」

入ってきたのは担任教師の山田だつた。彼は、朝のS・H・R（シ

三一トホ

ームルーム)を行なうためにドアを開けたのだが、あまりにもタイミングが良かつた。

だが、四十年配の男性教師は、ひとりではなかつた。金髪で緑の目の転校生を連れていた。もちろん、この学校では金髪の生徒もめずらしくない。毎年、たくさんの留学生を受け入れてゐるし、生徒の中にもブロンドの髪の持ち主は、何人もいる。

それでも、クラスメート達が驚いたのは、転校生の甘やかな容姿にだらう。

美貌の転校生は、担任教師に紹介された後、教壇に立つと天使のような笑顔を周囲に振りまいたのだった。

「Monsieur Mor?chand . Viens」（モレシヤンくん。来なさい）
「Oui」

男性にしては少し高めの通る声。

ダークグレイのスーツを着た転校生は、蜂蜜色の髪に、エメラルドの瞳の背の高い青年だった。

宗教画の天使のように甘やかな顔立ちの彼は、エティエンヌを例えるなら太陽かもしれない。あたしたちは、息をするのも忘れていきなり現れた美青年を見つめていた。

Charles · Antoine · Mor?chand

。（シャルル・アントワーヌ・モレシャン）

自らの名をそう紡いだ新しいクラスメートは、さも当然のようになにかの隣に座ると、手を差し出してきた。

「Comment allez vous? Mademoiselle.

le.」

（「機嫌いかが?お嬢さん

あたしは一瞬たじろいだ後、スカートの裾で手を「じじじじ」する

と彼の手をとつて答えた。

「Très bien, Merci」（とても元氣です）と。

あたしはこの時、彼が何故「Enchante」（はじめまして）

ではなく「Component alone versus?」（「単体」と「複数」）
いかが?）といったのか、少しも考えなかつた。

天使は深く溜め息をつく　？

今年、何度目かの木枯らしが足元で小ちなつむじ風を作っている。一步步くたびに銀杏だの、紅葉だの葉っぱがまとわりついて歩きづらい。暗くなるまえに戻りたいあたしと冴子は、その中を小走りで歩いていた。

目的地は、西城公園。

もちろん『幽霊の集会』の噂を調査するためだ。

友香に幽霊と聞いた時点ですっかり腰が引けていたあたしだったが、仕方なくこいつして出かけてきたのは、隣にいる怖いお田付け役のせ이다。

そりや、あたしだって“ゆらぎ”の情報は欲しいのよ。でも、根っから幽霊が苦手なあたしが尻込みしちゃうのを少しくらいわかつてくれてもいいと思うの。

あたしは、こじまで引きずるように連れて來た冴子の横顔を上目遣いに盗み見るように見つめた。けれど、冴子の顔は恐ろしくらい真剣で。薔薇色の口唇をきゅっと真一文字に結んでいる。

あたしはこの時、冴子は、本当に聖樹を想ってくれているのだな、ほんの少しでも聖樹に繋がる情報が欲しいのだなど、簡単に考えていたのだけれど、どうやらそれだけではなかつたことを後から知ることになる。

「ねえ、冴子。HティHンヌは、“ゆらぎ”のことこいつ言つていたの。

『ひとつの大好きな意思であり、無数に枝葉のわかれた精神生命体である』って。

もし、幽霊の集会が“ゆらぎ”的の仕業だとしたら、おかしくないかな。だって、彼らがひとつの意思ならコンタクトを取り合つ必要なんかないもん」

あたしは、友香に幽霊の集会の話を聞いてから、ずっと不思議に

思つていたことを冴子にぶつけてみた。

すると、冴子は、すうと目を細めてから言った。

「あなたの騎士様は、“やらぎ”を無数に枝葉の分かれた精神生命体だつていつたのね。うーん。だとするとこりつことは考えられないかな？端末にあたる“やらぎ”が無数にいて、ホストコンピューターみたいな“やらぎ”に情報を送つてるとか。それに・・・・・

「冴子は、少し考え込んでいたが、すぐに続けた。

「もしかしたらといふか、あくまでもこれは仮説なのよ。

“やらぎ”はまだ目覚めたばかりで、本来の力が出ないんじゃないかしら？」「

あたしは、ごくりと喉を鳴らした。

さすが冴子である。あたしが考え方がないことを次から次へと思いつくのだから。

エティエンヌは、ジャンヌが退治し損ねた“やらぎ”が再び力をつけ始めたのだといった。だとすれば、“やらぎ”が目覚めたばかりだという冴子の説は、的を射ている。

それに、警察官を乗つ取つた“やらぎ”が『おまえは、わたしの怖さをいまだ知らぬ』といつてはいたではないか。

「うん。あたしも冴子の説に賛成だな。“やらぎ”は、ジャンヌ・ダルクでさえ敵わなかつた敵なんだもん。普通の状態であれば、あたしなんかが勝てるわけないよ！」

あたしは、ひりつく喉の渴きを抑えながら言った。
同時にひとつ疑問が浮かぶ。

“ジャンヌは、全てのファクリティを得ていたのだろうか？”

もし、ジャンヌがすべてのファクリティを手に入れていたのにかわらず負けたのなら絶対にあたしに勝ち目はない。

冴子は、だんだん青ざめていくあたしを見つめながら、

「なら、緋奈。“ゆりあ”が力を取り戻さないにつひで呪を漬してやればいいじゃないの！」

と、強い口調でいった。

汎子のこいつことはよくわかる。頭では理解もできる。けれど、あたしの持つアクリティはひとつきり、その上、相棒であるエティエンヌとは喧嘩ばかりだ。今ままで到底、父さんと母さんの敵など取れるわけもない。

あたしは、自分の無力さに血がにじむほど口唇を噛んだ。

西城公園

その名は、戦国時代、小さな出城があつたことが由来らしい。隣接する『守ヶ淵』は、公園を作る際、市の名前を取つて新たに『山手池』という名がつけられたのが、誰もその名で呼ぶものはない。変らず『守ヶ淵』と呼ぶ。

何故なら、竜神に生け贋として捧げられた子供達が沈んでいると、いつ『守ヶ淵』は、靈感のないものでも肌が粟立つほど強力な靈感スポットだからだ。

言い方を変えるなら『場』だろうか。

もし、幽霊の集会が“ゆりぎ”の仕業なら、闇の化身である彼らはこの場所と相性がいいのかもしない。少しずつ熱を帯びてきた右手がそう教えてくれていた。

「あのね、『ゆりぎ』を倒すにはやつぱり、エティエンヌと仲良くなつたほうがいいよね？」

「まあそうね。手つ取り早くエティエンヌもしたたり?といいたことこりだけど、それは無理だしね」

「えつ、どうして?」

あたしは、一瞬で赤くなつた顔を悟られないように俯きながら小さな声で尋ねた。だって、実はあたしもそうするのが一番手つ取り

早いかな、なんて考えてたんだもん！

すると、冴子は、手に頭を当てながら呆れたように言った。

「緋奈。あんた、ちゃんと神原さんの話を聞いてたんでしようねえ。ファティマ第三の預言は、『ゆらぎの出現と救世の乙女』だったでしようが。乙女つてわざわざ注釈つけるくらいなんだから、『ゆらぎ』を倒すまで処女でいることだと考えてちょうどいい。

もちろん、あたしだってあんた達が仲良くなるのはいいことだと思うし、賛成よ。相棒との『ミコニユケーション不足』『ゆらぎ』に負けました、なんて笑い話にもならないもん。

でもね、あんたが『ゆらぎ』を倒したら、彼とは別れなければならぬんだってことを忘れてはいけないわ。だって、この世に『ゆらぎ』がいなければ、『導きの騎士』なんて必要のないもんなんだから。いずれ別れる定めのあんたたちが深い仲になつても、お互に傷つくだけでしょう？

それでなくともあんたは、彼を好きになり始めてるっていうの冴子の言葉に、へドロで底が見えないほど濁んだ守ヶ淵から渡つてくる腐臭交じりの風を手でよけていたあたしは、顎が外れるほどぽかんとしてしまった。

「あ、あたしがエティエンヌを好きって？」

確かにあたしは、エティエンヌと離れるときが来るなんて考えたことがなかつた。現状じゃ『ゆらぎ』を倒せるかどうかすらわかんなかつたし。

でももし、『ゆらぎ』を倒すことが出来たら、一度と会えないのだ、あの怒りんぼ魔人に。そして、あの『青の中の青』（Blue st blue in blue）に見つめてもひつともなくなるのだ。

「そうよ。今のあんたを見てなおさら確信したわ。

あんたは、彼が好きなのよ。だって、なんとも思っていないなら『処女じやなきじやうけない』つてところを真つ先に気にするでしょう？」

そう言い捨てると冴子は、茫然としたままのあたしを置いてきぼりにして、守ヶ淵の反対側に出ようとした。小さな虫がわんわんと飛び交っているのせえ田に入らずに、すじくあせつたように。

あたしは、ショックからまだ抜け出せなかつたけれど、それでもあわてて冴子の後を追いかけた。

すると、大きな木の影に隠れていた冴子は、何かを探つているようで、あたしが追いつくと、しいつとばかりに口唇に指をかざした。

守ヶ淵の西側。

夕日に輝くハーブロンド、その肩に届くか、届かないかの金髪の持ち主は、なんと、今朝の転校生『シャルル・アントワーヌ・モレシャン』の人で。あたしはますます熱さを増した右手と彼とを見比べながら、小首を傾げたのだった。

天使は深く溜め息をつく？

「そこのふたり、出てきたら？」

あたしたちは、ふいにかけられた声に飛び上がった。

隣で冴子が、

「まさかあの男、あなたの匂いに気づいたんじゃないでしょうね」と、舌打ちをしている。

「ははっ。それこそまさかだよ」

あたしは、そう答えたものの、シャルルくんならあり得るかもしないと考えていた。だつて、あたしに対する懐きつぷりがものすごくかつたんだんもん。

普通、人間に對して懐くなんて言葉は、あまり使わないものだけど、彼だけは例外。シャルル・アントワーヌ・モレシャンだけは。

今朝、彼がどつかり腰を下ろしたあたしの隣の席は、遅刻した某男子生徒のものだったんだけど。シャルルくんは遅れて登校してきた男子に『まさか、僕と緋奈の仲を引き裂くなんて無粋なこと言わないよね』と、強烈なエンジエルスマイルで脅かしやがったのだ。

もちろん、登校してきた男子生徒は、すごすごと引き下がり、空いてる他の席に移つていった。

その後もシャルルくんは、一事が万事そんな調子で、一日中あたしの傍にべつたりとへばりつき、転校生をめずらしがるクラスメートをまつたく寄せ付けなかつた。

クラスメートたちはみんな、あたしたちを昔からの知り合いか何かだと誤解したと思う。本当はバリバリの初対面だっていうのにさ。でも、シャルルくんに迷惑を被つたのは、あたしだけじゃなかつた。冴子もだ。

冴子は、休み時間の度、『幽霊の集会』の話をしようとしたしのとこに来るんだけど、シャルルくんに邪魔され続け、やつと話すことができたのは、お昼休み、しかも女子トイレの中だった。まあ、

いくらシャルルくんがプチストーカーでも、女子トイレまではついて来れないものねえ。

冴子は、トイレのドアを閉めるなり、『まつたく、信じられないわ、あの男…』と、ふりふりと怒つていた。

あたしも冴子の言葉に大きくなづいた。
日本に不慣れな転校生だと思つから許してるので、初対面の相手に恋人同士のようにされるのも、何度も手にキスされるのもまっぴらゴメンだ。

もしかしたら、フランスといつ国はエティエンヌといい、シャルルくんといい、セクハラ男を量産しているといひのかしら？ あたしはフランスの女性に少しだけ同情してしまった。だから、冴子のシャルルくんに対するイメージが今世紀最悪になつたとしてもそれは、彼の自業自得で同情の余地はまつたくない。

「あら。よくわかりましたわね。

モレシャンくんの前世は、犬だつたのかしら？」
と、皮肉たつぱりに冴子。

実は、冴子には腹を立てると、言葉遣いが妙に丁寧になるところ癖がある。まあ、彼女はもともといつこのお嬢様だしね。

すると、シャルルくんは、

「そんなんに見てますつてオーラ出されたら、誰だつて『氣づくよ』と、そもそもつとうしそうに溜息をついた。

つこでにあたしにウインクをして、「緋奈が可愛がつてくれるので、犬になるのもそう悪くはないけどね」と、続けた。

冴子は、木の影から出ると、蚊でも追つ払つようにシャルルくんのウインクを手ではたき落とした。

「それにしても、モレシャンくんは、どうしてこんなといひにいら

つしゃるのかしら？」

ああ、能面のように無表情な冴子から飛び出す敬語がめちゃくちや怖い。ここまで冴子を怒らせた人間がいまだかつていただろか、いいやいない。どうやらシャルルくんは、冴子に最大の天敵と認識されたらしい。

だが、賢い冴子が、相性が悪いだけでここまで警戒するのはありえない。たぶん、シャルルくんを“ゆらぎ”関係者と疑っているのだろう。

そりや、『』のタイミングでの転校生だし、あたしには男の子に一眼ぼれられる魅力なんてちつともないから、疑つて当然かもしけないけどや。

でも、あたしは、彼が“ゆらぎ”ではないと確信していた。彼に“ゆらぎ”にどっぷりうまれるような心の隙があると思えないし、いの意味でも悪い意味でも自分というものをしつかり持つてるプライドの高い人だと思うから。

「僕の緋奈をこんなあぶないとこに行かせるのが、心配だからに決まってるだろ？！」

シャルルくんが腹立たしげに答えた、その時だった。

少しおそまつたふうに思えた木枯らしが周囲の木をざわざわと鳴らし、守ヶ淵の水面を揺らしはじめたのは。

と同時に、あたしの右手が焼け付かんばかりに熱を帯びていく。「ふふっ。どうやら彼は、僕たちに自分の存在をアピールしたいみたいだね」と、シャルルくん。

相変わらず、あたしにさつぶい笑顔のままで、緊迫感のカケラもない。

「なんのこといってるので、シャルルくん？」

「『』の池の主のことだよ、緋奈。

竜神だとか言われてるそうだけじ、どうやら、何百年も人間に悪

意を向けられた結果、違うものになつちゃつたみたいだね」

シャルルくんは、『久しぶりに見た子犬が大人になつてた』と、話すみたいににこにこしながら言つた。

「モレシャンくん。あなた、頭がおかしくなつたんじゃないでしょうね。あなたのお話だと竜神が本当にいるみたいに聞こえますけど？」

冴子は、つんとすまし、奇想天外なことを当たり前のようになつて話すシャルルくんをバカにしたように言つた。けれど、本当は冴子だって感じているはずだ、天敵の存在を。たとえ、人間がどんなに万物の靈長と偉ぶつても、生きとし生けるものである限り、動物の本能から逃れられない。

そう、捕食される恐怖からは。

あれだけ強く吹いていた風が不意に止まって、三人の間に緊迫した空気が流れだすと、冴子は、暗闇に怯える子供のようにぶるぶると震えた。

「へえ、そんなんに震えているのに竜神が存在しないと思つてるんだ？」

シャルルくんは、冴子の怯えた様子を全く気遣う様子もなく言った。彼は、どんなときでもあたし以外の人間に容赦する気は、こればっかりもないらしい。

「ちょっと。こんなときに質問に質問で返すのは止めてちょうだい！」

刹那、『守ヶ淵』の水面にざざと大きな波が立つ。

冴子は、ひいと声をあげて、あたしの肩にしがみついた。

そりやあたしだって、この状況は氣味が悪い。けれど、幽靈相手じゃないとわかつた以上それほど恐ろしくはない。家族をいつぺんに失う恐怖を味わったあたしにとつて、喰られて死ぬことなど大して怖くはないのだ。

「まったく、きみは氣の短い人だな。

だからいつたろう、竜神は、いないんだって」

シャルルくんは、『竜神は』のところに特に力を込めた。

彼はおそらく、『こういう』みたいだろ。竜神は、神の地位から堕ち、人の敵にまわったのだと。

いにしえ、竜神が本当に生贊を要求していたかどうかはわからない。だが、神として畏敬されているうちはまだよかつたのだろう。けれど気象さえ予想できる現代。竜神が洪水や日照りを起こすなど信じるものは一人もいなくなり、結果、「生贊が捧げられていた淵」という噂のみが一人歩きした。そして、皆がこの場所を忌むようになる。

例えをあげるなら、『丑の刻参り』がわかりやすいだろか。

ただ、とんかんと藁人形に釘を打つだけならば何も起きるわけがない。そこに恨みや憎しみの気持ちを込めることが呪詛となり、相手を陥れるのだ。

簡潔にいえば、皆が長い間、『守ヶ淵』を気持ち悪いと思つたことが竜神を神の地位から墮としたのだといえる。

そして、おそらく竜神は。

「冴子、シャルルくん。帰ろう」

あたしは西の山に姿を隠していく夕日を見上げるといった。

全ての魔物が活動をはじめる逢魔ヶ刻になる前に『守ヶ淵』から去らねばならないと、あたしはわかりすぎるくらいにわかつていて。それに『守ヶ淵』に棲むものがあたしの予想通りのものならば、今は牽制だけで襲つてこないはずなのだ。何故なら、彼らは夜の闇にしか現れることが出来ぬ定めを負つてゐるから。

天使は深く溜め息をつく？

「アレはなんだつたのかしら、緋奈？」

冴子は、『緋奈を送つていく』と強硬に主張するシャルルくんを、『あなたのほうが送り狼になりそうですから結構ですわ』と、ぱつぱつ切り捨てる。あたしの腕をつかみ、だつと走り出した。

そして、一〇〇メートルくらい走り、シャルルくんがついてこないのを確認すると、先ほどのセリフをおもむろに切り出してきたのだ。

アレとはもちろん、プチストーカーのシャルルくんのことではなく、守ヶ淵の水面を騒がせたヤツのことだらう。

実はあたしは、迷っていた。先ほどの冴子の怯えた様子から、もう彼女を巻き込むべきではないのかと。いや、本当はずっと前から迷っていた。

冴子が行方不明の弟、聖樹を心配してくれるのはうれしい。けれど、その一事だけで彼女を“ゆらぎ”退治に加えるのはどうなんだらう。

今があたしのファクリティでは自分の身を守ることさえ危うい。何か事があった時、冴子を守る事など到底出来はしない。それは警察官をのつとつたゆらぎの時で身にしみている。

それに、おそらくエティエンヌは、あたしと『うジャンヌの末裔』を守るために何の躊躇いもなく冴子を切り捨てるだらう。ならば、冴子には、このまま何も知らせないほうがいい。

あたしはそう結論を出すと、

「ああ。そういうえばシャルルくん。竜神が変なものになつたとかいつてたね。でもさ。ゆらぎが乗つ取るのは人間だけだし、幽霊の集会と“ゆらぎ”は関係ないんじゃないかな？」と、首を傾げながらいった。

まったくの嘘である。

“ ゆうらぎ ” が竜神を餌食にしたとあたしの右手は教えていたし、聖天使ガブリエルの徵は、“ ゆうらぎ ” にのみ反応するのだから。しかも、徵の熱は、警官のときと比べものにならないほどに高い。

それが教えることは、なむせぬ冴子を巻き込むことなどできない。

すると、冴子は、

「 あんたが急に帰ろうと叫い出すから、アレの正体が何かわかつたのかとおもつたわ！」 と、声を尖らせた。

「 しかも、あんた。めずらしく真剣な顔したし」

「 あっ、『 めん !

今日は、朝からエティエンヌにめちゃくちゃしじるかれるわ、シャルルくんにへばりつかれるわで、すつゝくお腹空いてきちゃってさあ」

あたしは、お腹を押されると、悲しそうな顔を冴子に向けた。お腹が空いているのは事実だからこれは演技でも何でもない。

冴子はとたん、ものすごいやな顔をした。

こんな緊張感のないヤツと親友になったのは、ものすごい失敗だったのじやないかしらん、という顔つきである。

「 あんたには本当にあきれちゃつわ。

でも・・・・・

冴子は、そういうとあたしの顔を穴があくほど見つめた。

そして、数瞬後。

「 あんたがあたしのことを心配して何も教えないのはわかるから、これ以上何も聞かないわ。それに、あんたが力を合わせなくてはならないのはあたしじやなくてあなたの騎士様だもの。あたしは、それを忘れていたのもしれないわ」 といった。

どうやら、あたしの演技は、ばればれだつたらしい。さすが冴子である。

けれど、あたしは、冴子の言葉に頷くだけにとどめておいた。

彼女の性格からすれば、ひとたび知つてしまえば関わらないでは
いられないのだから。

「それにしてもシャルル・アントワーヌ・モレシャン。本当に失礼
で、胡散臭いわ！ ゆらぎだって、あの男に比べればすうと紳士よ」

冴子は、もう一度後ろを確認すると、吐き捨てるようにこいつた。
まだ五時だというのにあたりはすっかり真っ暗で、ようやく公園
を出られたことにほつとした冴子の吐く言葉は、実に辛らつだった。

けれど、胡散臭いといつあたりはまったく同感だ。

守ヶ淵で会ったのは、あたしたちの会話からだと思つが。

『どうやら、何百年も人間に悪意を向けられた結果、違うものにな
つちゃつたみたいだね』というセリフにいたつては、ただの勘のい
い人間では済まされない。あたしの中でゆらぎではないが要注意人
物というくくりに“シャルル・アントワーヌ・モレシャン”が入
れられたのはいうまでもない。

「確かに」

あたしは、冴子の言葉に頷いてみせてからしんしんと冷え始めた
夜空に浮かぶシリウスを見つめた。

木枯らしさはどうに止んでいたが、白色の星がゆらゆらと揺れるよ
うに瞬く。

-1-5等星。全天で一番明るい大犬座のシリウスは、『焼き焦
がすもの』の異名を持つ。あたしは南天の星空を見上げながら、シ
ヤルルくんがまるでシリウスのようにあたしのこれからを焼き焦が
していくような予感がしてならなかつた。

『うちに寄つて』『飯を食べていきなさいよ』という冴子の誘いを断
つて、あたしは、そうそうにアパートに戻ることにした。冴子の小
父さんも小母さんもいい人だけれど、今は正直、誰かに氣を使つこと
が面倒くさい。

『「Jめん。昨日、カレーを作りすぎちゃったから、今日は家で食べるよ』

大鍋にカレーをたくさん作ったのは事実だったし、あたしはバイバイと冴子に手を振った。

冴子は、『残念ね』と言つてからにんまり笑い、『くれぐれも処女は死守してね』と、言ってくれやがったのだ。

あたしは思わず、持つていたバックで冴子を叩いていた。それでも冴子は、にやにやと笑いながら、コンビニの角を曲がつていつた。けれど、ひとりでアパートへの道を歩き始めると、どうしてかドキドキが止まらなくなってしまった。頭の中を『あなたは、彼が好きなのよ』という言葉が廻り始める。

あたしは、冴子の誘いを断つたことを少しだけ後悔しながら、二〇一号室のカギを開けた。

ドアを閉めて、ふふと笑う。

部屋の中は、真っ暗でエティエンヌがいる気配なんかこれっぽっちもない。昨夜、焚いたラヴェンダーのお香とカレーの匂いが混じり合い、なんともいえない妙な臭いを醸し出しているだけだ。あたしは、手探りで玄関のスイッチを見つけ出すとONにした。すると、その手をいきなりつかんだものがいる。

『さやあ』という言葉を飲み込むと同時に照明がつき、恐ろしいほど整った顔がドアップであらわれる。狭いアパートの一室に不似合いな世界で一番美しい男が。

けれど、エティエンヌの顔は、怒りといらつきと哀しみ、そんなものが一緒にになつた感情で満ちていた。

「えつ？」

ふいに抱きしめられる。

じつしてエティエンヌの力強い腕に抱きしめられるのは二度目だ。

初めて逢つた時と、今と。

あたしは、張り裂けんばかりの胸の鼓動が伝わらなければいいと

願いながら、彼の名を小さく呼んだ。

「エティエンヌ？」

エティエンヌは、なおもぐいぐいと抱きしめながら、

「あなたをまた、失ったかと思ったのです」と、絞り出すよつな声でいった。

『？』と思ったが、それでもエティエンヌの背中を幼子にするようにゆづくと撫でてやる。それを何度も繰り返すとよつやく落ち着いたのか、ぽつりぽつりと話し始めた。

「緋奈の右手が熱を帯びたのに気づき、あなたの気配を追つていました。けれど、最高に熱くなつたのを境に消えてしまい。

ああ、六〇〇年、生きてきて初めてです。ルールに縛られたこの身がこれほど厭わしく思えたのは

エティエンヌがもう一度、痛いほどあたしを抱きしめた。

ああ、そうか。エティエンヌは、あたし以外の人間の前に姿を現すことができない。冴子のときは、あたしが死にそうだったから、特別だつたんだろうけど。今回は、シャルルくんもいて、しかも昼間の人目につくときでは、どんなに心配でも、場つなぎしてくることが出来なかつたのだろう。

「ふたりが公園を出た辺りから、感じ取れるよつになつたのですが、それでも、あなたの元気な顔を見るまでは、落ち着かなかつたのです」

「

エティエンヌの「青の中の青」(Blue est blue in blue)の瞳は、彼の感情を映したようにグレイに翳っている。こんな動搖したエティエンヌを見るのは初めてだった。彼は、いつも高飛車で、怒つてばかりだったから。

あたしは、自分がいかに彼に心配をかけたかを知り、エティエンヌをぎゅっと抱きしめ返すと、何度も「ごめんね」と謝罪の言葉を繰り返したのだった。

あかつきにみた夢　?

むかしむかし、小さな川と小さな森に囲まれた小さな集落。田んぼには、青々とした稻が育ち、村の中ほどの大庭地では、子供たちの甲高い声が響く、なんとも幸せな風景だ。

その中心には、一人の美しい青年。

久しぶりに村へやつてきた青年に、子供たちは、自分の相手をしてもらひうのだとばかりに、青年の袖を競いあつよつひつぱつている。

「主様、遊ぼうよ

「主様、お話して」

「今日は、どんなお話をしてくれるの?」

どんなに子供たちにもみくちゃにされても幸せそうな青年は、この村を流れる川の主にして竜神で、長い白い髪と澄んだ水色の瞳の持ち主だった。

若き竜神は、子供たちの騒ぎを静めるよつて両手を上げると、穏やかな笑顔のまま言つた。

「今日は、いつもやカラスに聞いた話ををしてしんぜよ」
子供たちが、いっせいにきやあきやあと歓声を上げる。

「それでは、むかしむかし、あるところに・・・」

と、いつものごとく話を始めよつとした青年だが、柿の木の後ろに小さな少女の姿を見つけた。

「キサナ、そなたも来るがよい」

青年が優しく手招きすると、おそるおそるといった様子で少女が近寄ってくる。少女、キサナは、他の村に嫁いだ娘が産んだ子供だったが、母が流行り病で亡くなつたため、昨年、この村の祖父母の元に引き取られたのだ。そのためどこか遠慮がちに暮らしていた。

だが、竜神は、このキサナという少女を、格別に思っていた。村人は、やつかいものとさげすんでいるようだが、彼女の弱いものを

愛おしむその心根は、雨上がりの縁に輝く木の葉のように、きらきらと輝いていた。もちろんそれは、神である青年にしか見えないものであつたが。

「それでは始めよう。

むかしむかしあるとこころに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。おばあさんが川で洗濯をしていると、ドンブラコ、ドンブラコと、大きな桃が流れてきました・・・・・

竜神が、身振り手振りを交えて桃太郎の話を始めた。

桃から生まれた桃太郎は、お伴を従えて鬼ヶ島へ渡り、人々を困らせていた鬼の退治をする。そして、無事、鬼を退治すると、故郷で待つ祖父母の元に宝を持ち帰り、幸せに暮らす。そんな完全懲悪な話が子供は大好きなのだ。きらきらした目で青年の話に聞き入っている。

「・・・・・みんな幸せに暮しましたと。おしまい」

青年が、そう話を終えると、子供たちは、一斉に大きくため息をついた。自分たちも主人公になり、鬼と戦つた心持ちになったからだ。

「俺も桃太郎みたいに強くなりたいな」

「俺も」
「俺も」

男の子たちから口々に声が上がった。

だが、一人の子供が、

「俺は、強くなるより、大きな桃を腹いっぱい食べるほうがいいな」というと、みんなが腹をかかえて笑つた。お腹が空いたが口癖の彼は、他の子供より小太りだつたからだ。

お話を満足した子供たちは、青年にお礼を言つと手を振り、それ

ぞれの家へと帰つて行つた。ひとりキサナを残して。

「一緒に来るか？」

青年が、キサナにそう問うと、キサナはにっこり笑つて頷き、青年の手をぎゅっと握つてきた。ふたりは、兄妹のように仲良く並んで、ひときわ大きな藁葺屋根の家へと向かつて歩き始めた。賢いキサナは、竜神が村へどんな用事でやつてきたのか知つていたのだ。

今日も空に雲一つない。

例年なら梅雨入りして久しいこの時期、天は、ほんの一粒の雨も恵まなかつた。空は、どこまでも青く、雲ひとつ浮かんでいない。

青年は、美しい眉を寄せた。

「今日はまた、ことに暑いのう」

隣にいるキサナが、神妙な様子でうなずく。

何故なら、この集落は、たいそう貧しいのだ。青年が、竜神としてやつてくる前は、幾人かの子供たちが、冬を越えられず餓死したほどに。

領主から課される年貢が重いのはもちろんだが、この辺りは、火山灰が降り積もつてできた土地ゆえ、土地の滋味が少ない、稻の実りも乏しいのだ。

今でこそ、青年の加護により、餓死する子供こそいないが、それでもほんの少しの気候の変化が命取りになるのは変わらない。

どうだんつづじの生け垣を抜け、魔よけの鈴がかかった入り口で主の所在を問うと、すぐに白髪の老人が現れた。老人は、青年のおとないにあわてたように腰をかがめた。

「村長よ、雨は、いまだ降らぬか？」

「はい、もう一月ほど一滴の雨も降つてはおりませぬ

村長は、頭を上げると、とつとつとそう答えた。

「すまぬのう、我がもそつと力の強い竜神であれば、雲を呼び、雨を降らせることができようものを

若き竜神は、自身の力のなさを心底申し訳なさそうに言った

年老いた村長は、すぐに大きく首を振り、

「いいえ、主様。あなた様ほど我らを愛してくださる神は、他におりませぬ。皆が、あなた様にどれほど感謝しております」と、答えた。

心からの言葉だった。

若き竜神は、力の足りなさを恥じている様子だったが、かほどの民のために力を尽くしてくれる神が他にいようはずもない。しかも、彼が、現れてから一十年、村の暮らしは、格段に良くなつたのだから。稲穂は、重さを増し、家畜は、たくさん子を産んだ。

その上、彼がもたらした紫色の芋は、栄養豊富で保存が利き、食料が不足する冬にはまことにありがたいものだつた。それらの知識を他の神々の間を巡り、頭を下げて教えを乞つてきたものだと知れば、なおさら尊敬の念は強くなる。

村の子供が彼にまわりつくのは、大人たちが彼を敬愛していればこそなのだ。

だが、今年の天候は、齢七〇の村長であつても例のないものだつた。常ならじうじうと音を立てて流れる竜神の川も、常の半分ほどに水量を減らしていた。村はずれの沼など、すでに干上がっているありさまである。

もし、このまま雨が降らねば、稲は、穂が出る前にすべて枯れてしまうだろう。

「お前の気持ちはありがたいが、我は、雨雲を呼びぬできそこないの竜神、このまま雨が降らねば、お前たちの生活が成り立たぬと知つても何ひとつ力になれぬ」

青年は、そう言つと苦く苦笑つた。

およそ、竜神というものはすべからく、雨雲を呼び、雨を降らすことができるもの。強い力を持つものなら嵐さえ呼びよう。だが、彼はなぜか、雨雲を呼ぶことができなかつた。雲が天にあれば、雨

を降らすことはできるが、空に雲がなければ一粒の雨も降らすこと
ができない。

それは、若さ故か、生まれ持った力が弱いのかわからなかつたが、
自分のような力のない竜神に支配された土地に住む村人が哀れでな
らなかつた。

青年は、乾燥に強い作物をできうる限り植えるように言い置くと、
村長の家を後にした。後ろで村長が何か言いたげにしていたが、わ
ざと気付かないふりをして。隣でキサナが青年の手をひっぱつても
気づかないふりをして。

そして、七月（今の暦だと八月）も半ばを過ぎ、あれからひと月
が経つてもいっこうに雨は降らなかつた。

若き竜神は、天にわずかな雲があれば、雨を降らそうと幾度も試
みるのだが、雲が薄すぎぎるためか少しの雨も降らない。

仕方なく、自身の矜持を捨て、仲間に自分の土地に雨を降らせ
くれるように頼んだのだが、仲間は済まなそうに首を振るばかり。
何故なら竜神には、自身の土地以外に雨を降らせてはならないとい
う掟があつたのだ。

それでも彼は、あきらめず仲間の竜神の間を巡り、雨を降らせる
方法を訊きまわつたが、その結果は芳しくなかつた。

万策尽きた、このままではわが民の多くが、冬を越えられず餓死す
るだらう。

そんな中、酷暑が元で年老いた村長がこの世を去つた。

新しい村長には、村長の息子が選ばれたのだが、彼は、前の村長と
違い、急進的な人物だった。いや、急進的というより想像力に欠け
る自己中心的な人物だった。しかも、若くおろかで、竜神が来る以
前の餓死者が出ていた時代を知らなかつた。

「いのままじや、おらたちは、干上がつちまつ

白く濁つた酒をおとなしく飲んでいた若者が、いきなり杯を床に

叩きつけた。

村長の通夜の晩、女、年寄り、子供は、明日もあるからと早々に家路についたが、男衆は、まだ飲み足りないのか、その多くが村長宅に残つていた。

彼らも初めは、通夜にふさわしく穏やかに酒を飲んでいたのだが、誰かがなんとはなしに言った、「暑くてたまらねえな」という言葉をきっかけに雰囲気が一変した。彼らのいつも腹に溜めていた不安がいっせいに噴出したのだ。

「稻がいつもの半分しか育つてねえ」

「おらんとこもだ」

「水が少ねえからな」

「川の水もそろそろ干上がるんでねえべか」

「うちの力カアは孕んどるんだ。いの分じや・・・・・」

「そうだ、このままじや・・・・・」

誰かが口を開くたびに、不安が激^{おおつ}のように降り積もつていく。

それでも、彼らは、飢饉と言つ言葉をあえて使わないでいた。だが、新しく村長になつた若者は、おろかにもその禁句を叫んでしまつた。

「いのままじや 飢饉になるぞ! いのままじや皆が飢え死んじまつ

!」

場が水を打つたように静まる。

それでなくとも水はせき止められ、今にも溢れそうになつていたのだ。新村長の言葉は、皆の心にあつた堰^{せき}をあつけなく吹き飛ばしていった。もうこの場に酔つ払いなどひとりといつない。

「んじや、どうすればいいだ」

そう訊ねた男の顔は、どす黒く、その瞳はらんらんと輝いている。いや、気付けば男衆のすべてが今にも笑い出しそうにゆがんだ顔を

していった。

彼らはみな、同じ結論を出したのだが、卑怯にも言つて出しつべの責任を負いたくなかった。

「おまえたちも山向こうの村の話は聞いているべ。同じじ」とをおらたちがやつたところで誰も責めることなんかできねえ!」

新村長がわめいた。

一昨年、山向こうの村では、日照りの際、乙女を竜神に捧げた。竜神に捧げたといえば聞こえはいいが、ようは少女をひとり、人身御供として川に沈めたのだ。

「そうだ、他の村だつてやつてるんだ、おらたちが責められることはねえ」

「そうだ、村長の言うとおりだべ」

それは、名実ともに若者が村長として認められた瞬間だった。

彼は、言い出しつべの責任を負つた上、皆が喉から手が出るほど欲しかつた『免罪符』を与えたのだから。

それからの彼らの行動は、素早かつた。

とある少女の家に押し掛けると、祖父母の制止を振り切り、彼女を引きずり出した。

「やめてくれ、その子は、娘の形見なんだ!」

老人が悲鳴を上げ、老婆が土下座をせんばかりに頬みこむのにも一瞥もくれず、いや、邪魔とばかりに蹴り倒し、男たちは、少女の髪をわし掴むと、ずるずる引きずつていった。

「やめて、あなたたちについて行くから、おじいちゃんとおばあちゃんにひどいことしないで!」

夜闇に響き渡る、少女特有のかん高い泣き声。その声の主は、あのキサナだった。

彼らが、キサナに狙いを定めた理由は、彼女の父親がよそ者だつたから。彼女を庇護するべき父親がここにいなかつたから。いや、もしかしたらそれだけではなかつたかもしれない。村一番の美人を

よそ者にとられた、その醜い妬心がキサナに向けられたのだらう。

三十人ばかりの男衆は、キサナをしばらく歩かせたのち、いきなり突き飛ばした。優しい竜神が、子供たちのために昔がたりをしてくれた場所で。

「もう万策尽きたんだ、おめえを生贊にするしかねえ」

村長の息子の、今までキサナをよそ者とさげすみ、無視し続けた男の、キサナにかけた初めての言葉だった。キサナは、言われた言葉に驚くより、この男が、自分に声をかけたことにびっくりしていた。

キサナは、八月に入つても雨が降らなかつたとき、自分の運命を悟つていた。いや、山向こうの村で自分と同じ境遇の少女が、人身御供にされたという話を祖母から聞いた日からだつたかもしれない。

とうとうこの日が来てしまつた。

キサナは、数十本のたいまつが照らし出す、急ごしらえの祭壇の前に立たされていた。何故か不思議と恐怖はなかつた。ただあの優しい竜神が、自分の死を知つたらどんなに悲しむだろうと、そればかりが気にかかつた。

「あおぎねがわぐば 天をおさめ 地をおさめ
よろずのことものを おさめたもつ
天神に 祈りをさげたてまつる」

村長の息子が、神主よろしく祝詞を唱えると、男衆が、

「雨ふらしたまえ 雨ふらしたまえ
雨ふらしたまえ 雨ふらしたまえ」

と、声を揃える。

「神よ、嵐の神、須佐之男命よ。^{すさのおのみこと}この生贊を受け取り、雨ふらしたまえ」

村長の息子が、顎をしゃくると、男衆がキサナの両肩を羽交い絞め

にした。

そして、キサナは、白刃が己の胸に突き刺さつていぐのを時が止
まつたよう
に見ていた。

「主様、ごめんなさい・・・」

遠ざかって行く、その意識の底でキサナは、自分の死が竜神に優し
く伝わり
ますようにと祈っていた。

あかつきにみた夢？

『主様、ごめんなさい……』

「キサナ？」

水底で眠っていた竜神は、かすかに聞こえる少女の言葉に振り起
こされ、ぱちりと目を開けた。その言葉は、まるでうたかたのよう
で、幾度も幾度も繰り返され、彼の心の琴線に触れては消えていく。

「まさか……」

水にほんのわずか混じる血の匂い。

竜神は、竜形からあわてて人形になると、川土手へ駆け上がった。
朝まだき、白々とした靄もやの中に葦のとがつた葉先だけが浮かぶ。

その葦の群生の中に、見えたのは、紅のかたまり。

「キサナっ……！」

いつぞや、母が子供の頃に着ていたものなど、顔に気色を浮
かべ、くるりと回つて見せてくれた山吹色の着物は、いまやその片
鱗もない。赤一色だ。

竜神は、葦をかき分けると、少女の血まみれの体をかき抱いた。
「なんということだ……」

時間が経つたためか、それとも体からすべての血が失われたせいか、少女の体は、ひどく冷たかった。つい、こないだではなかつたのか、その小さな、温かい手を握つてともに歩いたのは。

「キサナっ、キサナっ、キサナっ……」

竜神は、肩を震わせて泣いた。

何故、この罪もない少女が死ななくてはならなかつたのか、我の力
の無さゆえか。

「うおおおおおおっ……！」

若き竜神は、生まれて初めて声をあげて啼いた。

自分の身が、ひどく厭わしい。神と呼ばれながら、人一人助けら

れぬこの身が。だが、それにしても・・・・。

ぱつりぱつり。

三月ぶりの雨が、彼の肩を濡らす。

竜神の涙は、雨雲を呼び、竜神の怒りは、雷雲を呼んだ。
やがて、雨は嵐となり、村中を吹き荒れた。

キサナが生贊にされたことを知った村人たちは、この嵐を竜神の怒りと恐れた。

なんという恩知らずなことをしたのかと、年寄りたちは男衆を責めたが、やつてしまつたことはどうしようもない。女衆がキサナを手厚く葬ると、ようやく嵐がおさまった。

そして、三日三晩、吹き荒れた嵐が去り、外に出た村人が見たのは、満々と水をたたえた田であった。男衆は、自分たちのやつたことは間違つていなかつたと、胸を張つた。

だが、嵐がおさまり、水が引いても、竜神の川からは魚が取れなくなつてしまつた。もちろん、若き竜神が、村に姿を現すこともない。心あるものはそれを嘆いたが、男衆を表だつて非難することが出来なかつた。

『もし、日照りが続いていたら、一体、幾人の命が失われたのか、それを一人の犠牲で済ませてやつたのだから、責められるいわれはない』と、開き直られれば口をつぐまざるを得なかつたのだ。

それ以来、愚かな村人は、日照りの度に、生贊を捧げ続けた。竜神の涙が、雨を降らし、嵐を呼ぶことを知つていながら。

竜神は、水底でわずかに尾を振つた。

体が重かつた。年を経ることに増えていく重りに体が絡めとられ

ていくようだ。

(我は、いまだ死ぬのか)

彼は、生きることに飽いていた。竜神として生を受けて三百有余年。人ならとつぐに骨となつている年月だ。

(神であるこの身が、ひどく厭わしい)

彼が、幾たりの生贊を受け取ったのか自分でも覚えきれなくなつた頃、その身は、僅かばかりしか動かなくなつっていた。生贊の捧げられた川を不吉と思った人間が、あまた数多いたせいか、向けられた負の心は、彼の体と心を蝕んでいった。

かつて彼は、力のない竜神であつた。

だから、そのせいで村人は思い余つたのだと、それは、仕方のないことだつたのだと、何度も自分に言い聞かせてみた。けれど、キサナや十数人もの少女を殺され、それでも守護を続けた彼に、村人は何をしたか。

人間を恨んではいけないと幾度考えようとも、いや、ここまでされて恨まずにおれるものがいようか。

彼は、人を愛し、共にあるうと最大限の努力をした。それなのに、それなのに・・・・・。竜神は、いまや神ではないものに墮ちようとしていた。

そんなある日、この田の本と呼ばれる国が、大きな戦いに巻き込まれ、しばらく経つたある日。

彼の前に、暗く凝つた闇の化身が現れた。闇の誘いは心地よく、闇と共にすることは、安らぎであつた。

「我らの名は、“ゆらぎ”原初の闇より出でて人を滅びに向かわせる存在。竜神よ、我らと共にあれ、さすれば、そなたは、これ以上傷つくこともない」

彼は、頷いた。

『ああ、我は、もう何も考えたくない。我という存在をお前に明け渡そうではないか』

憎しみもともに・・・・。

竜神の大きな体は、またたく間に闇に覆われた。
わずかばかり彼の手をひっぱるような感覚がしたが、竜神は、それ
に気付かないふりをした。

三百年前、村長の家の前で、年老いた村長とキサナが、彼の身を
案じたのに気付かないふりをした、あの日のようだ。

あかつきにみた夢　?

「そんなの絶対ダメだよ！」

あたしは、そう叫ぶと、鼻水を垂らしながら泣いた。

明け方に見る夢は、正夢なのだと父さんが言っていた。なら、さつきまで見ていた夢は、本当にあつたことなんだろう。

『龍神は、“ゆらぎ”に憑依されたのではない、自分の意思で“ゆらぎ”になつたのだ』

そこに同情すべきどんな理由があつても。

だとするなら、あたしが龍神様にしてあげられることは、ただ泣くことだけだ。たぶん、彼は、あたしの同情なんかいらないだろうけど。だからこれは、一方的な押し付け、同じように大事なものを失つた仲間としての。

人は、大事な人を失つた時、その人を失つたことが一番悲しいのだと考える。けれど、あたしは、それはちょっと違うんじゃないかなと思う。人は、大事な人を失つたことより、これからその人と積み重ねて行けただろう時間を失つたことが一番悲しいんじゃないかな。

例えば、あたしなんかなら、父さんが作ってくれたご飯を、みんなでわいわいしゃべりながら食べる、そんな今まで当たり前に過ごしてきた時間を奪われたことが一番腹立たしい。たぶん龍神もそうだつたんじゃないかな？

そりやあの時代だから、楽しいことばかりじゃなかつただろうけど、キサナや村の人たちとこれからも積み重ねていけたはずの時間を奪われたことが、一番悲しかったんだよ、きっと。

だから、龍神が、その時間を奪つたものを憎むのは、当然だ。あたしが“ゆらぎ”を憎むのと同じように。

あたしの時間は、父さんと母さんを失つたときに止まってしまった。傷口もぱっくり口を開けたまま、少しも癒えちゃいない。

あたしは、“ゆらぎ”を滅ぼせるなら、自分の持っているすべてを犠牲にする。そして、父さんと母さんと聖樹と、もう一度四人で暮らせるなら、この世界のすべてと引き換えることすら厭わない。

そう、あたしは、本当に本当に、自分の家族が大好きだった。

あんまりにも当たり前にあつたから気付かなかつたけれど、家族が共にいなければ自分がどこに立つていいかわからなくなるほどに。

「竜神様、『ごめんなさい』

あたしは、あなたに同情はするけど、あなたを滅ぼすことをためらつたりはしないよ。もし、あなたが“ゆらぎ”に乗つ取られただけなら、こんなあたしでも助けてあげられたのかもしね。でも、“ゆらぎ”そのものになつたしまつたあなたは、まぎれもなくあたしの敵。だから、この夢を見せたヤツの策につまつま乗つて、あなたに手心を加えたりできないんだ。

だから・・・・・。

「本当にごめんなさい」

あたしは、ベッドの上に正座すると、守ヶ淵のほうへ向かつてぺこりと頭を下げるだけだった。

「緋奈、何をしているのですか？」

あたしが、ベッドの上で正座をしているのを見たエティエンヌが呆れたように言った。

ははは、そりや朝つぱらから正座して、ペこぺこ頭を下げてりや変に思うよね。

「えつと、これは何と言つか。ほら、日本人的な朝の挨拶よ。

今日も一日がんばりまーす的な?」

あたしは、言い訳にならないような言い訳を、『デリカシーのかけらもなく現れてくれたやがつたエティエンヌを、横目で睨みながら言った。

まったくノックの一つでもしろつていうのよ。まあ、この男にそんなことを言つたところで『あなたのどこを見て、女性として意識しろというのですか?』とかなんとか言い返すに決まつている。だから、賢いあたしは、黙つている、かなりむかつきはするけれど。

それなのに、エティエンヌは、あたしが睨んでるのなんかどこ吹く風で、食器棚からティーセットを取りだすと、当たり前のようにお茶を入れ始めた。

「それは、それは。どうやらわたしの知らぬ間に変わつた習慣が出来たようですね? それとも妙な宗教にかぶれましたか?」

「どんな宗教よ!」

あたしは、即行ツツ『口ミを入れた。まったく日本人が宗教にいい加減だからってなめてんのか。

「さあ、この国には、多くの神がいらっしゃいますからね。唯一の神を信じるわたしにはわかりかねます」

エティエンヌは、涼しい顔でそう言つと、トロピカルピーチティーをおいしそうに飲んだ。

「ふん、日本人はね、心が広いのよ。だいたいひとりの神様しか許さないってどんだけ心が狭いわけ? さすがあんたんとこの神様だわ」あたしは、ベッドから降りると、コーヒーメーカーのスイッチを入れながら、へへんと笑つた。

日本対フランスの宗教戦争勃発である。あたしたちは、いつものごとくにらみ合つた。

でも、次の瞬間、エティエンヌは、ふいに表情を緩ませ、あたしの頭をポンポンと叩くと、食器棚から新しいコーヒーカップを出してあたしの前に置いてくれた。

「頬に涙がありますよ、何かあつたのですか?」

ああ、もう、まいっちゃう。そこをつつこまれたくなかつたから宗教戦争を始めたのにさ。まったくYな男だよ。

「ええっと、なんだか悲しい夢を見ちゃつたみたい」

あたしは、曖昧に答えた。別に隠したかったわけじゃないんだけど、どうやって説明したらいいのかわからなかつたのだ。

「明け方の夢は、正夢になると言います。もし、話すことで樂になるのならこいつでもお聞きしますよ」

優しい言葉に、また鼻水が垂れそうになる。だつて、エティエンヌが父さんと同じことを言うなんて想像もしてなかつたんだもん。それに、昨日からやけに優しいしゃ。

そんなわけで、単純なあたしは、鼻をぐずぐずいわせながら、夢の話をすっかり話してしまつた。ついでに夢を見せたのは“ゆらぎ”なんじやないかといふことも。

エティエンヌは、あたしの話を聞いた後、しづめらべじつと考え込んでいたけれど、

「緋奈の考えは、おそらく間違つていませんよ。ジャンヌも“ゆらぎ”と同化してしまつたものを解放したことはありません。おそらく不可能だったのでしょう。

だからと言つて女性のあなたに、罪悪感を持つなどいつのは、無理かもしれませんが、こればかりは割り切るしかありません」

と、Blue est Blue iron blueの瞳を覗らせながら言つた。

ああ、あたしと竜神様以外にもいたのだ。他に代えられないものを失くし、傷つきながらも生き続けなければならぬ人間が。

刹那、あたしは、冷たい彼の手を取つて、『つらかつたね、わかるよ』と慰めてあげたくなつてしまつた。

でも・・・・自分のためじゃなくエティエンヌのために、それはやめておいた。あたしたけは、傷をなめ合つために一緒にいるんじゃない。“ゆらぎ”を倒すために一緒にいるんだ、ということを忘れちやいけないのだ。

「Le consentement . soldat compagnon . (了解、戦友さん)」
あたしは、そう言つて、おどけて敬礼をした。
『soldat compagnon (戦友)』という関係が今の
あたしたちには、一番ふさわしいのだから。

繰り返されたゲーム ?

> . i 3 4 5 3 9 — 4 2 7 2 <

左から、緋奈、エティ、冴子、シャルル、竜神様。

イラスト：

彩都めぐり

「もう、立つてらんないよお～。学校に行つたら確実に死んじやつ
よお～！」

あたしは、セブンイレブンで待つていた冴子に、「おんぶお化けよ
ろじくもたれかかると、ぐじぐじと泣き」と言つた。

あの後、乙女ゲームで言つなら、一気に親密度が上がったかに見
えたあたしたちだけ、エティエンヌの鬼教師ぶりもまた上が
ついて、あたしは、ぴくりとも起き上がりなくなるまでしごき抜
かれたのだ。絶対、アイツってドSだよね。それとも・・・シンデ
レ?

「よしよし、継承者稼業も大変ね。RPGのレベル上げより地道じ
やないの」

冴子は、あたしの頭を撫でながら「うう」と、ぽこっと口の中に
チヨコレートを放り込んでくれた。

「ありがとう、冴子。マジ生き返るわあ～」「
口の中でチヨコが、ほわんととろけていく。
(うんまい～～！)

Melt ykis s 抹茶味は、レッドゾーンになつていたヒット
ポイントを二割ほど回復してくれた。まあ、あたしのヒットポイン
トなんて薬草でMAXになっちゃうくらいなもんだけど、トホホ。
あたしは、冴子の愛とチヨコで回復し、聖藍学園行きのバスにな
んとか乗り込んだ。国立病院が途中にあるため、いつも爺ちゃんと

婆ちゃんで満員のバスに、なんとか一人分のスペースを確保すると、あたしたちは、すぐおしゃべりを始めた。

「今日もある男、来ると思う?」

「シャルルくん? まだ転校一日目なんだからそりゃ来るでしょう隣であつーと舌打ちの音。

冴子さん、そのお嬢さん顔で舌打ちってマジやめて欲しいんですけど。つていうか、そこまでキレイですか、シャルルくん?

「そいえば、昨日、エティエンヌが変なことを言つてたな。あたしが、シャルルくんと一緒にいたときだけ、あたしの気配がたどれなかつたって」

そうなのだ、昨夜のエティエンヌの話は、突き詰めればそういうことになる。あんまりにもエティエンヌが心配してるから話しそびれてしまつたけど、気配がたどれなかつたのはたぶん、シャルルくんが一緒にいたからじゃないかな?

「えつ、アレは、ただの変態じやなかつたの?」

「変態つて、冴子さん・・・・・」

「初対面の女性に付きまとう男は、普通、変態カテゴリーに分類されるわよ!」

冴子は、妙にうれしそうな顔になつてそう言い放つた。

あのさ、変態カテゴリーつて何?

もう、あたしは、何も言い返せなかつた。

しかも、話が微妙にずれてつてるのはいいとしても、冴子が、何度も『変態』と大声で言つもんだから、あたしたちへの注目度は、切なくなるくらい高かつた。

あたしは、冴子の肩をつんつんつにして、回りを見るよつて言つてから、

「シャルルくんがどういうカテゴリーに属するかは知らないけど、一般人と言うカテゴリーには入らないかも知んないよ」と、声をひそめた。

エティエンヌは、あんなドウでも『導きの騎士』、その力を抑え

るなんて普通の人間に出来るわけがない。でも、彼は“ゆらぎ”と思えないしな。あたしは、「うーん」と考え込んでしまった。

「つてことは、あの変態を人間でも“ゆらぎ”でもない第三の勢力つて思つてるわけ？」

「うん。偶然、たどりなかつたという可能性は、捨てきれないんだけど、なんというかシャルルくんつてマジうきさとくさいんだよね」「そうでしょう？　あの変態は、変態な上に、めちやくちやうさんくさいのよ！」

げつ、そんな大声で、鬼の首でも取つたかのよう言わないでよ。もう、このバスに乗れないじゃなしの、しくしく。

でも、シャルルくんをけちょんけちょんにけなす冴子は、いつもより元気そうで、上気した顔は、いつもより三倍（当社比）いきいきして見えた。

だから、あたしは、親友の言葉に「そうだね」と笑つて答えた。

『次は、終点、聖藍学園前、聖藍学園前』

バスのアナウンスが、高校生ばかりの車内に響く。あたしたちは、後輩たちに続いてバスを降りると、2-AHRのドアを勢いよく開けた。

「おはよう！」

けれど、いつも賑やかな教室は、お通夜のようだった。

「どうしたの？」

冴子は、輪の中で一番暗い顔をした工藤友香に声をかけた。

でも、友香は冴子の顔を見るなり、わつと泣き出してしまい、代わりに隣の優奈が答えた。

「うん、それがね。友香んちの里香ちゃんが昨日から行方不明なのよ」

「友香の妹の？」

「うん。塾の帰りに、友達と神明町の稻荷神社まで帰つてきたらしいんだけどね、そこから行方不明なのよ」

「お稲荷さんからうちまで百メートルもないの……人通りだってあるし……だから……でも、こんなことになるなら迎えにいけばよかつた……」

友香は、そう言つと、手に顔を伏せて泣きじやくつた。

彼女の家は、実は父子家庭なのだ。

一昨年、交通事故で母親を亡くしてから友香は、母親代わりになつて、年の離れた妹の面倒を見ていた。だから、友香は、悲しいほど自分を責めてしまうのだ。

でも、聖藍学園は、私立の進学校、他の高校と比べものにならないくらい厳しい。友香は、勉強と家事と妹の面倒と、頭が下がるほど頑張っていた。

一月前、あたしが両親を亡くした時も、何度もあたしのアパートを訪ねてノートのコピーを置いてってくれた。

「あなたは、悪くない！」ここにいるみんなは、あんたが頑張ってきたのを見るんだからね」

あたしは、喉を詰まらせながら言つた。

「そうだよ！」

優奈も言葉を合わせた。回りにいた女子たちも鼻をぐずぐずいわせながら、うんうんうなづいている。

「ありがとう、緋奈。みんなもありがと！」

あたしたち、2・AHRの女子一同は、放課後、里香ちゃんの写真を手にほうほうを探しまわった、里香ちゃんの手掛けりを求めて。けれど、その結果は、芳しくなかつた。いいや、芳しくなかつたどころではない。山手市で行方不明になつたのは、里香ちゃんひとりだけじゃなかつたのだ。

なんと十一人の少女が、一晩で姿を消していた。

繰り返されたゲーム　?

あたしが、一歩も歩けないほどくたくなつて帰ると、エティエンヌがあつたかいミルクティーを入れて待つていてくれた。

『導きの騎士』さまは、どこに情報源を持っているんだか、すでに子供たちの行方不明事件を知つていた。

「ありがとう」

白い湯気の立つマグカップになみなみ注がれたミルクティーは、エティエンヌの気持ちと同じようにとつてもあつたかで、あたしは、しばらく無言でミルクティーを飲み続けた。

ふと思いついてテレビのスイッチを入れる。

すると、ちょうど九時のニュースが始まつたところで、見慣れた神明町の稻荷神社が液晶ディスプレイに映つっていた。

『昨夜、九時頃より、埼玉県山手市縁が丘に住む小学五年生の女の子が、消息不明となつています。関係者の話では、こちらの稻荷神社で友達と別れてから行方が知れないとのことです。しかも、山手市では同様の事件が一二件も起きており、山手警察署では、それぞれの事件の関連性について調べています』

取材記者と思われる中年男性が、口から唾を飛ばしてしゃべつている。

続いて、録画と思われる映像が流れる。

山手警察の前、行方不明になつた少女たちの家族が捜索願を出しに来たのを次々捕まえては、コメントをせがんいるものだ。

先ほどの記者が、母親と思われる女性たちに、

「ご心配ですね。何か手がかりを得られましたか?」

「何故、子供さんひとりを夜遅くに外出させたんですか? 母親の監督不行き届きといった意見もありますが」

「主人は、お子さんの行方不明についてなんとおっしゃつていま

すか?」

と、記者は、少しの気遣いも感じられないインタビューオーを繰り返している。母親たちは、自分を責めてげつそりやつれでいるというのに。

いつも思つことだけど、マスコニは、自分たちを何様だと思つてゐるのか。彼らは、大衆の知る権利を振りかざして被害者さえ蹂躪する。

だから、今までテレビをつけたことがなかつた。備え付けの液晶テレビが置かれていたが、一度もスイッチを入れる氣にならなかつた。

あたしは、無性に腹が立つて、主電源をoffにした。それだけでは飽き足らず、コンセントからぶちつと抜いてやる。

あの光景は、何の罪もない母親たちが責められている光景は、一ヶ月前の父さんと母さんの通夜の晩と重なる。あの時、彼らに責められていたのは、あたしだつた。

『何故、あなただけが生き残つたのですか?』

『ご家族を全員亡くされてこれからどうされるのですか?』

『ご両親が殺されたことに何か心当たりはありますか?誰かに恨まれていたと言つたような』

『お父様は、警備関係のお仕事をされていたそうですが、やはりそちらの関係で恨まれていたではありませんか?』

(やめてええええっ・・・・・・)

あたしは、耐えきれず、耳をふさいでうずくまつた。

何故、これ以上傷つけられなくてはならないのか。彼らは、親を亡くした子供にかける一かけらの情も持つていらないんだろうか?

おそらく・・・・・持つていないのだ。彼らは、その後もうずくまつて泣いている子供に、知る権利と言つ名の暴力をふりかざし続けた。

(そこまで言つなら、死んでやるわよ…)

あたしは、自暴自棄になり、雨の中を走りだそうとした。

けれど、そんなあたしを抱きとめた腕があつた。小柄な老人がマスコミの前に立ちはだかっていた。

『わたしは、紫堂家の顧問弁護士の神原と申します。

あなたがたは、親を亡くした子供に何をしているのですか。それ以上、紫堂家を侮辱するなら、あなた方を名誉棄損で訴えますよ!』

戦後を生き抜いてきた男の一喝だった。

あたしより小さな老人の気迫は、彼らを圧倒し、怒鳴られた男どもは、すじすじと尻尾を巻いて逃げて行つた。

今のおたしには、エティエンヌも、冴子も、神原さんもいる。けれど、あの母親たちには、誰かいるのだろうか、自分をかばってくれる存在が。自分を責めて、他人に責められて、あの時のおたしのように自棄にならないといいのだけれど。

「きつと誰かが支えになつてくれていますよ」

エティエンヌが、あたしの心を覗いたように言った。

「うん・・・・・」

ああ、あたしは、永遠にこの男には敵わない。あたしのことをあたし以上に知つていいような気がするから。

「ほら、鼻をかみなさい。若い女性がいつまでも鼻水を垂らしているものではありませんよ」

あたしは、エティエンヌが渡してくれたティッシュを受け取ると、音を立てて鼻をかんだ。

「えへへ」

なんだか恥しくなつて笑つてみせると、エティエンヌは、今までなく優しい顔をしていた。

「少し眠るね。一時間くらいしたら起こしてくれる?」

その後、エティエンヌが何と返事をしたのかわからない。あたしは、意識を飛ばすように眠つてしまつたから。

『「Jのままお眠りなさい』』と、答へようとしたエティエンヌの手に、すでに寝息を立てている緋奈の姿が映る。

「今日は、朝から大活躍でしたからね」

エティエンヌは、テーブルにつづぶせて寝ている緋奈を抱きあげると、ベッドに運んでやつた。

「六〇〇年とは、ずいぶん待たされたものです」

ラ・イール」とエティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニヨールが、ジャンヌ・ラ・ピュセルの末裔の守護についたのは、大天使ガブリエルに、ジャンヌの転生を約束されたからだ。

ジャンヌが火刑にあつた後、彼女が今度こそ幸せな一生を送れるなら、その傍らに自分がいなくてもいいと思っていた。でも、もう一度彼女に会いたいと思う気持ちは、年を経ることに大きくなり、膨れ上がった気持ちは、勝ち田のない戦にさえ追い立てるほどに育つてしまつた。

だから、ガブリエルの提案を聞いたとき、一も二もなく飛びついだ。だが、今、その短慮を悔後悔している。

（だいたい、一目会えたら満足だなんて、どこの大バカ者が考えたのだ）

彼女に再会した途端、自分の血は一瞬で沸騰した。キスして、抱きしめて、自分だけのものにしたい。自分がもはや人間ではないのだと、思いださなければ、その場で抱いていただろう。それほどに愛しい娘。

「あなたは、また重荷を背負わされて、それでも人のために戦うのですね」

先ほどまで、テレビを観ながら泣いていた少女の姿が、エティエンヌの脳裏によみがえる。

自分は、このお人よしの少女の傍らで同じ人間として生きていきたかった。愛して愛されて、長い人生をともにしたかった。

だが、それは、もはや impossible のだろうか。

エティエンヌは、涙の跡が残る緋奈の頬に手を伸ばすと、ゆっくりかがみこんだ。その赤い口唇に口づけるために。

初めは、触れるだけ、次は長く・・・・・。

緋奈の口唇は、ジャンヌと同じように温かくて柔らかかった。

「これは、マーキングです。

あなたは、昔から変な男を寄せつけますからね」

エティエンヌは、もう一度噛みつくような口づけをすると、すつ

くと立ち上がった。

「おやすみなさい、緋奈」

その言葉と同時に照明が消え、一人の少女を愛する男の姿も闇に沈みこんでいった。

繰り返されたゲーム ?

「ねえ、エティエンヌ。一度でいいからあとと仕合つてくれない？」

あたしは、エティエンヌが頷くのを待つて、練習用にしている棒を一本渡すと、自分用につもより少し短い棒を手にした。

「それでは、行きます」

短い棒を正眼に構え、切つ先をエティエンヌの咽喉元に向ける。双眸は、最前よりエティエンヌの目を捕らえて離さない。

じりじりと後退しながら、じつと見つめあう。

お互いがお互いの隙を見出そつと、全神経を傾ける緊迫した時間。じわりじわりと円を描くように、互いを中心にして動いていた二人の足がふいに止まった。

エティエンヌが、いきなり大上段から打ち込んできたのだ。

あたしは、その剣戟を一步退いて躲すと、すぐ左半身を翻し、横一文字になぎ払った。力に余裕のあるエティエンヌは、それを真正面から受け止めた。

乾いた木を打ち付け合つ大きな音が、いつもの川原に響き渡る。何合か、あたしが交わし、エティエンヌが受け止めることを繰り返した。

だが、あたしの剣の極意は、『先んずれば人を制す』だ。

あたしは、エティエンヌが、大上段に構えるより先に、身を縮め、彼の懷に入り込んだ。これでエティエンヌの長い得物は、封じられたことになる。

そして、立ち上がりざま、切つ先を咽喉元に当てれば、The Endだ。

「やれやれ、今回は、わたしの負けですね」

エティエンヌは、おどけて頭の上に手を上げた。

あたしは、ふふと笑って、バサインを返してやつた。

「これは、なんという剣術なのですか？」

「うーん、紫堂家流小太刀かなあ？うちの父さん、武道の達人だつたんだよね」

そうなのだ、うちの父さんは、あれで要人のSPなんぞをしてたから、あたしと聖樹には、多少武道の心得がある。といつても護身術くらいにしか役立つてないけどね。

「この戦法は、すぐ読まれちゃうから一回こいつきりだし、身が軽くないダメだから、女性向けなんだよね」

と、あたしは続けた。

「そうでしょうね。

そう言えば、あなたは、わたしの次の手を読んでいたのですか？」

「ううん、違うよ。っていうか、三手先まで読んでたっていうのが正解かな？」

相手の手を見て、先の先の先まで読む。これが、日本式の剣術なんだ

あたしは、Blue est Blue in blueの瞳を覗きこむように言った。エティエンヌが、あたしの言いたいことをわかつてくれるといいなと願いながら。

「日本式・・・・・？」

あなたは、まさか？」

「うん、実は、ジャンヌのレイピアは、使いづらいんだ。

そりや、ラピールじゃなきや“ゆらぎ”を倒せないのは知ってるよ。だから・・・・・ジャンヌの剣を小太刀に打ち直せないかなと思つて」

「打ち直すのですか、ジャンヌの剣を？」

エティエンヌの双眸がまたたく間にグレイに翳つた。

「うん、レイピアみたいな両刃刀は、日本人には使いづらいんだよ。これから強い敵と戦うつてのに、レイピアじゃ確実に後れを取っちゃう・・・・・」

あたしは、エティエンヌの「」機嫌をつかがうよつて、おわるおわる言つた。

エティエンヌが、ジャンヌの剣を打ち直したいなんて話を嫌がるだろうとはわかつていた。

けれど、あたしにフェンシングは向かない。向かないというより、もう小太刀の型が出来ていてから覚えづらいというのが本当のことなんだけど。それに、今からフェンシングを覚えるより、ある程度覚えている剣術を使つた方が効率がいい。これから強い敵と戦うならおさらだ。

「緋奈は、レイピアより小太刀がいいと言つのですか？」

「まあ、ぶつちやけて言えば、そういうことになるかな？」

それに、あたしは、ジャンヌの末裔かもだけど、日本人なんだ。

父さんもじいちゃんも“侍”だったしね

これを言えば、たぶんエティエンヌは傷つくだろう。でも、この問題を解決させなければ、あたしたちに勝ち目はなくなる。

「かも、ではありません。あなたは、間違ひなくジャンヌの子孫です。六〇〇年間、あなた方を見守つてきたわたしが言つのですから間違ひありません」

「うん、それはすっごく感謝してるよ。

でも、エティエンヌ。あたしは、ジャンヌの子孫だけど、ジャン

ヌじゃないんだ。彼女とは違う人間なんだよ。だから・・・・・

「いいえ、あなたは、ジャンヌです！」このわたしが、六〇〇年、

待つっていた、あなたは、ジャンヌの生まれ変わりなのです

エティエンヌは、あたしの言葉にかぶせるように言つた。

「えつ・・・・・・」

あたしは、そう言つたきり、次の言葉が出ない。

もちろん、エティエンヌの言葉を『あなたの勘違いじゃないの』と笑い飛ばすことは出来た。でも、ことジャンヌに関する限り、エティエンヌが間違つことはない。彼は、ジャンヌのためにだけ存在

し、ジャンヌのためにだけ生きてきたのだから。
ふいに乾いた笑いが起る。

なんだ、そうだったのか。エティエンヌが、怒ったり、説教したりしつつも優しくしてくれたのは、あたしがジャンヌの生まれ変わりだつたからなんだ。それなのに、少しばかれているんじゃないかつて勘違いして、どんだけお調子者なんだよ、あたし。

「あつははははははははっ・・・・・！」

あたしは、体をよじらせて笑った。

自分がバカ過ぎて、笑いが止まらない。あまりのおかしさに地面に膝をついて、手で地面を叩いて、それでも笑い続けた。

「それでさ、あたしつてジャンヌに似てるわけ？」

「あなたとジャンヌは、瓜二つですよ」

エティエンヌは、あたしの問いにハッとしたよつて答えた。

「はは、そつくりなんだ」

そりやあたしにジャンヌを見ちゃうよね。

あれ、なんだか苦いものがほっぺたに落ちてきた。苦いものは、どんどん落ちてきて、ウザいほど顎を伝つて、スカートにぽたぽた落ちていった。

「やめてよ、あたしは、紫堂緋奈だよー ジャンヌじゃない。もし生まれ変わりだとしても、あたしたちは、違う人間なんだよー」

あたしは、そう絶叫した。

「あんたが、あたしを紫堂緋奈だつてわかるまであたしの前に現れないで。たとえ一生かかっても・・・・・。そりやあたし一人じゃ

“ゆらぎ”は倒せないかも知んない。でもね、あたしをあたしだと認めないあなたの助けは、金輪際、いらない！」

ようよう立ち上がると、あたしは、歩き出した。後ろでエティエンヌがどんな顔をしてるのか見ないままで。

繰り返されたゲーム　?

いつものセブンイレブンの前。

あたしは、待っていた冴子に「お待たせ」と声をかけた。

「どうしたの、あんた?」

冴子は、ぎょっとしたようにあたしの顔を見つめた。

自分でもわかつてゐる、かなりひどい顔をしてるつてことは。エティエンヌと別れて帰つてから、一時間半は泣いてたもん。

「大丈夫だよ、冴子。あたしは、大丈夫!」

あたしは、二の腕に力こぶを作つて見せると、親友の肩を抱いてバス停に向かつた。

今日は、何が何でも学校へ行かなくちゃいけない、あたしに出来ることなんてほんの少しだけど、それでも、やるべきことから逃げてはいられないんだ。

「緋奈、あんた、変ったわね」

冴子は、さつきまで痛ましそうに見ていた顔に笑みを浮かべて言った。

あたしが「そうかな?」と返すと、ちょうど向こうからバスがやってきた。

けれど、いつものバスは、回送かと見間違つて、ガラガラだった。

「すつゞく空いてない?」

「うん、やっぱりあの事件の影響かな」

五人くらいしか乗つてないバスは、怖いくらい静かで、あたしと冴子は、後ろの席に並んで座ると、声をひそめて話し始めた。

「緋奈、あんた、騎士さまと何があつたの?」

うつ、冴子さんつてば、いきなり訊きますか?しかも、なんでエティエンヌ限定なんすか?

でも、あたしは、普段と変わらずに答えることが出来た。

「それがさ、あたしつてば、ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりなんだってさ。笑っちゃうよね。なんの冗談かっちゅうの！」

「でも、あんたは、泣いたんだよね？それに、冗談だとも思わなかつた、そうでしょ？」

「そうだよ！あのエティエンヌが、ジャンヌLOVEのエティエンヌが、ウソつくと思えないじゃん」

あたしは、ムキになつて言い返した。

「それで、あんたは、気付いたわけだ」

「うん、そうだよ、気付いたよ。あたしは、あの怒りんぼ魔人を好きだつて。ううん、もうエティエンヌのいない毎日に戻れないって思うくらい大好きだよ。

でも、あたしにだつてプライドがある。あたしの後ろに他の女を見てる男と一緒にやつていけないんだよ！」

また鼻の奥がツーンと痛くなる。

それに、あたしは、エティエンヌにあたしだけを見て欲しかつた。それが、どんなに我が儘なことだと知つていても。

「うーん、あんたの言つことは間違つてないけど、騎士さまも不憫よね。あんたは、彼が六百年も待つてたジャンヌの生まれ変わりなわけでしょ？」

冴子は、妙にエティエンヌに同情的だつた。

「そりやそうだけど、あたしとジャンヌは、まったく別の人間だよ。あたしは、日本人だし、神のお使いでもないしね。

だいたい、大天使ガブリエルの“ガ”的字も見たことないわ！」

あたしがそう言いきると、冴子は、呆れたようにため息をついた。「あんたたちつて前世でもそうやってケンカばかりしてたような気がするわ」

ははは、それだけは、賛成です、冴子さん。

あの女心のこれっぽっちもわからないエティエンヌとうまくいく女性なんて、今も昔もいるわけないもん。

「「おはよー」」

あしたたちが、教室のドアを開けると、クラスメートは、全員、集まつていた。他のクラスは、ガラガラだつていうのに。

ふふ、たまにいるよね、いつも遅刻ギリギリに来てるくせに、台風とかだと妙にはりきつて来ちゃうやつ。うちのクラスは、いつもやらそんな変わったヤツの集まりらしい。

じつして、クラス中が朝っぱらから雁首揃えてるのは、昨日のコースを見たか聞いたかして、友香のことが心配でたまらなくなつたからに違ひない。母親から『今日は、学校を休みなさい…』って言われたろうに。

「まったくまいっちやー。昨日の夜、みんなからじやんじやんメールが来てさ。うちのお父さんなんか感激して泣いちゃつたよ～」と、友香が言つ。

はは、やつこいつあんたもわいきから泣き笑いしてるじやんか。

友香から聞いたところによると、友香親子もあのインタビューの時、警察にいたらし。ふたりは、入り口で茫然としてたんだけど、『父子家庭じゃもつといじめられるかも』と考え、裏口からこいつをり抜け出したといつ。

そんな世間の冷たさをひしひしと感じてた友香親子のところへ、クラスメートからばんばんメールが届き始めた。どのメールも『大丈夫?』とか『俺はおまえの味方だ』とか『明日は俺もお前の妹を探すぞ』とか書かれていて、友香のお父さんは『友ちゃん、世間つてめぢやくぢや優しいぢやないか』と、男泣きに泣いたらしい。

そりやね、事件は、少しも解決していないし、友香親子は、昨晩も一睡も出来なかつたと思う。でも、ひとりぢやないとわかつただけで、人は、強くいられる。結局、人を救うのは、人でしかないん

だよね。

あたしは、そんなことを昨日より晴々した友人の顔を見て思った。

「みんな、座れ。S H R やるぞ！」
ショートホームルーム

担任の山田さんが、前扉を開けて入ってきた。みんなが、バタバタと、自分の席に着く。

全員が座ったのを見届けた山田さんは、クラス中を見まわすと、にやりと笑つた。

「このクラスは、大バカ者の集まりだな！」って言いながら。

「「ひつどーい」」

と、何人かが返したけど、それでもみんな、笑つてる。山田さんの大バカ者が褒め言葉だと知つていてるから。

「だが、今日から当分の間、学校は休みになる。皆さま、お揃いのとこスマンがな。

そして、これから「ひつどーい」とは、大切だから耳の穴、かつぼじつて聞けよ。

いいが、絶対に一人で出かけるな、特に女子はな。帰りのグループ分けは、委員長に頼めるな」

山田さんは、お気に入りの冴子委員長様に顔を向けると、パチンとwinckした。

何人かの女子が、「山田さんつてば、キモーい」とはやしたてる。

山田さんは、わざとらしく咳をしてから、

「いいが、S H R が終わつたらすぐに帰るんだぞ。すぐにだぞ！」と、大きな声で言った。

「はーい！」と、みんなが小学生みたいに返事をする。

そうして、週番が号令をかけ、S H R は終わつたのだが、山田さんは、いつたん教室を出たくせにすぐ出戻つてきた。

「いいか、お前ら、本当に帰れよ。

お前たちに何かあると、俺が嫁さんに怒られんだかんな」と、頭

をぽりぽり搔きながら。

あたしたち2・AHRの生徒のほとんどが、山田さんを好きだ。
この「うだつあがらない、イケメンつておいしいの？」と言いたくな
るような中年教師が。

なんとかと言つと、人間として日本人として大切なことを教えて
くれたからだ。

まだあたしたちが入学したての頃、ひとりの男子が「古文や漢文
なんて大人になつて役立つと思えねえのにさ、マジうぜえよな」と、
うそぶいた。

確かに、古文や漢文だけじゃなく、微分積分も三次関数も、その
道に進まなきや必要になると思えない。ちょっと嫌な気分がクラス
中に漂つた。

すると、ちょうどそこに入ってきた山田さんが、
「原田、お前が今してゐる勉強はな、土台なんだよ。新聞ひとつ読む
にも政治経済の基礎知識がなきや少しも面白くないだろ。

お前らが、将来、勉強したいものが出来たとき、基礎知識つてヤ
ツがどうしても必要なんだよ。それを今、習つてるんぢやないのか？
それにな、俺はこう思つてる。学校は、勉強するだけのとこじや
なく、勉強の仕方を習うといじぢやないかつてな

と、言つたのだ。

そして、山田さんは、こうも続けた。

「俺が今、言つたことは、すぐにはわからんないだろうよ。

でもな、お前らはだいたい、理屈を考えすぎんだよ。何も考えな
いで無心にやつてりや、後で理屈がついてくる時もあんどうが！」
教室中がしーんと静まりかえつた。

あたしたちは、山田さんの言つた通り、本当のところはよくわから
なかつた。でも、いい大学や会社に行くために勉強しろ、と言わな
かつた教師は、彼が初めてだった。

それに、山田さんは、日本史の教師だが、教科書をほとんど使わ

ない。

「こんな読んでも、日本人をやめたくなつちやつからな」と言つて。

あたしが今、自分を日本人と誇るのは、山田さんがいてくれたからだ。

たぶん、みんながそうだと思つ。彼は、人間としての、日本人としての土台を、決して子供扱いせず教えてくれた、一人の大人として。

だから、みんな、心の中で謝つっていた、彼の言いつけに背くことをでもね、山田さん、あたしたちは、あなたの生徒だから、仲間が苦しんでいるときに見捨てたりできないんだよ。

「みんな、集まつて！」

冴子が、ひと声かけると、みんなが教壇のまわりに集まってきた。副委員長の島田くんが集まつてきた順にプリントを渡している。「プリントには、グループ分けとそのグループの担当する地区が大まかに書かれています。印がついてるのがそのグループのリーダーです。

リーダーは、何もなくても三〇分」と島田くんにメールする。終了時間は、一六時厳守。集合場所は、山手中央図書館です。何かわからないことがありますか？」と、冴子が声を張り上げた。

冴子つてば、こんなもんいつの間に作つたんだろ？

友香と島田くんを除く三十六人が九つのグループにきちんと分けられている。あたしの名前には、印。メンバーは、優奈とこないだまでお隣だつた榎原くんと・・・シャルル君だつた。

「それでは、搜索を開始します」

「紺奈、よろしくね。邪魔者がいるけど、僕は、あつとも気にしないからね」

と、シャルルくんが相変わらずＫＹな発言をしたといひであたしたちは、そろつて校門を出たのだつた。

あたしは、制服の上から白いだぶだぶのカーディガンをはおつた。カーディをはおつたのは、防寒のためはもちろんだけど、どこの生徒かを分からなくなるためだ。うちの制服、なにげに目立つからね。他の三人も、あたしと同じようにセーターをはおつたり、ジャージを重ねたりしている。

「さてと、どこからはじめますか？」

あたしは、デイバッグから冴子にもらつた縁が丘の地図を「じゃ」そ取り出すと、みんなの前に広げた。

すると、さつきからスマホで何かを検索してた榎原くんが、「僕たちのエリアには、里香さんが失踪した稻荷神社があります。やはりそこから彼女の家までを重点的に調べてはいかがでしょうか？ 街というのは、時間帯によって様子がまったく違うですからね」と、提案してくれた。

「そうだね、朝と夜じや歩く人も全然違うだろうしね」

あたしは、榎原くんの意見をそう補足すると言つた。

さて、ここであたし以外のメンツを少し紹介しようとね。

まず、さつきからスマホを後生大事に離さない榎原征爾くんは、アーミーオタク。特に戦闘機系のオタクらしく、よく机の上で「」ワイング」という雑誌を広げている。こないだ、横須賀に「ロナルド・レーガン」が就航した時なんか、学校を休んで見に行つたくらいだ。

ただ、彼のオタク仲間は、男子ばかりなせいか、女子とミニコニケーションを取れなくなつちゃつたらしい。だから、榎原くんがあたし以外の女子と口を聞いているところをあまり見ない。

成績は、冴子に続いて学年一位、本人いわく東大理?に進んだ後、防衛省に入るのが夢なんだといつ。ついでにいうと、シャルルくん

にあたしの隣から追い出されたのは、彼。

優奈こと、新宮優奈は、名前が示す通り、神社の家の娘だ。

けれど、彼女本人は、ぜんぜん日本的でないというか、明るい茶色の髪をゆるいおさげにした現代的な娘だ。渋谷あたりにショッピングに行くと、よくモデルにスカウトされるほど愛らしい顔立ちをしているが、本人は、まったく芸能界に興味がない。早く結婚して、いいお母さんになるのが夢だとよく言つてる。

成績は、あたしと同じで中の上といったところ。友香とは大の仲良しで、よく友香の家へ家事のヘルプに行つてている。

シャルルくんのことは……あたしもよく知らない。
フランスから留学しに来ることと、外面がいい割には、人を寄せつけないふうなところがあるってことくらいかな。

成績は、たぶんすごくいいんだと思う。うちの学園に中途編入するには、かなりの学力を要求されると聞いたことがあるから。

あたしと優奈は、ちょっと難がある男子二名を連れて、いつものバスに乗つた。稻荷神社に一番近い縁が丘一丁目で降りると、すぐ

に神社へ向かひ。

住宅街の一角にある稻荷社は、小さいながらも森があつて、隅々まで手入れが行き届いていた。

「こ」は、東松山の箭弓^{やのくわ}稻荷神社のお末社なんだ」と、神社の娘が言つ。

「んじや、神主さんにお話を聞いたらできないの？」

あたしは、少しがつかりしたように訊ねた。

「うん、まあ。でも、うちのお祖父ちゃんに聞いてみようか？ 確かこの本社の神主さんと知り合いだつたから」

「おお、ナイス！ 持つべきものは、友達と言つた、コネのある友人だよね。」

あたしが「お願いつ！」と拝み倒すと、素直な優奈は、すぐにお

祖父ちゃんに電話をかけてくれた。

優奈のお祖父ちゃんから連絡を待つ間、あたしたちは、稻荷社から友香宅までの道のりの探索をすることにした。

まず、なんといっても目撃者探しだよね。

「この女の子を一昨日の夜、見かけませんでしたか？」

見目の良いシャルルくんと、優奈を中心にどんどん通行人に声をかけさせる。もちろん、シャルルくんには女性を、優奈には男性を担当させたのは言つまでもない。

けれど、写真を見ても、みんな首を振るばかりで、まあ、イケメン外人のシャルルくんは、何度も写メを頼まれていたけどね。

「こんな事件があつたら外出は避けるでしょうね」

隣にいた榎原くんが、どんよりしてきた空を見上げながら言つた。あたしは、「うん、それに雨が降つてきそう」と、テンション下がり気味に答えた。

そんな時だつた、優奈の携帯のバイブが振るえたのは。

「もしもし、おじいちゃん？」

「うん、うん。神社の掃除は、近所の自治会の人たちが毎日交代でしてゐるね。それで何か変わつたことはあつたつて？」

「えつ、雨が降つていた？ 鳥居の前だけ？」一週間、雨なんて降つてないよね？」

「うん、うん、そうなの。いろいろありがとう、お祖父ちゃん。大丈夫、友達と一緒に帰るから心配しないで」「優奈は、祖父との会話を終えると、あたしたちの方へ振り向いた。

「聞いてた？」

「うん、ここだけ雨が降つたんだつて？」

「そつみみたい、マジ不思議だよね」

優奈は、ハムスターのように可愛く首をかしげた。

“雨が降つた”

それは、おぼろげな仮定が決定になった瞬間だった。

たぶん、少女たちが消えた場所全部で雨が降ったのではないだろうか？

「そろそろ雨が落ちてきやう。

それに、いう通行人がいなくちゃ聞き込みなんてムリだよね。あたし、ちょっと島田くんに電話してみるわ」

あたしは、人通りが途絶えてしまった通りに、所在無げに立っている仲間に向かって言った。

「もしもし、島田くん。他のグループはどうかな？」「あはは、今んとこ情報なしだよ」

「うとう。やっぱりどこも収穫なしか。冴子は、なんて言ひてる？」

「やつぱ、そうか。んじや、雨降りそつだし、一度集まつつか？」

「OK、んじや一時に中央図書館ね」

けれど、優奈おススメのベーカリーレストランでお皿を食べ、中央図書館に着いた途端、ものすごい雷雨になってしまった。（まるで、誰かに邪魔されてるみたい）

そう考えた途端、耳をつんざくような雷があたりに轟いた。

女の子たちの悲鳴があちこちで上がる。

ひどい雷と雨は、夕方まで続き、あたしたちは、閉じ込められたように窓の外を見続けたのだつた。

携帯のディスプレイが“20：55”と、表示されたのを確認すると、あたしは、境内に足を踏み入れた。もちろん、同行者なんてもんはない。

本当は、守ヶ淵に行きたかったんだけど、そこまで無謀になれなかつた。なんせ、エティエンヌに顔を出すなと言つてしまつたしね。あの後、雨がやむまで図書館にいたんだけど、一つだけ収穫があつた。小さな地元の新聞社が、この女児失踪事件を大きく取り上げてくれていたのだ。

そこに書かれた見出し『女児は、全員九時ジャストにいなくなつていた?』に、あたしの目はくぎ付けになつた。すぐに関係者のふりをして新聞社に電話してみると、ちょうど取材をした記者が電話口に出てくれた。彼は、先日のテレビ記者と違い、腰の低い、誠実そうな人物だつた。

行方不明になつた女児の従姉だと名乗つたあたしに、まだ若そうな記者は、「ご心配でしょう。僕も、山手市に住んでいるので他人事ではありません。何か、お手伝い出来ることはありますか?」と、親切に訊ねてくれた。

「ありがとうございます。実は、今日の夕刊の記事に、十三人全員が九時ジャストに失踪か?と書かれていますが、これは本当のことなんでしょうか?」

たぶん、向こうからしたらめちゃくちゃ失礼な質問だつたと思う。でも、若い記者は、少しも嫌がることなく、真摯に答えてくれた。

「はい、ありがたいことにご家族全員のお話を聞くことが出来ました。そのお話を総合すると、お嬢さん方は九時ちょうどに失踪なさつたように思えてならないのです。

例えば、かみ山手市神舞一丁目で失踪なさつたお嬢さんは、お母様と電話中だつたのですが、彼女の悲鳴と時報の音が一緒だつたと、お

母様が証言しています。僕が取材したご家族も皆、だいたい九時ごろとおっしゃっておられますしね。

「うがちすぎと思われるかもしませんが、僕は、九時ジャストに何か符号が隠されているような気がしてならないのです」

たぶん、これが記者魂というものなんだろう。

そりや“全員が、九時に失踪した”とは断言できないかもだけど、被害者から話を聞けば聞くほど、結論が一つに絞られてくる、なんてことがあるんかもしれない。

あたしは、絶滅危惧種に指定したいような記者にお礼を言いつつ、電話を切った。

その結果、あたしは、ここにいる、夜の稻荷神社に。

手水屋で両手と口を清め、拝殿の鐘を鳴らし、お供え物を置いてから、一拝、一拍手、一拝する。毎回と違い、参拝するので、ネットで作法を調べてきたのだ。

たぶん・・・いや九十九パーセント、ムリだろな。

でも、竜神がいるならもしかしてってこともあるよね。あたしは、せいいつぱい頭が焦げるほど祈りまくった。

十分後。

（やっぱ、ムリか。九時がなんたらつてのもわからずじまいだったな）

あたしは、仕方なくあきらめて家に帰りました。

ガゴーン！

「痛つ・・・・！」

いきなり、後頭部に軽いものが当たった。

「あんさん、これはなんでっしゃる？」

あたしは、頭にぶつかってきたものを拾いあげると、声の主の方へぐるりと振り向いた。

「えつ・・・・？」

なんと、賽銭箱の上に五十センチほどの白い狐がふかふか浮いているではないか。

そりや『お稻荷さん、姿を現してください』ってお願いしたんだから、驚くのは失礼だろ?とは思うのよ。でもも、あまりにもunbelievableだよね。だって、神様だよ、神様。

「えつと、それは、赤いきつねです。しかも、コンビニ限定のふつらお揚げ一枚入りなんですよ」

「そか、ふつらお揚げ一枚入りか。そりやあゴージャスやなあ。つて、違うやろ! なんで貢物がカツブリどんかと聞いとるねん!」

「おお、芸人にしたいくらい鋭いツッコミだ。本当に神様か?
すいません。ちゃんと油揚げを買おうと思つたんです。
でも、お風呂に入つてたらお豆腐屋さんが閉まつちゃつて。
だから、うちにあつた赤いきつね・ふつらお揚げ一枚入りで我慢してもらおうかと。やっぱダメでしたか?」

あたしは、揉み手しながらおそるおそる訊ねた。

「まあ、しゃあない、今回だけは許したるわ。でも、次はないで。
そこで、あんさんは、わしになんぞ聞きたいことがあるんやろ?」

と、さすがに神様、太つ腹なのか、しぶしぶ赤いきつねを受け取つてくれた。

「はい、わたしは、緑が丘三丁目に住んでいる紫堂緋奈と言います。
実は、一昨日、友達の妹がこの神社の前で行方不明になりました。
た。何か、ご存知ありませんか?」

と、あたしが訊ねると、今までおしゃべりだつた狐は、ふいに黙つてしまつた。

しばらく彼は、黙つたまま何かを考えてるようだつたけれど、

「わしは、あんさんが何をしようとしたのか知つとる。伏見の稻荷大神にもあんさんを助けるように言われとる。

だがな、あんさんを助けるゆうことは、あの龍神を滅するのに力を貸すゆうことや。わしは、あの龍神が好きやつたからどうも複雑なんや」と、淋しそうに答えた。

「はい、わたしも龍神様のことを考えると心が痛みます。でも・・・失踪した子供たちに何か罪があつたんでしょ？」「すると、狐は、小さく「そやな」と言ひ、

「あんさんが探しとる子供は、まだ生きとる。他の子供もな。

今は、守ヶ淵の蘭玉の中で守られとるが、それも長いことやないで」と、眉間に押さえながら答えた。

「長い」とじやない？ それってどのくらいですか？」

あたしは、あわてて訊いた。

そりや里香ちゃんたちが生きてたってのは、朗報ださど、コニッシュトが明日とかじや田も当てられない。

「そいやな、およそ十日つてとこやね。あの年頃の子供は、まだ体力がない故にな」

「十日！？ もう一回経つてるじやん！」

「ひらひら、落ち着くんや。あんさんが無暗に突っ走つて何ができるんねん。

ものは考えよつや、まだ八日もあると考へんかい？

だいたい、人は、いつから水の中で息が出来るようになつたんや？

「このまま行つたつて溺れて死ぬのがオチですよね」

はは、あたしってバカだ。

それに、“ゆらぎ”に子供たちを返して貰うこと言つたといふと素直に返してくれるわけないじやないの。

「そや、何事も準備が必要なんや」

「そうですね、帰つていろいろ考えてみます

「ああ、そうせい。

そや、あんさんごひとつ忠告つけておくれ。

短気は、損氣や。あんさんが守りたいもんを守るんには、心を殺さなきやあかんのや。誰かを好きやゆう気持ちは、確かに人を強く

しよるが、あんさんの場合はどうひや？弱くなつどりはせんか？」と、続けた。前足で『わかつとんのか』のかどばかりにあたしの頭をぺしゃし叩きながら。

かわいい姿をしてるくせに言いたいことを言つてくれると思つたけど、やつぱり神様は、神様で、彼の言つことがいちこけいもつともだつた。

「ありがとう、お稻荷さん」

あたしは、両手を伸ばすと、狐の小さな手を押し頑くように握つた。

「わしは、神様やで。

じやが、緋奈が頑張らんといの田の本もいけんようになるからな、あんじよつ氣張つてや！」

「はい、頑張りますと言ふたらいいんだけど、あたしなんかにできるんかな？本当は、いつも逃げてしまいたいと思ってるんだよ！」なんでだか、するつと本音が出て来てしまつた。初めて会つた相手だといつのに。やつぱり日本の神様だからかなあ？

「そりや逃げたくなつても当たり前やろな。

だが、あんさんはひとりじゃない、そうやろ？ わしたち、稻荷神もあるし、友達もある。何よりもあんさんを、あんさんだけ見とる相棒があるんと違いますか？

狐は、細い目をいつそう細めて言つた。

「そうだね、お稻荷さんは、三万社もあるつていうもんね。そこの神様が全員味方だつたら“ゆらぎ”も怖くないかもしない」

あたしは、白い狐の気持ちが嬉しかつたから素直に返事をした。

彼は、確かに一番偉いお稻荷さんにあたしの面倒を見ろと言われたんだろう。けれど、あたしの愚痴に付き合つてくれたのは、彼の気持ちなんぢやないかなと思えたから。

「そうや。稻荷だけではないで。あんさんが日本人やといつ気持ちを忘れん限り助けてくれる神は、きょうさん現れるや。

だが、緋奈、今日は、ここでしまいや。どうやら、本社の方から

お呼びがかかつとるみたいやさかい」

白い狐は、そり言い終えたとたん、ぱっと姿を消した。“赤いきつね・ふっくら油揚げ一枚入り”を持って。

「今度は、ちやんと油揚げを持つてくるからね」

あたしは、社に向かつて深々とおじぎをした。

「そういえば、あの狐さん、なんで関西弁なんだろ？」

はは、またひとつ疑問が増えてしまった。

けれど、稻荷神は、本当にいろいろなことを教えてくれた。

真実、守りたいものがあるなら私情は捨てろということだ。彼の言つ通り、独りよがりな恋は、とつとつ封印しなければ。それでなければ、誰も守れはしない。

狐さん、あたしは。この間まで、父さんと母さんの敵かたきが取れればいいやと思ってたんだ。でも、今は、友達が、友達の大事な人が泣くのがつらこから、もうちょっと頑張ってみるよ。本当にありがとう。

錯綜する想い　?

赤い鳥居の向い側に、淡い金髪が光っている。

あたしの知り合いで、あそこまで明るい金髪の持ち主は、なるべくなら会いたくない人間TOP5に入る彼だけだ。

彼は、そのまま家に戻らなかつたのか、昼に会つた時の黒のセーターにグレイのパンツのままで、あたしに向かつてぶんぶんと手を振つた。

「シャルルくん？」

「Bon soir. やつぱ、ここに来てたんだ。熱心に新聞を読んでたから来るんじゃないかなと思つたんだよね」

シャルルくんは、エティエンヌとタメを張るほどの絶世の美貌。その無駄にきれいな顔で笑うと言つた。

普通なら『なんでここにいるの？』と聞くんかもしれない。あの記事と稻荷神社は、どう考へてもつながらないから。でも、やめとく。“君子、危うきに近寄らず”つていうことわざがあるもんね。

あたしは、彼から五メートルほどとのじろりと立ち止まる

「そうなの？　んでも、これから帰るところなんだ」と、愛想笑いを浮かべた。なんで鳥居の中に入つて来ないんだろうと考えながら。「そりや、そこは、結界だから僕みたいなのは入れないんだよ」まるで、あたしの言葉が聞こえたようにシャルルくん。

「えつ、なんで？」

あたしは、今度こそ訊ねた。

「それは、なんで緋奈の考へることがわかつたのかつていう質問？それとも、なんで入れないのかつて質問なの？」

「両方でお願いします」

「前者は、緋奈の考へることはひとつでも分かりやすいから。後者は、僕は、じゅうた世界に属さないものだから。でもね、緋奈が、警戒する必要はぜんぜんないから嫌わないでね」

シャルルくんは、相変わらずまつたく裏なんかありませんって笑顔のまま言つた。

エメラルドの双眸をじっと見つめる。

ひとつため息をついて、

「わかつたよ、一応ね」と、返事をする。

たぶん、シャルルくんは、悪いものではないだろ？

でも、だからと言つてあたしの味方とはぜんぜん思えない。

「んじや、緋奈、一緒に帰る」

あたしは、彼の言葉に頷いて、一緒に歩き出した。シャルルくんが肩を抱こうとするのから逃げながら。

「緋奈は、つれないね。僕のことが嫌いなの？」

「ううん、嫌つていないよ、まだ。

でも、日本じゃ初対面の女の子にベタベタしたりしないものなんだ。よく覚えておいてね

「初対面？」

きみは・・・・・そうか、緋奈は、「記憶がないんだね？」

えつ？今、この人、なんて言ったの？

まさか、ジャンヌの生まれ変わりだと知つてんの？

あたしは、目を見開いたまま、茫然と立ち尽くした。

本当は、お稲荷さんの結界に戻つてしまいたいくらい怖くてたまらない。

「記憶つて？」

ひどい緊張で乾きまくった口唇が、やつと言葉を紡ぐ。

「そりや、ジャンヌ・ラ・ピュセルの記憶だよ。

きみは、ジャンヌの生まれ変わりだろ？」

・・・・・ジャンヌの生まれ変わりだろ？きみは・・・・・ジャンヌの・・・・・生まれ変わり・・・・・だろ？

シャルルくんの言葉が、頭の中で何度もリフレインする。

悲鳴を上げたいのに、喉は、張りついたように言葉が出ない。

(いやあ、エティエンヌ・・・・・・・・・)

あたしは、心中で絶叫した。

「紺奈、きみ・・・？」

あたしの異常にやつと氣づいたシャルルくんが、あたしの肩に手を置こうとした。あたしは、それを思いつきり振り払う。

「あたしは、あなたが神様だろ？と悪魔だろ？と、どうだつていい。

でも、あたしをジャンヌと呼ぶことだけは、絶対に許さない！」

あたしは、そう言つと、走つて逃げた、シャルル・アントワーヌ・モレシャンといつ恐怖から。

あれは、やつ当たりだったかもしねれない。

けれど、限界だった、彼の得体の知れなさに付き合つのは。

あつ、もしかしたらシャルルくんは、人と付き合つのに、慣れていないんかな。榎原くんは、女子限定だけど、シャルルくんにも榎原くんと同じような匂いを感じるから。

とりあえず、シャルルくんが心配して迎えに来てくれたのは、事実だし、明日、そこだけは謝ろう。

本当は、彼の正体を聞いた方がいいのかもしれない、ジャンヌの関係者ならなおさら。

でも、あたしのアンテナが、“ゆらぎ”の存在を知つてから研ぎ澄ましたあたしのアンテナが、シャルルくんに関わるなど言つてゐる。だから、あたしは、それに従うこととした。

「ただいま」

誰もいないと知つているのに、ついそう声をかけてしまう。アパートは、冷え冷えとしていて、あたしは、カーテンを閉めると、エアコンのスイッチをONにした。

「あたしもこれでいいか～」

キッチンの棚から赤いきつねを取りだすと、お湯を沸かした。

「いただきます」

あたしは、質素でジャンキーな食事を終えると、ティーポットに茶葉を入れた。トロピカルピーチティーを。

「エティエンヌ？」

机の一一番田の引き出しからランプを取り出し、その中のハートのジャックを抜きだしていく。

「エティエンヌ、本当にこじめんね。

あんたが許してくれるなら、もう一度あたしのパートナーになつてくれないかな？」

しばらく待つてみてもエティエンヌは、現れない。

「仕方ない、呼びだすかあ。あの呪文、マジ嫌なんだけどな。

「智天使の長、神の英雄の名を持つ聖天使ガブリエルよ。あなたの導きにより我が騎士を降臨させたまえ。

エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニヨール。大好きだから来てっ！」

ああ、背中がムズムズする。日本人になんていう羞恥プレイをさせるんだ、エティエンヌのヤツ。日本にはな、恥の文化があるんだぞ。

そんなことを口の中でブツブツ言つてたら、騎士さまがいつの間にか降臨していた。

「本当に大好きですか？」

第一声がそれですか、エティエンヌさん。

「当たり前じゃん、あんたは、あたしの大事な相棒だもん。

えつとさ、こないだは、本当にゴメン。ちょっといろいろあつたから疲れてて、あんたにハツ当たりしちやつた」

あたしは、笑つてぺこりと頭を下げた。

ちえつ、エティエンヌってば、相変わらずきれいでやんの。同じくらいきれいでもシャルルくんに魅かれないのは、やっぱり、あたしがエティエンヌに惚れてるからなんだろうな。

「いいえ、わたしのほうこそ緋奈にジャンヌを求めすぎました。

あなたがおつしゃつたように、緋奈は、ジャンヌではありません。人とは、魂と、記憶と、肉体とで出来ているものですから

「そりゃあ、DNAは、まったく違うだろね。

でも、この魂は、エティエンヌが愛したジャンヌのものだよ。だってさ、エティエンヌに初めて会つた時、不思議と懐かしかつたも

ん

あたしは、うつむいたままのエティエンヌの両手を取ると、じつ

と顔を覗き込んだ。

「わたしを懐かしいと感じたのですか？」

エティエンヌがやっと顔を上げた。

ああ、エティエンヌのBlue est Blue in blue の瞳が見れた。あたしこりては、世界で一番きれいな色だ。

「うん、きっとあたしの中のジャンヌは、エティエンヌに会えてうれしかったんだと思つよ」

ジャンヌもあたしと同じように、空を映したような瞳に見つめられたかったに違いない。きっと、たぶん、狂おしいほどじっくり言つた。

「ありがとう、緋奈」

「ううん、じつにそだよ。つていうか、これからもよろしくね。エティエンヌがいなくちゃ、『やうやく』は倒せないんだからわ」

あたしは、握ったままのエティエンヌの手をふんぶんと振りながら言つた。

けれど、けれど、あたしたちは、なんて悲しい恋をしているんだ
わ。

エティエンヌは、あたしの中のジャンヌを、あたしは、ジャンヌしか愛さないエティエンヌに恋してる。

それでも、あたしたちは、背中合わせのまま、一緒に戦い続けなければならない。だから・・・・。

「ねえ、エティエンヌ、一緒にお茶、飲まない？」

あなたの好きなトロピカルピーチティー、用意しといたんだ」

「それは、気が利きますね。

それでは、わたしは、ティーカップを用意しますね

エティエンヌは、キッチンの食器棚からカップを取り出し、ついでにあるものを見つけてしまった。

「緋奈、これはなんですか？」

「うん？」

ヒテイヒンヌは、あたしがさつとき食べた赤いきつねを指差している。

「赤いきつね・ふつくらお揚げ一枚入りだよん」

あたしは、やかんに水を入れながら答えた。

「だよん ジヤありません。」

いいですか、緋奈、今、食べた物が十年後のあなたを作るのですよ。

“ゆうわ”を倒すには、まず食生活の改善をしなくてはなりません！

まつたく、いちの騎士れまほ、母ちゃんかつていうの。

「あんたつてば、いちこひらひるねー。」

なんで、こんな男、呼び出しあやつたんだろう。」

「今、なんと言いました？」

「つるやこつてこつたのよ、つるやこつて！」

あたしは、そう言い返しながら、ビニカ安心していた、いつものあたしたちに、ロゲンかぱつかりしてゐ、いつものあたしたちに戻れたことに。

「あ、そうだ。昼間、パンプキンパイを買つといたんだつた。あんたも食べる？」

「つていうか、食事は、できるの？」

「あたしは、ずっと気になつていたことを聞いてみた。
お茶を飲んでるんだから、ご飯も食べられるんじゃないかなつて思つてたんだよね。」

「もちろん、食べられますよ。」

「食物から栄養を取る必要はありますせんが」

「なんだ、早く言つてよ。」

「ご飯つてさ、一人で食べるの味氣ないんだよ」

「あたしは、一人分のパイの用意をしてから、お茶のお代わりを入れた。」

「」、「これは、おいしいですね」

一口食べたエティエンヌが、目を丸くしている。

「よかつた。昼間に行つたベーカリーレストランでテイクアウトしていだの。」

パンがめちゃくちゃおいしかつたから、パイもおいしいかもつて思つたんだ。

「それでは、いただきます」

「あたしは、いつものように手を合わせた。」

「日本人は、何故、食事の前に、“いただきます”といつのですか？」

「あんたたち、キリスト教徒の食前の祈りと一緒にだよ。あなたの命を、わたしの命にいただきますつて意味だもん。うちの国は、どんなもんにも神様がいるつて考えだからね」

「八百万ですか？そんなに神がいて面倒にならないのですか？」

「ならないんじやないかな。それが普通だと思つてるしね。」

あ、神様と言えば、あたしに神の加護がないっての訂正するわー。」

「は？」

「いやあ、考えてみたら、あたしに父なる神（キリスト教の最高神）の加護があるわきやなかつたんだわ。だつて、キリスト教徒じやないんだから」

どうやらジャンヌに父なる神の加護があつたように、日本人のあたしには、八百万の神の加護があるらしい。

「だからさ、ジャンヌは、キリスト教徒だから父なる神の加護があつた。あたしは、日本人だから八百万の神の加護があるってこと。ぶつちやけ“ゆらぎ”は、キリスト教世界の妖しだから、うちの国には関係ないんだけど、ジャンヌの生まれ変わりが日本に生まれちゃつたからさ、仕方なくうちの国の神様たちは、あたしを助けることにしたんじゃないかな？」

まさか、この国を無に帰すわけにいかないしね」

あたしは、狐さんと会つてから考えていたことをとつとつと話した。

「そ、それは。あなたの考え方だと、父なる神と八百万の神が知り合いのように聞こえますが？」

「えつ、そうじゃないの？」

日本人なら神様同士は、みんな友達と思つてると思つけどな。だから、どこの宗教も否定しないしい」

「わたしには、日本人がよく理解できません」

エティエンヌは、降参というように手を挙げた。

まあ、エティエンヌは、フランス人だから日本人がわからなくても仕方ないでしょ。そこは、あきらめとくわ。

「そいで、神様の加護の話に戻るんだけどね。

実は、お稻荷さんがね、あたしの味方をしてくれるらしいんだ

「お稻荷さん？」

「あ、お稻荷さんってのは、稻荷神だよ。宇迦之御魂神うかのみたまのかみってのが本当の名前。

白い狐があ使い神で、日本じゃ一番信仰されてる神様なんだ。日本に三万社ほどあるかな」

「はあ・・・・・・」

エティエンヌは、どうも飲み込めないらしい。やっぱ、この人外人だわ。

「仕方ないな、百聞は一見にしかず。明日、お稲荷さんに会いに行つてみようよ。お願いしたいこともあるしね」

「お願いしたいこと?」

あたしは、エティエンヌがいなかつた時に起つたことをざつくりと話した。

友人の妹たちは、“ゆらぎ”になつてしまつた竜神に守ヶ淵に監禁されてること。その命は、後一週間ほどだということなどをだ。「だから、お稲荷さんに偉い竜神様を紹介してもらおうと思つてんの。

人間じゃ守ヶ淵に入つて子供を助けるなんてこと出来ないもん」「そうですね、確かに溺れ死にますね」

「まあ、エティエンヌがぱつと行つて、子供たちを助けてくれるつていうならお願ひするけどね」

「それは、出来ません。

確かに呼吸を必要としないわたしは、水の底に入ることは可能です。

でも、わたしが緋奈にしてあげられるのは、あくまでもサポート。それを破つたら、わたしは、あなたのそばにいることが出来なくなります」

エティエンヌは、大真面目に答えた。

まったく相変わらず自虐的なんだから。そんなこと、とっくに知つてるつてのにさ。

「はい、はい。んじゃ明日の朝、一緒にお稲荷さんにお会いに行つて。ということで、あたしは、お風呂に入るからね」

あたしは、クローゼットからパジャマを取り出すると、エティエン

又にバイバイと手を振つた。

「ずいぶんと大荷物ですね」

エティエンヌがあたしの旅行バックをひらりと見て言った。

「うん、まあね。“そうだ、京都へ行こう”なんてことになるかも
だからね」

あたしは、母さんが買ってくれた旅行バックをぶんぶんと振りながら言つた。

「そのギャグは、まったく面白くありませんね」

うわつ、あたしのギャグがもの見事に切り捨てられちつた。しょぼーん。

「それより稻荷社へは、場つなぎで行かないから、しつかり姿を消してよ」

「なんで、そんな面倒くさいことを？」

「この罰あたりが。

巡礼者は、エルサレムに徒步で行くでしようが、それと同じよ！
だいたい、場つなぎで行つたら気持ち悪くてしゃべれなくなるじゃないの！」

あたしがそう言つたとたん、エティエンヌは、かすむみづに姿を消した。

こんな早朝、誰かにそういふとは思わないんだけどね。でも、念には念を入れねばいかん。

あたしは、もう店を開けてるお豆腐屋さんで、油揚げを十枚買うと、おっちゃんが、「稻荷社に行くんかい？ 若いのに感心だね」と、油揚げを一枚サービスしてくれた。

そして、いつものセブンイレブンの角を曲がり、緑が丘一丁目の点滅している交差点を渡ると、そろそろ稻荷社が見えてくる。

あたしは、鳥居の前で立ち止まる。相棒の名前を呼んだ。

「エティエンヌ、出てきていいよ」

姿を現したエティエンヌと一緒に鳥居をぐぐる。

よかつた、うちの騎士様は、結界に拒まれない存在らしい。

昨日と同じように手水屋で清めをしてから拝殿へ向かう。鐘を鳴らし、油揚げを置いてから、二拜、二拍手、一拜する。

「お稲荷さん、お手すきだつたら出て来てくださいませんか。今日は、出来たての油揚げもありますよ」

わざわざから隣で、コイツ、何してるんだ？って顔のエティエンヌを無視して、あたしは、目を閉じて深く祈った。

数分ほどして、

「おお、大正屋の油揚げやんか。

あのおっちゃん、いい仕事しめるからな。うれしいわあ～」とい

うのんきな関西弁が聞こえてきた。

もちろん、昨夜と同じように狐さんせ、賽銭箱の上にぶかぶかと浮いている。

「フ・・・・・・」

ふふ、エティエンヌつてば、三歩くらい後ずさりしてやんの。

昨日、親切にも白い狐が、お使い神だと教えといたんだけどな。

「うん、『ママ豆腐もおいしいんだよね』

あたしは、やあ！と手を上げながら答えた。

「緋奈、昨日の今日でどうしたんや？」

狐さんは、相変わらずひょうひょうとした様子で、あたしの隣のエティエンヌを面白そうにながめている。

「うん、今日は、うちの相棒の紹介ついでに、むけむけとお願いしたことがあつて。

えつと、隣にいるのは、あたしの相棒の騎士、エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョール。あたしともどもよろしくお願ひします」

あたしは、エティエンヌとともに頭を下げた。

「ああ、よろしくな、ヒテイヒンヌはん。

なんや言いづらにな。ヒチはんでよろしくか？」

はは、ヒテイヒンヌつてば、めぢやくぢや面白い呼び名になつてやんの。せんかし、怒つてるだうつと思つたら。ヒテイヒンヌは、騎士が主にするように跪いていた。

「御意。若輩者ですが、お見知り置きくださいませ」

あたしと狐さんは、驚いてお互に顔を見合わせた。

「どうしたの、ヒテイエンヌ？ お稻荷さん、びっくりしてね」「緋奈、あなたこそ、気安くお稻荷さんなどと

この方は、非常に神格の高い神ですよ」

「うん、そうだよ。箭弓さんは、日本三大稻荷の一つだし、その縁起は、八世紀初頭に遡るくらいだもん。しかも、古くから坂上田村麻呂、源頼信と言つた名だたる武将を助けているしね

「それなのに、何故……？」

「それは、わしから答えてやるわ。

緋奈の言葉づかは、ヒチはんからすりや不敬に見えるかもしれん。

だがな、この田の本では、神と人の距離が近い。親子のようにな。

それには、わしには見えるんや。緋奈が、わしを心から敬い、父親のように慕つてくれとるんがな

ヒテイエンヌは、ハツとしたようにあたしを見た。

あたしは、それに頷いて、

「実はね、初めて“ゆらぎ”が怖くなくなつたんだ、お稻荷さんが味方だつて言つてくれたから」と、言つた。

すると、狐さんは、あたしの言葉を補足するよひ、ゆっくり語り始めた。耳をぴんと立てて、細い目を怖いほどますます細くして。「あんな、ヒチはん。わしたち、稻荷が緋奈の味方をしよう、思つたんは、この国が危なくなるからだけやないで。この子おが不憫だつたからや。

両親を亡くしよつた緋奈が、“ゆらぎ”なんてけつたいなもんを倒そう思つたんは、ただの復讐からやない。自分と同じよつに大事なものを失くして泣く子供があるのがいやからや。や。

エチはんは、緋奈が、ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりやさかい、“ゆらぎ”を倒すのは当然と考えとるかもしれん。
だがな、緋奈は、神から選ばれて“ゆらぎ”退治をせいと言われたわけやないで。自分から好き好んで茨の道へ足を踏み入れたんや。その違ひがわかるか？

それとな、エチはんには、聞こえんかつたかい？
この子おが、毎晩、“助けて、怖いよ”と叫んどるんが。
わしは、よう聞こえたさかい。緋奈を助けることにしたんや」「うわっ、狐さんてば、そんな恥ずかしいことを。昨日は、そんなこと、ちらつとも言つてなかつたくせに。

「わ、わたしは、確かにジャンヌの生まれ変わりの緋奈が、“ゆらぎ”を退治することを当然と考えていました。いいえ、“ゆらぎ”退治が緋奈の使命とすら考へてました。

だから、両親の敵を取るためだけ“ゆらぎ”を退治すると彼女が言いだしたとき、とても腹が立ちました。

何故、ジャンヌのくせに、神から選ばれた乙女のくせに、復讐などといつちつぽけな理由で“ゆらぎ”を退治しようとするのかと。世界を救うためではないのかと。

けれど、先日、彼女が『あたしは、紫堂緋奈だよ。ジャンヌじゃない。もし生まれ変わりだとしても、あたしたちは、違う人間なんだよ!』と言つた時、初めて気付いたのです。彼女は、ジャンヌとまったく違う人間で、ジャンヌの使命を押し付けられるのは、いい迷惑なんだと、

エティエンヌは、狐さんを田をそりざずに見ていた。

「どうか、気付いたんか。

もし、気付いていなかつたら足手まといやせかい、殺してまおつ
かと思つたんやがな」

あたしは、ぎょつとなつた。

「お稻荷さん、そんな冗談言わんと……」

いやだ、驚きすぎて関西弁が移っちゃつたじやないの。

「いいや、冗談やないで。」

あんさんを一番守るべき男が、あんさんを一番傷つけとる。そんな男、ようじらんわな。

それにな、緋奈。そんだけつたいな毛唐とくせきの道具に頬らんかて、この日の本には、三種の神器も十種の神宝かんだかひもあるよつてに。わしが、これからちょいと行つて天照はんから借りてきたるわ」

うわっ、狐さん、三種の神器つて、ちょっと行つて借りて来れるもんなの?しかも、天照大神つて日本の最高神では?マジやばすぎるよ、狐さん。

それに、あたしは……。

「お稻荷さん、やめて! それでもあたしは、エティエンヌと一緒に戦いたいの」

狐さんは、それが聞きたかったんだとばかりに、にたりと笑つた。「よしよし、よう言ったな、緋奈。

エチはん、緋奈が、あんたはんを選んじるさかい、取りあえずあんたはんに預ける。だがな、次はないで

「はい、肝に銘じます。」

一度と、緋奈を泣かせません」

エティエンヌは、膝をついたまま、深々と頭を下げた。

「まあ、いいやろ。

それで、緋奈は、わしに聞きたいことがあつて來たんやろ?」

と、狐さんは、あたしに優しい顔を向けた。

ああ、めちゃくちや緊張した。

でも、あたしは、相変わらずお稻荷さんをちつとも怖いと思えない。まるで、娘を嫁にもらひに來た男を試すみたいな雰囲気を感じたから。

「うん、偉い龍神様を紹介してもらえないかな?」

「そか、貴船に行くか？」

「うん、同じ竜神様なら、何かの手立てをもじれるんじゃないかと思つて」

「そやな、それが一番やろな

「でも・・・貴船神社の高たかおかみのかみ神は、人嫌いとの噂を聞いたことがあ

るんだよねえ」

あたしは、それが一番心配だった。せっかく京都くんだりまで高額の新幹線代を使って行つて、はい、会えませんでした、じゃ話にならないもん。

「そやな、確かに貴船の神は、ここ二千年ほど、人に姿を見せとらんな。

わしからも伏見の稻荷大神に連絡入れとくが、緋奈も伏見に寄つてから行くといいやろ」

せ、千年・・・?

それつて平安時代から姿を見せてないつてこと?

そんな神様が、あたしなんかに、ただの女子高生なんかに、会つてくれるの?なんか、めちゃくちゃ不安になつてきた。

「お稻荷さん、あたし、月に行ってウサギどじやんけんしてくる方が簡単な気がしてきたんだけど?」

あたしは、仔犬のようなウルつとした目で狐さんを見た。

「大丈夫や。案ずるより産むがやすし、つていうやろ?」

わーん、そんなことわざじやぜんぜん安心出来ないよ。だって、そうはいつても出産のときに死んじゃう人もいるんだよ?

「しゃあない、緋奈は、へたれやさかい。いいもん、やるわ

狐さんは、そういうと、ぽいっと何かを放つた。

「狐・・・・・?」

狐さんがくれたのは、手のひらに入つてしまいそうな小さな狐だ

つた。

「これは、一回だけ、あんさんの難儀を救つてくれるいうもんや。気をつけて行つてくるんやで」

「ありがとう、あんじょ、つ氣張つてくるわ」

あたしは、狐さんにお礼を言つと、疲れ切つたエティエンヌを連れて稻荷社を出た。

「土産は、生ハツ橋でいいで」という狐さんの声を背中にもらひながら。

水はすべてを流すか　?

『TO 泊子

FROM 緋奈

おはよっ。

戦線離脱して悪いんだけど、今朝、新幹線に乗って京都に来ちゃつた。

もち、エティエンヌも一緒にから心配いらぬいよんwww

はい、送信と。

あたしは、親友にメールを送り終わると、「うつわあ・・・・!」と声を上げた。伏見稻荷の紅葉が、めちゃくちゃきれいだったから。表参道のケヤキ並木の紅葉は、鳥居の朱と競つように秋の空に鮮やかに映えている。

でも、伏見大社MAPを見た途端、あたしのテンションは、急降下した。

『一の峰までのお山めぐりと呼ばれる巡拝コースは、4キロ（約2時間）程

あります』って？山道を一時間も歩けと？本堂に参るだけじゃダメかなあ？

すぐに箭やきゅう矢稻荷さんの手をバッテンにした姿が浮かび、あたしは、しぶしぶ本殿裏から千本鳥居に向かう山道を歩き始めた。

「うつわあ、すじこ」

昼なお暗い千本鳥居は、まるで異次元回廊のよう。このまま千と千尋の世界に誘われる様な気になってしまつ。

伏見稻荷は、京都駅からそんなに遠くない。それなのに、この空気の清浄さは、なんでだろう。金山をおおう紅葉と、いくつも滝と、五十ものお社。神がおられる聖地と言わんばかりの威容がここにある。

神は、確かにここにいらっしゃるのだ。

でも、あたしの足は、一の峰から再び本堂に戻つてくるまでにパンになつてしまつた。

「やばい。あたし、運動不足すぎかも」

父さんがいたころは、聖樹と二人でもう少し鍛えていたのに。あたしは、帰つたらトレーニングを始めることにして、門前町のお茶屋さんで、お稻荷さん（食べ物の方の）と甘酒をいただくことにした。

ゆつくつ甘酒をすすつてると、急に田^ひが落ちてきた。急がなくちや。

もう一度、手水屋で清めをしてから、本堂へ向かう。秋の日暮れが早いためか、すっかり人少なになつた拝殿には、すでに明かりが灯されている。

本堂の鐘を鳴らし、お供え物を置いてから、一拝、一拍手、一拝する。そして、田^ひを閉じ、深く祈る。

（箭弓^{やきゅう}稻荷さんの紹介で来ました紫堂緋奈です。お手すきでしたらお話を伺えませんか？）

しばらくそのまま、田^ひを閉じていると、ガラスが割れるよつなピシッと音が聞こえ、何か眩しいものが田^ひの前に現れたような感じがした。

ゆつくつ田^ひを開ける。

すると、箭弓^{やきゅう}稻荷さんより一回り大きく、目に痛いほどまばゆい狐さんが拝殿の縁に座つていた。

「緋奈、よく來たな。

箭弓^{やきゅう}のヤツが『緋奈は、もう來たか？』と、何度も遣いをよこしやがつて、うるさくてたまらんわ』

長い間、高い地位にいた老人のような声の伏見稻荷さんは、田^ひを細めて笑つていた。

「お会いできてうれしいです。

箭弓^{やきゅう}稻荷さんから聞いたんですが、わたしの“ゆうめい”退治を手伝つてくださるそうで心から感謝しています

あたしは、深々と頭を下げた。

「気にするな、これは、お前だけの問題ではない。

わたしたちだと一七〇〇年、守ってきたこの国を西洋の妖しに

いい様にされるのは、我慢がならないのだ。

それに、箭弓がお前をことのほか気にいっておる。まれにみる日本人らしい日本人だと言つてな。

ふむ。確かに、あやつの見立ては正しこよつだ。

緋奈は、見かけこそ西洋人のようだが、その心は、わたしたちと共にある。日本の神ならば、そなたを気にらぬ者はあるまい」「でも、わたしは、あなたたちに気に入つてもらえるような素晴らしい人間じゃありません。本当にどこにでもいる普通の女子高生で。“ゆらぎ”退治だつて世界のためとかじやなく、親の復讐のためだけにやるうつと思つてたんです。

今だつて、友達のためというか、あたしと同じように家族を失つて泣く人がいるのがイヤだからで。だいたい、あたしのこのちっぽけな手で守れるもんなんてそんなくらいなんです。

それでも、お稻荷さんたちは、あたしに力を貸してくれますか？

あたしは、悔しいけれど、自分の限界を知つてはいる。たぶん、フアクリティ（能力）をすべてもらったところで、ジャンヌには遠く及ばないことも。

だから、お稻荷さんたちが手を貸してくれなければ、すぐあの世行きだ。

「ああ、貸すとも。

お前が世界を救うために頑張りますと、簡単に言つような人間だつたら、お前に力を貸してやりたいと思わなかつたう。

だが、お前は、自分の無力さを知つた上で、この國の者が“ゆらぎ”的に泣くのはいやだと言う。それなら、お前がこの國の者を守りたいと言つなら、わたしたちは、お前の助け手となろう。お前の代わりに戦つことは出来ないが、出来る限りお前の手助けをすると約束しよう」「う

伏見稻荷さんは、あたしの顔の前にぶかぶか浮いてくると、その白い前足であたしの頬を包んだ。あたしがさつきから鼻水を垂らして泣いてるからだと思うけど。

「ありがとう、伏見稻荷さん」

あたしは、鼻水をすすりながらお礼を言つた。

「緋奈、そんなに泣くな。

箭弓のヤツにお前を泣かせたと怒られるではないか」

ああ、箭弓稻荷さんが、父さんなら、伏見稻荷さんは、お祖父ちゃんみたいだ。ふたりとも、とってもあつたかい。

あたしは、「うんうん」とうなずきながら泣きつけ、長い間、伏見稻荷さんを困らせてしまつた。

「あの、本殿に誰も来ないのって偶然じゃないですよね？」

やつと落ち着いたあたしは、こんなに長い時間、誰も本殿に来ないのは不自然だと気付いた。

「ああ、先ほど結界を張つた。

わたしも、貴船ほどではないが、人にはあまり姿を見せたくないのではな」

「そうなんですか、お手数をおかけします。

「そういえば、今日は、貴船の神様に紹介してもらいたくて来たんです。高たか神かみは、あたしに会つてくれますかねえ？」

「ああ、あやつには、いくつか貸しがあるのでな。お前に会うよう言いつけておいた。だから、会つてはくれるだろうが。何せ、変わつたヤツだからのう。お前の頼みをすんなり聞いてくれるかどうかは、わたしにもわからぬ」

あたしの問いに伏見稻荷さんは、何とも微妙な顔で答えた。

「そなんですか・・・

やつぱり、貴船の高たか神かみは、人嫌いなんかなあ。けんもほろろに追い返されたらどうしよう?

「といつても当たつて砕けるしかないではないか。虎穴とらあなに入らずんば虎児を得ず、というしな」

えつ、それって箭弓稲荷さんが言つた『案するよつ産むがやすし』より、リスクが高くなつてゐんですけど。

あたしは、仕方がないので、「当たつて砕けたら骨は拾つてくれださいね」と言つて、とぼとぼと帰つてました……。

けれどすぐ、伏見稲荷さんに、「緋奈、お前、土産を持って来てくれたのではないか?」と、呼び止められた。

あ、そうだ。ショックが大きくてお土産を買つてきたの忘れてたよ。

「はい、埼玉銘菓、草加せんべいです。

草加せんべいは、大きくて堅いもんなんですが、今日は、一口サイズを買つてきました。気に入つてもらえるとうれしいんですけど」あたしは、狐の手では食べにくいかと思つて小袋をあけ、その中の一枚を彼の口元に差し出した。ようは、あーん、だね。

伏見稲荷さんは、少しへどもどしていたが、すぐに覚悟を決めるとい、ぱくりと食べた。じぱりく煎餅を食べるバリバリと言つ音がする。

「これは、うまいものだな。

油揚げも好物なんだが、こう毎日では、いささか飽きて来てな」あたしから小袋を受け取つた伏見稲荷さんは、次から次へといろんな味の煎餅を食べている。うーん、あの手はどうこう作りになつているんだろう。ドラえもん的、不思議だわ。

「そりや、あたしも毎日、カレーは嫌ですね。

「といえば、箭弓稲荷さんから生ハツ橋を頼まれたんですが、あの方は、甘党なんですか?」

「甘党と言つわけではないだつが、アヤツもわたしと同じで油揚げやつ、稲荷寿司やらにいささか飽きてているのではないか?」

「ああ、なるほどね。そういう理由か。
「すごいよくわかります。

「それじゃあたしも今度は、甘いもんを買つてきますね」

「そうか、お前は、帰りにまた寄るのだつ?」

わたしにも生ハツ橋を買ってってくれ

伏見稻荷さんは、何故か嬉しそうに言い、「満月の阿闍梨餅もい

いのう」と続けた。

「わかりました。生ハツ橋と阿闍梨餅ですね」と、あたしは言つと、伏見稻荷さんにバイバイと手を振つた。甘党の狐さんの尻尾が、ゆらゆらと振られていたのは言つまでもない。

水はすべてを流すのか？

「まるたけえびすに おしおいけ
あねさんろつかく たこにしき
しあやぶつたか まつまんごじょう
せつたちやらちやら つおのたな
るくじょう ひつちょうとおりすぎ
はつちょうこえれば とおじみち
くじょうおおじで とじめさす」

稻荷山ハイキングで、めちゃくちゃ疲れたあたしは、手まり唄を歌いつつ、京都駅までだらだら帰った。まあ、伏見から京都駅までだと、最後の九条通りしか通らないんだけどね。

あれば、小学校に入つたばかりの頃、あたしと聖樹は、父さんに連れられて、「名探偵コナン」を観に行つた。確か、迷宮の十字路^{クロスロード}だつたと思つ。

映画の序盤、桜吹雪の中、赤い振袖の少女が、手まり唄を歌いながら、毬をつく。そのシーンがみょうに幻想的で、あたしは、スクリーンを食い入るように見つめてしまった。

たぶん、それからだつたんじゃないかなと思う。日本的なものに憧れを抱くようになつたのは。

もし、人生にもし、なんてないけれど、父さんと母さんが生きていたら、“ゆらぎ”なんものがいなかつたら、あたしは、古代史を専攻する学者になりたかつた。

だつて、京都は、不思議と帰つて來たつていつ気持ちにさせる街だから。だから、何故、帰つて來たという気持ちになるのか、あたしの一生をかけて調べてみたかつた。もう叶わない願いになつてしまつたけど。

ふと皿を上げると、京都タワーに寄り添つよつて、half moon。

なんてめまぐるしい一ヶ月だったんだね。特にエティエンヌと出逢つてからの一週間は、本当に、本当にいろいろあつて、マジ笑いたくなるほどだ。

でも、後悔はしない。これもあたしの選んだ道だから。

あたしは、伊勢丹地下で夕飯をテイクアウトすると、ホテルにチエックインした。相棒とふたりでご飯を食べるためだ。

「あのや、貴船は、遠いからなるべく早く出かけようと思うんだ」あたしは、向かいの席で、鶏五目御飯を食べているエティエンヌに言った。昨夜から、元気のない彼を元気づけようといろいろ買つて来たんだけどね、今んとこ成功してる気配はない。

「何時になりますか？」

「うん、八時頃かな？ 貴船から帰つたら、もう一度伏見に寄つて帰ろうと思つてるからさ」

あたしは、栗おこわの最後の一囗を放り込むと、「いやがつせま」と言つて立ち上がつた。沸かしておいたお湯で、エティエンヌの好きなトロピカルピーチティーを入れて、ちよつと張りこんで買ったマキシムのナポレオンパイを添えて出す。

「ほら、あんたの好きなピーチティー。

いい加減、元気だしなよ。お稻荷さんは、あんたを責めたつていうより知つて欲しかつただけだと思うよ」

「すいません、気を遣わせてしまいましたね。

少し自分がふがいなく思えただけですよ」

と言いながらエティエンヌは、笑つてを見せたけど、その瞳は、グレイに翳つたままで、あたしの好きなBlue est Blue in blueは、見れない。

でも、少しほつておこつ、これはたぶん、彼の問題だから。少し、ううん、だいぶ淋しいけどね。

「うつわあ、マジおいしいわあ～」

ナポレオンパイを一口食べたあたしは、うつとりと呟いた。

「エティエンヌも食べなよ。このケーキはね、世界一おいしいんだから

「・・・確かにこれは、贅沢な味ですね。

ですが、何故ナポレオンパイなんでしょう?」

「やっぱりそりや、ケーキの王様だからじゃないの?」

ほら、ナボナは、お菓子のホームラン王です、っていうじゃん」と、あたしは、適当なことを言つてしまかそうとしたんだけど、

エティエンヌは、

「ふつ、いい加減なあなたに聞いたのは、間違いでした。

だいたい、お菓子にホームラン王という意味がわかりません」と、

つっこみやがったのだ。

「そんなん言うならね、あたしだって『夜のお菓子つなぎパイ』の意味が分かんないわよ。あんた、わかる?」

あたしは、ニヤツと笑つて聞いてやつた。

「えつ、夜のお菓子・・・それは・・・レディが聞くことではありますよ」

と、言いながらエティエンヌは、少し顔を赤らめた。

ふふふつ。エティエンヌめ、あたしの術中にはまつたな。

「夜のお菓子つてのは、お土産に買つてきたうなぎパイを夜の団らんの時に、家族みんなで食べましょうって意味らしいよ。

エティエンヌつてば、どんな想像しちゃつたんかなあ?」

あたしは、にやにや笑いながら言つてやつた。

「あなたという人は、わたしをはめましたね」

「ふふふ、女子高生をなめてはいけないのだ」

あたしは、勝利宣言をすると、エティエンヌのナポレオンパイも

残らず食べてやつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9734x/>

聖杯を抱く騎士（シュヴァリエ）～Impossible Love～

2011年11月23日20時46分発行